

---

# NARUTO～転生と始まりと終焉～

魁斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NARUTO～転生と始まりと終焉～

### 【NZコード】

N7488V

### 【作者名】

魁斗

### 【あらすじ】

気づいたら長い行列に並んでいた主人公  
その列はなんと転生待ちの列だった！！

チートな主人公がNARUTOの世界で生きていく話です

## 転生

長い長い行列

その行列の一一番後ろに俺は居た

あれ？

俺なんで並んでるんだ？  
つてか「二」だ？

取りあえず前に居る奴に聞いてみる

「なあ

これなんの行列？」

「あん？

なんだ知らねーのか？

これは転生する為の行列だ

今回は神の暇つぶしでサイコロを降つて出た数だけ能力が貰えるらしいぜ」

転生？

転生つてあの？

つてか俺死んだんだな……

まあ別に前世には悔いがないか……ああ有ったわ……俺彼女出来なかつた

おい画面の前で笑った奴後で有り難いO H A N A S H Iをしてやる

あれから數十年間

はあ……漸く俺の番か……

つえ？何故そんなに掛かったかつて？ああ後から来た奴を先に行か  
したからな

何故そんなめんどくさい事を？つと思つだろ？

まあもうちょっとしたら分かるよ「汝が最後の転生者だ  
さあ眼の前に有るサイコロを振るえ」

俺は如何にも閻魔ですつて奴に言われた通りに眼の前に有るサイコ  
ロを振るつた

出た数は…… 6

びつやから俺は運が良いやしい

「ほつ

6か……まさか最後の最で出るとば……  
おい少年もう一度サイコロを振るえ」

……つえ？

「ど……どつこう事だ？

まさかわしねのは無かつた事になるのか？」

「いや

違うそのサイコロは特殊でな前世で良いことをすれば良い数に悪い  
事をしてれば悪い数にどちらもした場合は間ぐらいの数が出る  
そしてもし6の数を出した者が居れば次は普通のサイコロを降つて  
6プラス普通のサイコロで出た数の能力をやると詰つルールなんだ

へえへへ

「なり

お言葉に任せ

出た数は…… 3

……でいつやひ俺の運は普通ひっこな

「では $6 + 3 = 9$ 個の能力をやひり

言つてみる」

「先ずは転生者が居ない世界でNARUTOのパラレルワールドに  
転生」

「ひむ……

「いつまばら~」

「容姿を家庭教師リボーンのアラウディにしてくれ」

「三つまばら~」

「年はナルトと回りで」

「四つまばら~？」

「前世の記憶」

「五つまばら~」

「性別は男性」

「六つまばら~」

「自身の能力を分かつてその能力を完璧に扱えるように」

「ふむ……

聞いた所あまりチート能力は無いようだがいいのか?」

「良いんだよ

次の三つを貰えればな」

「ふむ

じゃあ七つ目は?」

「転生者の能力」

「転生者の能力?  
なんだその能力?」

「見た所

俺以外にも転生者がいて能力を貰つて行つた  
その能力だ

ああ似てる能力なら強くて使いやすいほうをくれ

これが俺が列を譲つた理由だ

「ふむ……

なるほど6つ目の能力はそう言つ事か……

閻魔?が言った通りに6つ目の能力はこのためだ

転生者の能力は強いがどんな能力か分からぬし使えなければ意味がない

「ふむ

少々驚いたが良いだろ？  
後二つは？」

「始まりと終焉で」

「？」

「どういう事だ？」

「簡単に言えば始まりは全ての始まり人間や神しろ始まりあった  
その始まりの力  
終焉とはどんなものにも成長があり終わりが来る  
その終焉の力  
この二つが欲しい」

「…………」「？」

「どうした？」

「何時まで経つても何も言わない閻魔？」に話しかける  
そしたら

「ククツ……ハハハハハ！……！」

いきなり笑い出した

何だ？頭が悪く成ったか？  
つとか考えて至ら

「転生者の能力って言つた時点で他の奴とは違つたがまさか此処までとわな

ツクク良からう

始まりの能力と終焉の能力をやろう

そんなに俺は可笑しかつたか？  
まあ貰えるなら良かつた

「それでは

その扉の奥が次の前が行く世界だ

閻魔？が後ろにある扉を指を指して言つ

「ああ～～

その前にお願いが有るんだが？」

「む？

何だ言つて見る」

「俺からNARUTOの原作知識だけ抜いてくれねえか？」

何故だ？原作知識があればやりやすいだろ？

「いや

それだと面白くないだろ？」

「ククツ

そう言う事か…良いだろ？

それぐらいなら俺の権限でもどうにか出来るだろ？

「そりゃ

ありがとう

「なに

氣にするな俺を笑わせてくれた礼だ」

「そうか……

じやあ俺は行く

そう言つて俺は扉を開けて中に入つていく

s.i.d.o 閻魔

「ククツ」

閻魔は先程の男性を思い出して笑つていた

「うん?

閻魔ご機嫌だな」

「ゼウスか……

閻魔の目の前には白髪で痩せ形の男性がいた

「何か面白い事でも有ったのか?」

「ああ

実はな……」

閻魔は先程の事をゼウスに話す

「ハハハハハ!!!!

人間にしてはユニークな発想だな……」

「だろ？」

今までには無限の剣製やら王の財宝やらで詰まらんかったがまさか最後にこんな奴が出てくるとはな」

「まあ

誰かは知らねーがそいつに神の庇護があることを……」

「神のお前が言つか……」

呆れた目で見た閻魔

まさか創造神ゼウスに面白いと思われている事を主人公は知らない

転生（後書き）

「おい作者」

なんだい？

「何故俺の名前が出てねえんだ？」

ああ……うん

いやね……君の名前が……ね？

「……なんだよ」

いや……余りにも可哀想でな……

「一体どんな名前なんだ？」

ああ……全 夜半音【ぜん 夜半音】……

「…………」

さてさて……主人公がショックしてますが次回もよろしくね

# 転生完了（前書き）

作者の魁斗です

「名前がまだ無い主人公だ」

まあ安心してよ

今回君の名前が出るから

な…何か主人公が壊れたので本編へgo-

## 転生完了

「あぶあぶあぶ……あぶ? (どうやら転生完了のようだ……あれ?)」

「

主人公は自身の声に疑問を持った

「ふふ」

疑問を持つていたら隣から急に笑い声が聞こえたのでみてみたら女性がいた

可愛いより綺麗な銀髪の女性がいた  
だがそんな事よりも主人公が気に成つたのは

「あぶつ! ! ! (デカつ! ! !)」

そうデカいのだ

……胸じゃないよ?

あついや確かにでかいけど……って何を言わす! !

コホン! !さてさて気を取り直して  
デカいのは身長だ

巨人ですか?とまではいかなくともデかい

そんな事を考えていたら逆方向から声が聞こえた

「この子の髪

君に似て綺麗な銀髪だね」

「ふふ

田はあなたに似て透き通るような水色ですよ

「ふふ

田はあなたに似て透き通るような水色ですよ

「紛れも無く僕達の子供だね」

「ふふ

「そうですね」

俺を見ながら2人はいつ

……まさか

俺は自身の手を見た

……小さい

「あぶぶ～～（赤ちゃんからなの～～）」

「ふふ

元気が良いわね

「そうだな

……そうだ

この子の名前を考えたんだが

思い付かなくてね

出来ればエミに決めて欲しいだ

何故名前つて言つた途端悲しく成るんだろ？

「そうね……アラン……アランなんどどうかじりっ..」

「アラン……いい名だね  
さすがHIM」

良かつた……何が良かつたのだろう?

「これからあなたの名前はアラン

青葉アランよ」

青葉アラン……それがこれからの俺の名前

さてさてあれから数時間後……

いま僕はチャクラの確認している  
ん?一人称や言い方が変わってるって?

ああそれはね只単に見た目がアラウディに成るなら俺って一人称よ  
りも僕の方が良いと思ってね

話を戻して

転生して僕は修行法を考えたんだけど……まあ赤ん坊の僕に何が出  
きるんだ?って話で取りあえずチャ克拉の確認をしようと思つ  
どれどれ……

数分後

随分……速く見つかったな

青い靄?みたいものがあった

それ以外にも赤色、薄い青色、薄い赤色、黄色、白色等々の靄?も  
感じられた

感じられたと同時に頭にチート能力の使い方等が流れてきた

白眼……写輪眼……永遠の万華鏡写輪眼……輪廻眼……ギアス……

直視の魔眼等や完成【ジ・エンド】……大嘘つき【オールフイクション】……知られざる英雄【ミスター・アンノウン】……光化静翔【  
テーマソング】etc……の使い方が頭に流れてきた

どうやら初めの青色の靄？以外は魔力、妖力、靈力、氣力等らしいな

……分けるのはめんどくさいね

……出来るか分からぬけどやってみようか

数分後……

……上手くいったね  
何をしたかつて？

チャクラや靈力等その他全てを一つにしたんだけだよ  
数分で出来るのかつて？始まりの能力で新しい能力を作つて終焉の  
能力で進化させて完成【ジ・エンド】で上手く操れるようにしたんだよ

そして作つた能力は合体【ドッキング】

効力は一度だけ自身が合体したい2つの力を合体出来る能力だよ  
何故一度だけかと言えば始まりの能力で強力な能力作るうと思つと  
チャクラ等を多く使うからだ  
なので一度だけと言う制限をかけた  
そして作つた能力を終焉の能力で成長させて合体したい能力の制限  
を無くしてチャ克拉等全てを合体した

合体した力の色は銀色みたいな靄だった

そして合体【ドッキング】は無くなつたさてさて次はチャクラコン  
トロールだね

……地味

凄く地味だ  
どんなだつて？

簡単に右の腕にチャ克拉を集中させてそのまま左腕、右足、左足に

移動させてるだけ

數分後

さて今日の修行は終了だね  
修行が終了した同時に腹が空いてきた

גַּתְתָּה

そんな時部屋のドアが開いた

「あらあら  
お腹すいたのね」

……そうだった！！

ん? 口調が戻ってるって?

いやいや今それどじろではないからね！――

「はい」

いっぱい飲んでね？」

數分後

ねえ……今羨ましいと思った人かみ殺すよ？

## 転生完了（後書き）

良かつたな  
普通の名前で

「まあね  
まあもし普通の名前じゃなかつたら作者をかみ殺してたよ（  
ボソツ」

ガクガクブルブル  
え…えっと…こ…今回主人公のアラン君が魔力等を一つにしてま  
したが完全なる作者の想像です  
合体させたチャクラ？の色が銀色だったのも作者の想像です

「ねえ  
なんで銀色にしたんだい？」

あああれね  
初めは金色にしようと思つたんだけどアラウトイには金色似合つて  
ないなって

「まあ……確かにね」

ならばまだ想像が出来る銀色にしたんだよ  
まあ紫も考えたんだけどそれだと面白くないしね

「へえ～～  
そりなんだ」

それではまた次回

「見ないとかみ殺すよ?」

ねえ

なんで雲雀さんなの?

「……アラウディの喋り方が分からなかつただけだよ……」

## 転生2年間の出来事（前書き）

第三話の始まりだよ~~~~~  
作者の魁斗です

「第三話が始まったんだね  
やあ主人公の青葉アランだよ」

さて今回は九尾事件と主人公のアランの決意が出てくるよ~~

「僕の決意?  
ワオ楽しみだね」

初めてワオ頂きました！～！

「君を見てるとかみ殺したくなるよ

「では第三話の始まりです！～！～！」

ツバ

逃げ出した作者

「逃がさないよ」

追いかけるアラン

「ギャアアア」

## 転生2年間の出来事

「転生完了」してから3ヶ月がたつた

僕は何時ものようにチャクラコントロールを行う

最近ではスマートに右手左手右足左足とチャクラを集中出来るようになつた

そして修行が終わつた時にいきなり部屋の扉が開いて父さんと母さんと何人かの忍が部屋の中に入ってきた

入ってきたと同時に母さんと父さんは僕を抱き上げてギュッと抱きしめて僕にしか聞こえない声で何かを言つた後他の忍の人々に僕を渡す

「それでは  
お願ひします」

父さんは何時も「一〇一〇」としていた顔を苦痛に歪め母さんは涙を流すのをこらえていた

忍の人は一度頷くと勢い良く飛び出していく

数時間後

あれから忍の人は僕をどこかの部屋のベッドに寝かせてどこに行つた

僕は何もする事が無かつたので少し寝ていた

誰かの声が聞こえてきたので目を開けると三代目火影がいた

「すまん……すまん

儂が不甲斐ないばかりにお主の母親と父親を……」

其処まで聞いて悟つた

(ああ母さんと父さんは死んだんだ……)

我ながら冷たいと思つた  
どちらにしても暮らしてたのはほんの数ヶ月なのだから悲しくない  
……悲しくないのになんで

「お主もやはり悲しいのか」

なんで涙が出てくるんだ  
なんで……父さんと母さん顔を思い出すんだ……  
なんで……父さんと母さんと暮らした日々を思い出していくんだ……  
なんで……なんで……一人の最後の言葉を思い出すんだ

『『アラン……』

私達（俺達）はあなたを（お前を）愛している  
私達（俺達）の息子に生まれてくれてありがと『

するこ……するこよ

するすぎだよ

死んじやつたら伝えられ無いじゃないか

僕も好きだよって……僕は転生して初めて泣いた  
泣いて泣いて決心した

僕はあの2人の分だけ生きて生きて最高の人生だって思えるぐらい  
生きて死んだ後は天国にいる母さんと父さんに自慢して色々な話をして『好きだよ』って『僕を産んでくれて……愛してくれてありがと』って伝えるんだ

それが僕に出来る最初で最後の親孝行だから……

一才時……

あれから色々あつたが僕は三代目火影の養子になつた  
養子になつたあと取りあえず立つことと喋れるように努力をした  
立てないと何も出来ないからね

そして最近漸く歩けるようになつた

話す事はまあ……少しごらい出来る

取りあえず歩けるようになつた僕は監視の目を盗んで変化の術と影  
分身の術を覚える事にした

変化の術はコツを掴んだら数分で出来た

影分身も転生者の能力の中にあつた超大天才のお陰で数十分で出来た  
超大天才とは名の通りに天才を超えた天才が大天才で大天才を超えた  
天才が超天才それをまた超えた天才が超大天才らしい  
どんな事でも人より速く習得出来るらしいよ

さて影分身を習得した次に終焉の能力で影分身を進化させる

進化した影分身の能力は自身のチャクラが無くなるまで影分身は消  
えないと言うチート能力になつた

影分身の術がチート能力に成つたあと影分身の術をして作つた  
だいたい10000人

10000人の僕は同時に変化の術をする

僕の影分身は鳥、蝶、虫etc……に変化した

影分身達に修行法方を教えて外に飛ばした

練習法方は簡単に1000人ほどに始まりの能力の特訓次に100  
0人に終焉の能力の特訓次に1000人に転生者の能力の特訓に2  
000に体術の特訓に2000人に新しい術の開発＆実践に使える  
ように特訓残りの3000人に実践練習つとこんな感じに分けた

二才時……

最近結構喋れるようになつたよ

10000人の影分身はあれから更に増やして約17000人ぐら

いになつた

新しく増えた影分身の割り振りは3500人を新しい術開発＆実践に使えるようにするための特訓に

残りの3500人は実践特訓に行かした

本体の僕は取りあえずチャクラコントロールの向上をしている  
チャクラコントロールだけは影分身に任せず本体の僕がしている  
僕も出来る事はする事にした

まあ一才の時点で原作のサクラ以上チャクラコントロールはあつた  
けどね

最近のチャクラコントロールの修行法は右手の人差し指だけに集中等と難しく成ってきたが何とかやつている

それから影分身を解くのはアカデミー卒業時に全て解くつもりだ

## 転生2年間の出来事（後書き）

「…………」

「どうやら作者は死んだようだ」「死んでないよ……」  
「……ツチ」

「まさかの舌打ちー!?」

「舌打ち向でしてなによ?」

「本郷さんへ。」

「本郷だよ」

「本郷に本郷?」

「本当に本郷だよ」

「本当に本当に本当に?」

「君……しつこいことよ」（殺氣

「す……すいませんでした」（ガクガクブルブル

作者が落ち着くまでお待ち下さる

「そ……それでは次回もよろしくね……」

「次回も見ないとがみ殺すよ?」

## 原作キャラとの出会い（前書き）

「今回初めての原作キャラが出てきます！――  
作者の魁斗です」

「本当かい？」

主人公の青葉アランだよ

「本當だよ  
……そしてアランのハーレム一號でもある」

「何か言つたかい？」

「な……何もないよ」

(よし聞こえなかつたな  
聞こえてたらかみ殺されたから良かつた……)

۱۷۶

ねえ今無性は君をかみ殺したいんだけど

「ツネ?」

「じめへ行くよーーーーー！」

「ギャアアア

つてか毎回こんなかん……ギャアアアア！！！！！」

## 原作キャラとの出会い

僕は三歳に成った

影分身修行から約一年たつた

今日は火影と一緒に日向一族に向かつている

どうやら青葉一族は木の葉でも有名な一族だつたらしい  
だからなのか有名な日向一族の娘の誕生日に呼ばれた

因みに青葉一族は今は僕しかいない

どうやら青葉一族は元々少なかつたらしくこの前の事件？で僕以外  
死んだらしい

アランは原作知識を忘れてるため九尾事件も忘れてます  
次の日

今は日向一族の娘の日向ヒナタの誕生日の祝いがあつた次の日ヒナタの父親とヒナタの稽古を見せて貰つたよ  
でも稽古の前に慌ただしかつたけど何かあつたのかな？ アランはヒナタ誘拐事件も忘れています

まあそれは良いとして

稽古を見た感想はヒナタははつきり言つて弱いね  
別に力とか強さではない強さならこの年で強い方だろうね  
だけど心が弱い……いや優しすぎなんだね

稽古を見せて貰つたあとヒナタはどこかに行つたあと帰つてきていない

ヒナタの父親

ヒアシと言つらじい

に探してくれない

いかと頼まれて暇だつたから探しに来たんだけど……  
全然見つからないね

「ひっく……ひっく」

うん?

誰かの泣き声?

取りあえず泣き声のする方へ行つてみようか

草木などの奥に行くと湖がありそこを探していたヒナタがいた

「やつと

見つかつた

僕は泣いてるヒナタに近づいてそつぱつた

s.i.d。ヒナタ

今日は私の誕生日

だから色々な人が私の誕生日を祝に来てくれた

私が色々な人をみていたら優しそうなおじいさんがやつて来てお父様とお話をしていた

話が終わつたのか優しそうなおじいさんは私を見てニコニと笑つて

「初めてじゃな

ヒナタちゃん君に紹介したい子が居るんじゃ  
君と同い年なんじゃけど会つてくれるかのう?」

私と同い年の子……

今まで私と同い年の子と会つたことが無いから不安だけど……

「こんな優しそうなおじいさんの知り合いなら大丈夫だよね？」

「は…はー」

「そうか

なら少し待つていておくれ

アラン！――

優しそうなおじいさんがアレンっと言つ名を言つたら後ろの人混みから私より少し背が大きくて太陽でキラキラ光る銀髪で透き通る青い瞳を持った格好いい男の子がやつてきた

「なに？」

「アラン

この子がさつき話していたヒナタちゃんじゃ  
僕は少しヒマシ殿とお話するからアランはヒナタちゃんとお話していくくれんかのう？」

「ふーん……  
まあいいよ」

銀髪の少年が答えたあと優しそうなおじいさんはお父様と話をしました

優しそうなおじいさんがお父様に話かけたと同時に銀髪の少年が私に話かけてくる

「僕は青葉アラン

呼び方は好きな呼び方で良いよ」

「わ…私は日向ヒナタです」／＼＼＼＼

私は恥ずかしさで顔を下に俯けた

「どうやら僕は嫌われたようだね」

アラン君は苦笑いする  
ち…違うよーーーー！

「それじゃ

儂達は行くからのう

また会おうヒナタちゃん」

話が終わつたのか優しそうなおじいさんはそう言つてアラン君と一緒に人混みに入つていった

初めて会つた同じ年の人なのに……

私は残念な気持ちで今日一日を暮らした

次の日……

今田もお父様と一緒に稽古をする

そう言えれば朝から何か騒がしかつたけど何かあつたのかな？ ヒナタは恐怖の余り記憶が飛んでいます

取りあえずお父様がいる稽古場に行つた

稽古場にはお父様と昨日の少年 アラン君

がいた

ビックリした私がお父様に聞いたら

「アラン君が日向の力を見てみたいと言つてな」

つと言つた

そうだつたんだ……

取りあえずアラン君が見ている以外は何時も通りに稽古に入つた

そして何時も通りに負けた

お父様は厳しく

「それでも日向一族の本家か！――！」

つと言つてきた

そして漸く稽古が終わつたと同時に私は重い足取りで庭を歩いていつた

そして私のお気に入りの湖について私は泣いた

泣いて泣いて何時間かたつた時後ろから声がかかる

「やつと

見つかつた

振り向いたら銀髪少年アラン君がいた

「なに泣いてるんだい？」

アラン君は私の隣まで来て私が泣いている理由を聞いてきた

私は素直に話した

お父様が言つた通り私は日向の落ちこぼれなんだ……私がそういうたらアラン君はいきなり

「フフッ」

笑い出した

私はなぜ笑つてゐるのかが分からなくて何故笑つてゐるのかを聞こう

と思つたら先にアラン君の口が開いた

「ヒナタ君は馬鹿だね」

「え？」

私は思いがけない言葉に畠然としていたらアラン君は続けて言った

「誰にだつて不得意な事はあるよ

勿論ヒアシ様にも僕にもね

それと同時に誰にも負けない得意な事だつて皆あるんだよ」

「……あるかな？」

誰にも負けない事……私にも

「あるよ

少なくとも僕は知ってるよ」

「つえ？」

私が誰にも負けない事

アラン君は知ってるの？

そう思つてたらまるで心の声が聞こえたかのように私の質問に答えた

「ヒナタは誰よりも優しい……それがヒナタの良いことじゅうだよ」

優しい……親戚皆に言われ言葉

初めは『優しい子だね』とだけど段々と『優し過ぎて忍じ向いてない』って言われた

アラン君の言葉を聞いて親戚の皆に言われた事を思い出していたらアラン君がまた話出した

「確かに優しそうだね  
やつぱり……

「でも優しいからこそ出来る事があるよ  
優しいからこそ他人の気持ちが分かる  
優しいからこそ困ってる人がいたら助けてあげられる  
誰にでも出来る訳じゃ無い  
だから ヒナタは凄いんだよ」ニコツ

初めてそんな事言られた

心の中が凄くポカポカしてきた

「じゃあ

帰ろつかヒナタ

アラン君は私の手を握りしめて歩き出した  
アラン君ありがとう

夜  
……

アラン君……／＼／＼

何でだろうアラン君の事考えると顔が熱くなってきたよ／＼／＼

私アラン君の事が好きなのかな？／＼／＼

……ああそう言えばアラン君私の手を握りしめて……ボンッ／＼／＼

アランが自分の手を握っていた事を思い出して顔を更に赤くするヒナタだった

## 原作キャラとの出会い（後書き）

「ピクピク

「今回死んだよう」「だから死んでないって……」……ツチ今度はかみ殺してあげるよ……」

「今不吉な声が……

と…とにかく初めての原作キャラはヒナタでした！！

次回（次回つて言つても直ぐですが……）は主人公設定です「

## 主人公設定（前書き）

「今日は主人公のアランの設定です  
作者の魁斗です」

「僕の設定かい?  
主人公の青葉アランだよ」

「そう君のプロフィールって言えば良いのかな?  
を書いたんだよ」

「へえ」

「勿論前世の名前とかもね」

「ピク……名前?

君かみ殺して欲しいの?」

「……つあ

え…えつと…」「めんなさい」

土下座

「許さないよ」

「ギャアアア

「…このネタばっかり…バタツ」

## 主人公設定

転生前（前世）	名前	全夜半音	転生後（現在）	名前	青葉アラン	転生前（前世）	年齢	年齢	転生後（現在）	年齢	好きなもの	嫌いなもの	仲間、小動物（人とかではなく猫とか） 戦い	甘いもの、ムカつく奴	髪の色	瞳の色	銀色	青色
---------	----	------	---------	----	-------	---------	----	----	---------	----	-------	-------	-----------------------	------------	-----	-----	----	----

容姿

アラウディを幼くした感じ

一人称

『僕』

ステータス

( ) 内は本気時です

筋力

B (特定不能)

速力

A (特定不能)

チャクラ

A + チャクラコントロール

A +

能力  
最強

チャクラA+は九尾並みのチャクラの約倍のチャクラ量です

神から主に貰った能力

転生者の能力

今まで転生させてきた人たちにあげたチート能力全て

始まりの能力

色々使い道がある

例えば古いものを新しく出来たり新しい能力を創つたりできる

但し大きい能力にを創る場合その能力を創るのに必要な分だけのチヤクラを消費する

終焉の能力

終焉つまり終わり

これも様々な使い道がある

例えば始まりの能力の逆で新しい物を古くしたり進化できる能力を進化させたりできる

何故能力を進化させられるかと言つたら終焉＝最終進と言つた感じで進化させられる

ぶっちゃけ始まりの能力と終焉の能力があれば大抵何でもできる

設定

知らず知らずのうちに死んでしまつて転生の列に並んでいた主人公取りあえず流れに任せて転生した  
容姿がアラウディだからアラウディみたいな口調にしようと思った  
が分からなかつたのでアラウディに似ている雲雀みたいな口調にしている  
だけど性格が違うので似てない時がある（逆に似てる時があるのかな？）

## 主人公設定（後書き）

「どうだつた？僕のプロフィールは……  
うん？作者かい？彼なら今閻魔に会いに行つてるよ  
そんな事は良いけど僕の前世の名前に触れたらかみ殺すよ？  
じゃあ次回もよろしくね？  
見なくてもかみ殺すからね？」

## 「つむは姉妹との出会い」（前書き）

「今日はタグに書いたとおり性転換原作キャラがでます！！」  
作者の魁斗です」

「誰かは分かりやすいね  
主人公のアランだよ」

「まあ確かに題名を読めば分かるよね……」

「分からない人は馬鹿だね」

「とりあえず本編スタート！！！」

## 「うちは姉妹との出会い」

ヒナタと出会つた時から約一年経つた

今日は「うちは一族に来ている

日向一族に続いて木の葉で重要な一族だ

何故日向一族「うちは一族が重要かと言つたら二つの一族には特別な瞳術を開眼する場合がある

それが白眼と「写輪眼」

日向一族は白眼

能力は相手の点穴や経絡系をみたり遠くの方を見ること等々できる  
「うちは一族は「写輪眼」

能力は相手の動きをが鈍く見えたり相手の術のチャクラの性質を色  
で見えたり相手の術を「コピー」したり等々ができる

因みに青葉一族にも特別な瞳術がある

全能眼と呼ばれている

だけどその全能眼は青葉一族の初代リーダーしか発動していないら  
しく能力は分からぬ

さてさて話を戻そつか

何故僕が「うちは一族に来てるか」といつたら

「うちは一族の長?」が青葉一族の生き残りの僕と会いたいらしくて三  
代目火影に言つたらしい

三代目火影何故僕に会いたいかを聞いたら何でも同じ年の娘がうち  
は一族だから友達がなかなか出来ないらしくて考えていたら青葉一  
族の僕の事を思い出したらしい

……まあ確かに木の葉でも重要な「うちは一族」更には長の娘と来たら  
話すらしいだろうね

その点僕はうちは一族と同等かそれ以上の重要な一族だからね……

まあそう聞いた三代目火影は僕に『行ってきなさい』と言つてきた  
ので暇つぶしにやつてきたんだけど……

遅いな……確かに十時に待ち合わせだつたよね……

因みに今は十一時です

間違えたのかな?

そう考えていたら後ろから声がかかる

「あなたが青葉アラン君ですか?」

「ワオ

僕の名前を知つてるなんて……君達誰だい?」

「ああ

ごめんね先に名乗るのが先立つたね

私はうちはイタチこっちが妹のうちはサスケよ  
ほらサスケ自己紹介だ」

「.....」

サスケと呼ばれた少女は姉のイタチの裾をギュッと握つて隠れる

イタチはサスケに自己紹介するようにサスケの名前を呼んだ

「別に構わないよ

名前は分かったからね

「さう?

「めんね

「謝る必要無いよ

それでこれから何処に行くだい?」

「さうねえ~」

僕がこれから何処に聞くと考え出すイタチ

……決まってないようだね

そう考えていると後ろから声がかかる

「ねえ

お姉さんこんな餓鬼共ほつとこで俺達と遊ぼうぜ?..

「さうさう

つとイタチにナンパをする小食動物たち

「嫌よ」

そんな小食動物の言葉をはつきりと断るイタチ

「良いじゃねえ……あん?」

「君達嫌がってるだから止めなよ」

足を叩いてこいつに目線が来たので思つた事を言つてみた

「なんだあ？」

「餓鬼は黙つてな！！」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね  
良じよかみ殺してあげる」

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ……！」

「あ…危ない…！」

小食動物が殴りかかってくると同時にイタチから声がかかるが今の  
僕には関係ないね

「行くよ」

僕は服の中に隠していたトンファーを取り出して相手の攻撃を交わ  
してカウンター気味に相手の横腹に攻撃する

「ウグッ！…！」

その勢いで回った後隣に居た男にも攻撃を仕掛けるがかわされた

「クク

そんな攻撃じゃ俺はたお……グッヘ…！」

トンファーに仕込んでいた鎖を出してもう一人の男に当てる

「君達弱いよ」

s.i.d.oサスケ

今日お父さんからあつて欲しい子が居ると言われ姉さんと共に待ち合せ場所にやってきた

「あなたが青葉アラン君ですか？」

待ち合せ場所に居た私より背が少し大きい銀髪の少年がいた  
その少年に姉さんが待ち合せをしていたアラン君なのかと聞いている

「ワオ

僕の名前を知ってるなんて……君達誰だい？」

『うやら彼が青葉アラン君だったようだ

「ああ

『めんね先に名乗るのが先立つたね  
私はうちはイタチこっちが妹のつちはサスケよ  
ほらサスケ自己紹介だ』

「…………」

私は恥ずかしくて話せなかつた

「サスケ」

姉さんは私の気持ちを知つてか背中を押してくれた

「別に構わないよ

名前は分かつたからね」

勇気が出なくて姉さんの裾をギュッと握つていたらアラン君がそう言つてくれた

「セウ？」

「めんね」

「謝る必要無いよ

それでこれから何処に行くだい？」

姉さんはアラン君に謝つたがアラン君は必要ないと言つた後ジーハー行くかを姉さんに聞いていた

「セウねえ~」

「ねえ

お姉さんこんな餓鬼共ほつとこト俺達と遊ばせり?<sup>ハシマリ</sup>」

「セウセウ

姉さんが悩んでいたら変な男組が姉さんをナンパした  
姉さんは綺麗だからね

「嫌よ

そつ考えていると姉さんはきつぱりと断つた  
さすが姉さん  
怖く無いのかな？

「良いじゃねえ……あん?」

「君達嫌がってるだから止めなよ」

二人組の男達は断れても諦めずに姉さんをナンパしようとしたらアラン君が止めた  
つて！危険だよ！――！――！

「なんだあ？  
餓鬼は黙つてな！！」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね  
良いよかみ殺してあげる」

相手の男達がアラン君を睨んで黙つてろと囁つとアラン君は相手を  
挑発？した

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ――――――」

「あ……危ない――――――」

姉さんはアラン君に言つたが私は何故か大丈夫だと思つた  
アラン君なら……つて

「行くよ」

アラン君はいつの間に持つっていたのか両手に持つているトンファー  
でカウンター 気味に1人倒した  
「ウグツ――！」

1人を倒した後アラン君はそのままもう1人も倒そうとして空中で

回転して攻撃をもつ1人の男に当つよつとするがかわされた

「クク

そんな攻撃じや俺はたお……グツヘ……」

何かを言おうとした男をトンファーから出でいる鎌で倒す  
凄い……

「君達弱いよ」

格好いい…… // / /

アラン君の顔を見ると自然と顔が赤くなる// / / side oイタチ

今日父さんからサスケと同じ年の子とサスケが会うので付き合つて  
あげてくれつて言われたので集合場所までやつてきたけど……  
何処に行くかか……

決めていなかつたわ……

私が考え方をしていると二人の男達が私をナンパしてきたが私が断  
つた

断つたのにまだ諦めていないのかまたナンパしてこよつとした

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

さつき会つたアラン君が男達に言つた

「なんだあ？」

「餓鬼は黙つてな!!」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね

良いよかみ殺してあげる」

ちよちよひとーーそんな挑発したらーーーーー

「餓鬼があんまり調子に乗んなよーーー！」

男達がアランを殴りつとする

「あ……危ない！！」

私はアラン君に声をかける

次の瞬間脳の中から取り出したトントンにて一人を倒した

「君達弱いよ」

やばい……惚れちゃつた／＼＼＼＼

sid oアラン

あの後ご飯を食べたりあまり外を出ない僕のために木の葉の里を案内してくれたり中々楽しめたよ

……けど二人共顔が赤かつたけど何だつたんだろうね？

「つむは姉妹との会話（後書き）

「はい原作キャララスケとイタチの性転換キャラが出てきました！性格があつてゐるかは分かりませんが出来ていれば嬉しいです。それから今回はアランのワオとかみ殺し宣言を初めて本編で出きました！！！やつた！！！」

「結構長く話したね

思わずかみ殺したく成ったよ……」

「アラン君は俺が嫌いなのかな？」

「？

何言つてゐんかい

「良かつ「嫌いに決まつてゐるでしょ」た……つてええええ～～～～～！～～嫌いなの～～～～」

「当たり前だよ

そんな事は良いからほやく終わらせなよ」

「そんなこ「はやくしないとかみ殺すよ?」は...はい...次回また会いましょう～～～～～～～～～～～～」

「次回も見ないとかみ殺すよ?」

## 原作主人公との出会い（前書き）

「今日は原作主人公のナルトが出ますーー！  
作者の魁斗です」

「ワオ  
楽しみだね

主人公の青葉アランだよ」

「まあ完璧にキャラ崩壊だけどね……」

「？」

何か言つたかい？」

「いや何も言つてないよ」

「……嘘だね」

「な……何故分かっ……つあ……」

「本当に嘘だつたんだね  
僕に嘘つくなんて……そんなにかみ殺して欲しかっただね」

トンファーを構えるアラン

「そ……そんな事は無いよ？」

逃げる準備をする作者の魁斗

「逃がさないよ」

「ギャアアア

ま…またこの流れ…ガクッ」

## 原作主人公との出会い

「お～～い  
アラン」  
うちは姉妹と出会つてから一週間位経つたある日三代目火影から会つて欲しい子が居るとまた言われたから　　三代目火影の庭で待つているんだけど……  
遅い……遅すぎる……

「お～～い  
アラン」  
後ろから声がしたので振り向いたら火影と火影の後ろに隠れるようしている金髪の女の子がいた

「遅かつたね」

僕は少し殺氣を出して火影に言つ

「ハハハハ  
そう怒るでない」

「……まあ良いよ  
今日は許してあげるよ  
それで僕に会わしたい子って誰だい？」

「おお  
そうじやつたそうじやつた  
アランに会つて欲しい子はこの子じゃ」

三代目火影は後ろにいた金髪の女の子を僕の前に出してきた

「ほらナルト

自己紹介じゃ

「う…うまきナルトです」

……何故口調に疑問があるのかな?

まあどうでも良い事だね

「そう

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風に呼んで良いよ

それで僕をナルトに会わせてどうしたいの?」

僕はナルトに自己紹介した後三代目火影に訪ねた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成つて欲しいんじや」

三代目火影は僕の間にそう言つた  
だけど疑問が一つ有る……

「?

何故僕何だい?」

そうこれが疑問

別に僕じゃなくても良いだろ? 逆に僕は自分の家からめつたに出ない

因みにアランは三代目火影の養子に成つてますが3歳の時から1人暮らしをしています(家はアランの父親の家)

「うむ

ナルトは友達作りが不得意でのう  
そこで余り友達が居ないアランと友達に成って貰おうと思つての」

嘘……ついてるね

何故分かるかつて？

三代目火影は嘘をつくとき自分の頭を撫でる癖があるからね直ぐ分  
かるよ

まあ別に本当でも嘘でも僕には関係無いね

「ふうん

別に構わないよ友達になるくらいならね

「そうかそうか  
良かつたのうナルト」

「う…うんー！」

ナルトは三代目火影の問いに戸惑いながら笑顔で答える

「それじゃあ

少しアランと2人っきりで話すかの？」

「うん」

「良いかの？」

ナルトに聞いた後僕にも聞いてきた

「別に構わないよ」

「それじゃあ  
後は頼むよ」

s.i.d.oナルト

今日お爺ちゃんから私の友達に成ってくれる子が居るけど余つかと言われたので会いに行つてみる事にした  
お爺ちゃんとお爺ちゃんの庭に行つたら  
庭には私の髪とは逆の色の綺麗な銀髪をした男の子が居た

「お～～い

アラン

お爺ちゃんが銀髪の少年      アラン      の名前を大きな声で呼  
んだ

銀髪の彼は顔を振り向けて

「遅かつたね」

不機嫌そうにお爺ちゃんに答えた

アランが殺氣を出したのは火影だけです  
それに少しだけ殺氣を出しただけなのでナルトに向いてもナルトは  
気づけません

「ハハハハ

そう怒るでない

「……まあ良いよ

今日は許してあげるよ

それで僕に会わしたい子って誰だい?」

「おお

そりゃつたそりゃつた

アランに会って欲しい子はこの子じゃ

お爺ちゃんと銀髪の子が話しているとお爺ちゃんが退いて銀髪の子に見えやすいように私を前にだした

「ほりナルト

血口紹介じや

「う……つかまきナルトです

私は少し緊張しながら言った

「そり

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風に呼んで良いよ

それで僕をナルトに会わせてどうしたいの?..」

アラン君は私に血口紹介した後お爺ちゃんに「アラン君と私を会わせて何をすれば良いのかを聞いていた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成つて欲しいんじや

「?

何故僕何だい?」

アラン君はお爺ちゃんの問いにそう答えた  
やつぱりアラン君も私なんかじゃやだよね……

「うむ

ナルトは友達作りが不得意でのう

そこで余り友達が居ないアランと友達に成って貰おうと思つての」

お爺ちゃんは私に気遣つて嘘を言つてくれた

私は友達作りが不得意ではなく私が化け物だから友達がいらないんだ

……

ナルトはまだ自分の中に九尾が居ることを知りません

「ふうん

別に構わないよ友達になるくらいならね

……え？

「そつかそつか

良かつたのうナルト」

「う……うん……」

私は初めての友達が出来て嬉しくて久しぶりに笑った

少しアランと2人つきりで話すかの？」

「それじゃあ

「うん」

「良いかの？」

お爺ちやんがアラン君と話すかを聞いてきて即答で答えた後お爺ちゃんはアラン君に良いか聞いた

「別に構わないよ」

「それじゃあ  
後は頼むよ」

お爺ちやんは最後にわざわざつれて行った

数時間後

あれから様々な遊びをしていた  
今している遊び終わつたと同時にアラン君がいきなり

「ねえ

友達作りが苦手つて嘘つてやるだよね？」

つと聞いた

心臓がドキンッて跳ね上がつたのが分かつた  
どうして？どうして分かったの？やっぱり私が化け物だから？

「まあ別に嘘でも構わないよ」

なんで？なんでいつも？？構わない？じゃあ私と友達に成つてくれないの？

「ナルトと友達なのには変わりないしね

私が化けも……っえ？

私はアラン君が言った言葉が分からなくて分からなくて今アラン君は何て言つたの？友達？友達に成つてくれるの？

「なにボーッとしてるの？ほら行くよ」

アラン君が私の手を掴んで走り出した

ドキドキ

何で？何でさっきまで大丈夫だったのにアラン君の顔を見たら顔が熱くなるの？

何でアラン君に手を握られるだけでこんなにドキドキするの？

何で……私アラン君の友達で終わるんじゃなくてそれ以上の関係に成りたいなんて思つんだろ？

ああ……そつか私アラン君の事が好きなのか……

そう考えていたら

「どうしたんだい？」

「顔が赤いけど……風邪かな？」

アラン君の額が私の額に当たる  
つえ？つちょ……ちょっとアラン君！？何してるので……いやじゃない  
けど恥ずかしいよ／＼／＼

「熱は無いみたいだね」

アラン君の額が離れていく

もうもう少ししていっても良かつたのに  
なんならキスしても／＼／＼

「でも顔が赤いから今日は安静にしとかないとね」

この後お姉ちゃんが来て寝室に行つた後アラン君は帰つて行つた  
アラン君……また会えたら良いなあ／＼／＼

## 原作主人公との出会い（後書き）

今回は後書きは無しにさせて貰いました  
理由は今回この後書きで「一つアンケートをしたい」と思っています

一つ目

オリジナル技を募集

オリジナル技は異常でも荷負担でも魔法でも魔術でも術でも何でも構いません

但し技の効力や出している時の変わりよつや見た目等は詳しくしてくれたら助かります

二つ目

原作通り？それともブレイク？

これは主にナルトとサスケです

まずはサスケですがアランに言われて復讐を諦めてアランと一緒に結構してうちは一族を復活させようと夢を見る

この場合はサスケの代わりのオリキャラが出来ます

それとも原作通りにさせるか

この場合はオリキャラは出ません

始めを選んだ方はサクラをオリキャラに惚れさせるかアランに惚れさせるかも投稿して下さい

次にナルトですが原作通りにドベかアランに修行をしてもらひそこ

そこ強くするか……どちらが良いでしょうか？

この一つ（三つ？）のアンケートは多い方で決めさせていただきます  
但しサクラがオリキャラに惚れても最終的にはアランを惚れるかも

し  
れ  
ま  
せ  
ん  
W  
W  
W  
W

## 田舎の木太娘との出会い（前書き）

「久しぶりの更新です  
……但しどうでもいい」ボソッ

「本当に久しぶりだつたね……何してたんだい？」

「うん？小説めぐ……あれ？アラン君今君の手にトンファーが見えるよ？」

何でだれ？そのトンファーを僕に対しても構えてるような……幻覚だよね！……疲れてるだけだよね！……！」

「安心しなよ……  
幻覚じゃないよ」

「安心出来ない……出来ないから……つてギャアアアア……！」

## 日向の天才娘との出会い

ナルトと出会いつてから数ヶ月が経つた  
今僕は久しぶりに日向家にやつてきた

日向家本家に入ろうとした時門の前で日向家を睨んだ少女が居た

?何してるんだろう?

僕は興味本位でその少女に話かけた

「ねえ

何してるの?」

「ビクツー!!

少女に話かけたら少女はビックリして此方を見た後口を開いた

「……貴方は誰ですか?」

質問を質問で返してきた

まあ知らない人(子?)に話かけられたらこりつなるね

「僕は青葉アラン

君の名前も教えてくれる?」

「私は日向ネジ……」

「日向?」

日向なのに何故日向家を睨んでいたの？

「！」に住むヒアシ様が私の父様を殺したからだ！！！！

話を聞くと僕が前來たときつまりヒナタの誕生日の日にヒナタは誘拐された時ヒナタの父親のヒアシが誘拐した人物を殺したらしい殺した相手は雲隠れの里忍らしく雲隠れはヒアシの首を求めたが本家のヒアシの首を易々出せないので影武者を出すことに決めたその相手がヒアシの双子の弟でネジの父親のヒザシに白羽の矢が立つたらしい

そしてヒアシはヒザシに掛かってる分家の呪印でヒザシを殺したらしい

偶然それを聞いたネジは本家を恨んでいるらしい

「分家は所詮本家の玩具

籠に入つた鳥だ！！空も自由に飛べない鳥なんだ！！！」

……？？

「君馬鹿かい？」

「な……なにっ！！！」

「鳥だつて空を飛びたければ自力で籠を出れる  
君だつて空ぐらい自由に飛べるよ」

「そ……そんなの……むりに……」

「無理じゃないよ……

僕だつて自由に居られるのに君が自由になれない何てないよ

……でも頑張つても出来ないなら……次は僕も手伝つてあげるよ

「……………っえ？」

ネジは僕の言葉を聞いた後目を開けてポカーンとしている  
でも僕は話すのを止めない

「君だけじゃあ無理なら僕が手伝つてあげる  
だから……頑張つてみよつ……空を自由に飛べるよつに  
籠に入った鳥だつて籠さえ出れば自由に飛べるんだから」

「出来るかな？」

ネジは顔を俯かせたまま僕に問う

「出来るかなじゃないよ……出来るんだよ」

卷之三

俯かせていた顔をバッと上げて力強く言った後に顔を赤らめて何かを言おうとする

分かってるよ…… その時は僕も手伝つてあげるよ」

笑いながらもネジに言つてあげた

この後ネジは本家の門を恨めしく睨まず笑いながら帰つて行つた

「たとへ」

そろそろ出でたら「びうだい？」

僕はネジが見えなく成ったのを確認してから後ろに向かって話しかける

「いつから気づいていた？」

「ネジと話を終えてからぐらこかな？」

嘘であるアランはネジと話すときから知つていつた

因みに何故分かったかと言つと転生者の能力で視線に敏感になる能

力のお陰である

「それで？」

何か用かい？」

「ああ」

ヒアシは一步前に出てきて

頭を下げて来た

「ありがとう」

「……なんだい？」

いきなり悪いけど僕には男の頭を下げる趣味はないよ？

「……それでもだ  
ありがとう」

「……どう致しまして

じゃあお礼として何時かネジに真実を教えてあげてよ

アランがそう言つた瞬間ヒアシは勢い良く頭をあげた  
ヒアシの顔はまるで有り得ない物を見る目でアランを見た

「君は…… 一体

何を知つてゐるんだ?」

「さあね…

少なくとも今回の真実は知つてゐよ」

アランは記憶眼と言つ能力でこの家に残る記憶を覗いた  
記憶眼とは物が体験した記憶を見ることが出来る目アランが創った  
能力

「じゃあね  
また会おう」

アランはそう言つてヒアシに背を向けて歩き出す

「…………ライトとHIMIは最後に凄いものを置いていったな  
流石木の葉の鉄壁と木の葉の妖精の息子と言つことか…………」

ヒアシがそう呟いた言葉をアランは聞こえなかつた

つえ? 何笑つてゐるか?

それはね? 今日嬉しい事があつたんだ

何があつたのか? それはね? ある銀髪の優しい男の子に会つたんだ

s.i.d.oネジ

フフフフ

彼はこんな私でも自由に成れるって自由に飛び回れるって

それに……こんな私を……そ…その……手伝ってくれるって／＼／＼

そう言ってくれたから私は頑張れる

今思えば私は誰かに助けて欲しかったんだと思つ

だから……ありがとうアラン

でもアラン格好良かつたなあ～～  
つて私は何を思つてるの／＼／＼

うう～～アラン……だ……だ……だいす……や……ボフッ／＼／＼

想像の中でアランに告白？するだけで氣絶するネジ

その頃アラン大好き軍団（ナルト、サスケ、イタチ、ヒナタ）は……

「「「「つは！～～何だらり～～何かアラン（くん）関係でライバルが増えた氣が？？」

同じ事を言つていた

その頃アランは……

「クシユ

……誰か噂をしてるのかな？」

約五名が噂しています

## 日向の天才娘との出会い（後書き）

「アンケートの結果サスケの変わりのオリキャラを出します  
サクラは今の所は勘違いで行きたいです  
つてかサクラ嫌われるね……殆どNARUTOの小説でアンチされてるし……  
まあ僕あまり好きじゃないから良いんだけどね  
だけど最終的にサクラもハーレムに入れようと思います  
もしもサクラを最初っからハーレムに入れるべきって意見が出た場合検討させてもらいます  
それではまた次回！－！」

## 復讐の先（前書き）

「今日はサスケが復讐を誓うのか誓わないのかをかけた回です  
まあ……ぶっちゃけ分かってる人いっぱい居ますよね?  
つてか……雲雀さんの性格で説得?は難しい  
でも雲雀さんの性格に似させてるだけで雲雀さんではないのでその  
辺はしつかり分かった状態でお読み下さい  
……アラン君どこに居るんだろうって?……秘密です」

## 復讐の先

ネジと出会つてから数ヶ年が経ち僕は七歳に成った時事件が起きた  
事件の内容は下に書いてあるよ

うちは一族皆殺し

加害者

うちはイタチ

被害者

うちは一族

但し生き残りが2人存在している  
生き残ったのはうちはイタチの妹うちはサスケ  
うちちはクウロの一名である

それを聞いた僕は取りあえずサスケに会いに行つてみる事にした

数分後……

取りあえずうちは一族の土地に着いたけど……  
サスケはいないね……

仕方ない……違う所も探してみよつか……

数時間後……

あれから数時間探したもののが全く見つからない  
夕日が落ちてきたので今日は諦めて家に帰ろうとしたとき

湖の橋？の所に座っているサスケを見つけた  
僕はゆっくりサスケに近づいて話しかけた

「何してるの？」

「……

……アラン

サスケは振り向いた瞬間驚いていたが直ぐ元に戻つて僕の名前を呼ぶ

「それで

此処で何してたの？」

「……実はね

サスケから今回の事件の事を聞いた

……記憶眼で見た記憶と一緒にだね……但し真実とは違うね

記憶眼でイタチの任務の事を偶然知った

でも……今僕が真実を教えてもサスケは信じないね

これは……本人から聞かなきやいけない

はあ……全く面倒な姉妹だね

「……それで

サスケはどうしたいの？」

僕はサスケの話を聞いた後僕はサスケに訪ねる  
これからどうしたいのかを……

「復讐したい！！！」

私から父さんを……母さんを奪った彼奴に復讐したい！！！」

「復讐した後は？」

「そ……それは……」

復讐したい気持ちを聞いた僕は復讐をした後の事を聞いたがサスケは考えていなかつたのか答えられない

仕方ないね……

僕は違う質問をした

「サスケは復讐して何をしたいの？」

何をしたいの……復讐したから父親、母親が生き返る訳ではないなら……何故復讐したい？

「…………それが私の生きがいだから」

「…………馬鹿なの？」

ネジの時も思つたけど……何故自分で全てを決めてしまうんだろうね？

「つえ？」

サスケは僕の顔を見てくるが僕は気にせず話を続けていく

「生きがい？ならイタチを殺したら死ぬのかい？生き残ったのに自分で自分の命を奪うのかい？」

「それで君は満足なのかい？……違うね」

「そんなので満足になる人間なんていないよ

「それにイタチにも事情があつたのかもしれないよ？」

「そんなの……彼奴に有るわけ……」

「なら何で君を生かしたの？」

「全く僕はお人好しだね」

「でも例え誰かが僕の事をお人好しと呼んでも自己満足と言つても僕は僕のしたいようにするだけだよ」

「それが僕の悪党【せいけ】だからね」

「それは……自分の器を図るため」

「幼い君を？」

「自分の器を図るなら他にいっぽいいるよ？」

「いつか自分を殺す奴として血を分けた私を……」

「自分殺すため？」

「何故わざわざそんな事をするの？」

「いつか自分の脅威に成るかも知れないんだよ？……なら生かさないよ……普通はね」

「そんなの……そんなの」

「サスケ……」

まず復讐なんかよりイタチの事を分かることから初めても良いと思  
うよ  
知った後にやっぱり復讐するつて言ひなうりそれでも良い……それは  
サスケが決める事だからね  
でも……今すぐ決めなくても良いと思つよ  
ゆっくり……ちょっとづつ分かつていいつ  
僕も手伝つてあげるから

「……本当?

本当に姉さんに復讐しなくても良いの?」

「うん」

サスケも無理してたんだよね?大好きな姉さん  
だけど同じくらい大好きな母親に父親達……どちらも選べない  
そんな狭間に居た  
無理に復讐なんてしなくても良いんだ

「うん……

私姉さん……イタチの事を知つていく  
でも……復讐はしないよ

「……それが今の君の答え?」

「答えかは分からぬけど……私はそつ決めた」

「そう

なら先ずは自分家に帰つて、飯食べなきゃいけないね?」

「え?……つあ!—!

「もうこんな時間……」

「どうやら時間が忘れていたみたいだね

「それじゃあ僕も帰るよ」

「つあ……

ね……ねえ……！」

「？」

なに？

立ち去る所とした僕にサスケが声をかけてきたので振り返ってサスケに何か用か訪ねた

「そ……その

家近いんだけど……その……ね……わ……今日……せっぱ何でもない

！……！」

ああ……

そう言いつつ事ね

「ねえ」

「な……なに？」

「僕の家遠いんだけど今日君の家に泊まらせてくれない？」

「つえ？」

「駄目かい？」

גַּעֲמָה

卷之二

こうして僕はサスケの家に泊まらせて貰うことになった

Sidoサスケ

あれから家に帰つてきても落ち着かずについたため料理とかはアランに着くつて貰つた……ううう本当は私が作るつもりだったのに……でもアランの料理美味しかつたなあ～～それにしても……相変わらず格好いいなあ／＼＼＼＼格好いいのに優しいなんて卑怯だよアラン／＼＼＼＼ああ……明日も楽しみだな！！！！

## 復讐の先（後書き）

「やあ

前書きでは居なかつたアランだよ  
どこに行つてたかつて？

ある作者をかみ殺しに行つてたんだよ  
まあそんな事はどうでも良いとして今回のグダグダな話を楽しんで  
くれたかい？

お礼言わせて貰うよ  
ありがとうね

では次回も見てくれなきゃかみ殺すよ？」

## 特別編 小さく可愛いくなったアラン（前書き）

「めずらしく連続投稿です！！！」

……但し特別編

今日は何時もみたいにシリアルズ？ではなく笑い？です  
ぶつちやけノリで書きました  
キャラ崩壊してますサスケが……アランのキャラが一気に変わります  
嫌な方は見ないで下さい」

## 特別編 小さく可愛いくなったアラン

「……今日は何をしようかな?……うん?何だい?」の薬?

「これ飲めば良いことあるよ……いやマジで……!」

神様より

「オ……面白そうだね……」

アランは如何にも怪しい薬?を開けて飲んだ

「ボフンッ!……!」

飲んだ瞬間爆発音がして白い煙がアランを包む

s.i.d.oサスケ

昨日はアランに説得されてイタチに復讐をするのを止める事にした  
復讐はしないけど一発殴るくらいにはするよ?

そんな事を考えていた時だった……

「ボフン!……!」

いきなりアランが泊まった部屋から爆発音がした

「アラン!……!」

私はアランに何かあったのかと不安に成りながらアランが泊まった

部屋の前に行つて一気にドアを開ける  
ドアを開けたら白い煙がたつていたが今は氣にする余裕が無い私は  
部屋の中に入つていた

「アラン……アラン……アラン……」

私は夢中にアランの姿を探していたそうしていたら煙が徐々に薄れ  
ていき部屋の中心位に人影があつた

「アラン……！」

私は漸く見つけたアランに近づいた

「アラ……ン」

するとそこには……

「なんにやい  
きみゅ……かみゅこりょしてほちいの?  
【なんだい  
きみ……かみ殺して欲しいの?】

舌足らずの声で身長が小さく成ったアランが居た

な……ななな……か……可愛い……これがあの格好いいアランなの?!

「?

なにゅだめつてりゅの?」

?

【なに黙つてるの?】

可愛い

もう駄目抱きしめちゃう！――――――

くくりやひい！」

【ムグッ  
苦しき】

な……涙田のアランも……可愛い！――

一詩同發

漸く正気に戻つた私は取りあえずアランの姿を堪能……ではなく何故こんな……可愛い過ぎる姿に成ったのかを探していくつかまたこの姿にしよう……じゃなくて元の姿に戻そうとしているだが…………

Γ ..... ΤΠΤΠ

私の後ろに着いてきているチビアランが可愛いくて……じゃなくて何時転ぶか心配で集中できない

ジロジロ見るサスケ

そんなサスケにチビアランは……

?

どうひたの?」

【?

どうじたの?】

首を力クンとして訪ねる

ぐはつ……!

サスケはああ……アラン可愛すぞ……もう私死んでも良い……!  
!ポイントに9999のダメージを受けた

「な……何でもないよ」

サスケは鼻を押されてどうにか耐えた

「ほんとおうじつ?」

【本物?】

下から覗き込みながら叫ぶアラン

ぶはつ……!

サスケはああ……アラン可愛すぞ……もう私以下略に9999の  
ダメージを受けた

私……今日生きていくかな?

本気でそう思ったサスケであった

だけど……此処で死んでもしゃわせ……

本気の本気でそう思つたサスケであった

数時間後……

チビアランの可愛さ……ではなく頭脳との勝負で苦戦したサスケ  
だが何か怪しい薬を見つける  
薬には……

小さく、舌足らずになる薬

但し1日限り

因みに小さく成つてる時の記憶は本人には残りません

つと小さく書いていた

これでまたいつかアランを小さく……ではなくアランが戻れる鍵を見つけた

1日たてば……何時も通りのアランに……  
べ……別に悲しくなんかないわよ~少し……いやものすい~~~~~  
く残念なだけだよ?!

それにもしても……小さく成つてる時の記憶は本人には残らないって  
良かつたわね薬を作つた人物残つてたらアランにかみ殺されて……  
つー!!!!残らない!!!!それつて……今アランに何をしても  
アランの記憶には残らないってこと……

「ね……ねえ?

アラン

「なによ?」

【なに?】

「一つ私の言うこと聞いてくれる？」

ପାତ୍ର

卷之三

二二

「ありがとう」

ナデナデ

「今の事件」

和むアランに

ぐはつ！・！・！

サスケはああ！－！アラン可愛す以下略】9999のダメージを受けるサスケ

数時間後

「じゅ…準備できた?」

ପ୍ରକାଶ

でねたよ」

「……じゃあ出てきて

そうサスケが言った瞬間ドアが開いた  
ドアが開いた其処には……

「ひつえでいいによ？」

黒いメイド服を来たアランがいた……って……何故メイド服がある  
んだ！……と言つ苦情は受け付けません

強いて言つなら神とかがサスケにプレゼントしたんじゃない?  
因みにサスケは余りにも可愛い過ぎるアランを見て言葉を失つてい  
ます

「どうしたによ？」

そんなサスケにアランは首カツクン&下から田線&メイド服でトド  
メをさしにいった

次にどうなるか……皆さん分かりますよね？

「ふはっ……」

サスケはああ……アラ以下略に9999のダメージを受けた  
サスケはこの世に悔いなし……と言つかのように氣絶した

因みにサスケが氣絶して目覚めた時にはアランは既に元通りだった  
らしい

だけどまたチビアランにさせよつと企んでいたりするサスケが居た  
とか居なかつたとか……

クククツ

俺が思つた通り面白く成つたな  
ハハハハツ

今回の犯人である創造神は笑つていたとか……

s i d o アラン

何だろ……今すぐ創造神をかみ殺したい気分だよ

アランはまだ見ぬ創造神をかみ殺す事を約束した  
その時神界で創造神が震えていたとか居なかつたとか……

特別編 小さく可愛いくなつたアラン（後書き）

「せじゅみえめひこて  
あじゅぞあひこてひりく」

【初めまして】

「か……かかか可憐い過ぎる……」

一一一  
一一一  
一一一  
一一一  
一一一

涙目モード

一  
ふはつ

作者は氣絶した

「みゆ？」

アランは首を傾げた

「じゅかいもみにゅいぢょかみぬじゅぢゅよ?」

【次回も見ないとかみ殺すよ?】

修正しました

## アカトリーの日常（福井也）

「今回またアランの日常を書いてみたよ」

「僕の日常?」

「やうだよ

……そして日常の中でのフラグもね」

「何か書いたかい?」

「い…いえ?

何も書いてないよ?」

「やう…

なら良いけどね

「話を戻して今回の話は結構飛ばしています  
バンバン飛ばしていますのでご注意して下せ  
つてか何時に成つたら戦闘に成るだろ?」

## アカデミーでの日常

今回は僕のアカデミーでの日常を紹介するよ

ん? 何時入学したかだつて? 大体……サスケと同じぐらいかな?  
入学式を書け? 特に面白くないよ

それに……うちの作者の力量を分かつてるでしょ?

メタ発言禁止つ……!

作者

それ……AOiiaネタだね  
分かる人居るかな?  
まあどうでも良いね  
それじゃあ楽しんで来てよ

s.i.d.oサスケ

こんにちわ

前回チビアランのかわ……コホンっ超可愛い姿に気絶したサスケだよ

っえ? 言い直した意味がないって? 其処はシッコンじや駄目だよ?

コホンっ……それじゃあ話を戻して

私は今アラン君の家に向かってる

何しに行つてるかつて? それはねアランとワープ……ではなく一緒に登校するためだよ

っえ? いまラブラブ登校つて言いかけただろうつて? ……イツテナイヨ?

そんな事をしているとアランの家が見えてきた

アランの家の前には金髪の女の子2人と黒髪の女の子5人がいた

……またか……

「サスケ……何時も何時も来なくとも良いよ?

アランは私と登校するから」

いきなり睨めつけながら話かけてきた子はうずまきナルト  
アランに恋心がある

「そうよ

それからナルト?貴女も来なくて良いわよ?私がアランと登校する  
から」

もう一人の金髪の女の子は山中いの  
ナルトと同じでアランに恋心あり

「めんぢくさいけど……

アランと登校するのは譲らないよ?」

めんぢくさいが口癖の女の子は奈良シカマル  
此奴もアランに恋心がある

「例えシカマルでもアランは譲らないよ?  
アランと登校するのは僕だからね!――!――!」

シカマルと親友の秋道チョウジ  
もちろんアランに恋心がある

彼女は犬塚キバ何時も赤丸と言う犬を連れている  
因みにこう言つてるがアランに恋心がある

「わ……わわ私も偶々つていうかね？」

ワタワタしている女の子は田舎ヒナタ  
アラシとお出でアラシに恋心がある

「私はアランと登校出来れば文句無い……」

## 無口の彼女は油シノ

何故かは知らないが彼女もアランに恋心がある

つて！－！－！アラン貴方好かれすぎよ！－！－！－！

こんなにはライバルが居るなんて……

しがもアガルミにはキビと屬るし教館附も猶うてゐて暗がりああつ！もうアラン！――！フラグ立て過ぎよ！――！

ああつ――もうアラン――・フラグ

そんな事を考えて居ると不意にアランの家の扉が開いた

翻譯

不機嫌そうなアランが居た

「……………」（嗚）我正想說，「……」

۲۷

おはよう

それで? 何の用だい?」

「あ…あのね?

私達……………その……………「アーハン」と一緒に登校したくて……………// // // //

ナルトが皆の気持ちを代弁するが

「わ……わわ私は違うわよ?……私は……そのう……偶々って言つたね?…………偶然あんたの家の前を通つただけよ!?!//

素直になれない者が若干一名いた

「キバの事は一先ずおいといて……アラン！私達と一緒に登校して――――――――――」

私はドキドキする気持ちを抑えてアランに囁つ

「ふうん

まあ良いよ……ちよつと着替えてくるから待つててよ」

アランがそう言って家の中に入つて行つた

「……………」

「やつた」

「良かつたあ」

「……良かつた」

アランが家に入った瞬間皆が喜びを叫んだ

因みに下の3人は上がキバで中間がヒナタで下がシノである  
数分後……

アランが着替え終わって出てきた

因みにアランの服装は雲雀が着てている服です  
学ランではなく黒い服です

相変わらず格好いいなあ～……って私は何を考えてるんだつ……  
！～／＼／＼

「それじゃあ  
行こうか？」

「「「「「「「うん…」（…「うん）」「」「」「」「」「」」

アカデミー到着

s.i.d.oアラン

あれから僕達は9人全員でアカデミーに登校をした  
だけど……何故僕が頭を撫でたら皆顔を赤くするんだろうね？

ん？鈍感？

僕は鋭い方だよ？

……何だいそのため息は？かみ殺すよ？

まあそんな事はどうでも良いとして何故か男子から殺気が飛んでくるのは何でだろうね？

女子からも殺気が飛んできてるしね……

僕何かしたかい？

男子はアランがモテるから

女子はアランの周りにいる8人に殺気を送っているのだがアランは自分に送られてると勘違いしている

取りあえず到着した僕達は席に座る事にした

僕が座つたら隣にキバが座つてきた

「どうしたんだい？」

僕の隣に座るなんて珍しいね？」

「べ……べべ別に良いでしょ？どこに座りうが私の自由でしょ！…！」

「ふうん」

僕は座つたキバを見た

キバは何故か俯きスンっとしていた

そんなキバを見て僕はキバの頭の上に手を乗せた

「ふ……ふえ？……つ／＼／＼／＼」

キバは始め何が何だか分からなかつたようだが分かつた瞬間顔を真

つ赤にしていたよ

……そんなにイヤなのかな？僕に触られるの

「な……なな何してるの／＼／＼／＼」

「……キバが犬に見えたからつい……」

僕は小動物が大好きなんだよ

……だからキバがスンとした姿が小動物の犬に見えたから撫でてみたんだけどね……

そんなにイヤなら仕方ないね

アランはそう思つてキバから手を離した

「つあ……つ／＼／＼／＼」

キバは残念そうな声を出した後急に顔を赤くして席を立ちビニカに行つた

s.i.d.oキバ

私は何時ものように素直に成れなかつた

今日だつてアランと一緒に登校したかつたのに嘘をついた

……アランに嫌われてないよね？嫌われてたら嫌だなあ～

そんな事を考へているとアカデミーに到着して皆各自好きな場所に座つていく

そんな中私はアランの座つた席を見た……

アランの座つた席にはまだ誰も座つていなかつた……

チャンスと思つた私はアランの隣に座つた  
座つた瞬間アランが

「どうしたんだい？」

僕の隣に座るなんて珍しいね」

何て言つてきた

それは何時も皆に取られるからで……／＼＼＼＼

「べ……べ別に良いでしょ？ビニシに座りうが私の自由でしょ……！」

まだ

私は何時も素直に成れない

「ふ～ん」

素直に成れない自分に落ち込んだ私

そんな時頭の上に何かが乗つた感触がした

「ふ……ふえ？…………つ／＼＼＼＼」

何なのか初めは分からなかつたけど良く見たらアランの手だつた

……つえ？アランの……手？

「な……ななな何してるので……／＼＼＼＼」

私は慌ててアランに向つ

「……キバが犬に見えたからついて……」

わ…私が犬？

アランの犬…悪くないかも…って私は何を考えているんだ！…！

そう考えていたらアランが私の頭から手をどけた

「つあ……つ／＼／＼」

私は残念な気持ちともつとして欲しい気持ちがいっぱいに成つてつい声を出してしまった

声を出した事が分かつて恥ずかしく成つて席を立つて教室から出た  
教室から出た私は誰もいない廊下まで走った  
誰もいない廊下で崩れるように座りアランが撫でた頭を触った

「気持ち良かつたなあ／＼／＼

つだから私は何を考えているんだ！！！

うううううこれもどれもアランの所為だ！！！胸がドキドキする  
のも切なく成るのも顔が赤くなるのも全てアランの所為だ！！！！

／＼／＼

それから数分して漸く正気に戻れた私は教室に戻った

s i d o アラン

何故か教室を出て行つたキバの代わりにキバが座つていた席に座る  
チヨウジ

「あ…ああアラン／＼／＼

何故か顔を赤らめて僕を呼んでくるチヨウジ

「何だい？」

「きよ…今日はいい天気だね！…！」／＼＼＼＼

「そうだね」

數分後

「アラン！！！」

そのあのね

何かモジモジしだしたチョウジ

「わ...今日ね...

アランの...為にね...ね...お弁当...作ったんだ//

「ワオ

本当にかい？それは楽しみだね

「つえ？」

あつ！－そ…それなら良いよ！－アランはアランが作つた方食べ  
なよ！－！－！」

そう言つた後チヨウジは俯いた

「……ねえチヨウジ」

「な…なに? アラン」

「僕のお弁当いらぬ？」

「つえ？　

でももうしたからアランのお弁当無くなつたわよ。」

「僕は大丈夫だよ」

そつ言いながらアランはチョウジが持つているお弁当を取り

「僕にはチョウジが作つてくれたお弁当があるからね」

「つあ……／＼／＼」

「うん？　

」のをお弁当くれないの？」

「う……ひひこ……

い……良……よ……！　僕が作つたお弁当で良になら……／＼／＼

「アハ？　

ならチョウジが作ったお弁当楽しみにしてるよ」

アランはもう言つた後チョウジが作ったお弁当とアランのお弁当を交換した

「…………ありがとうアラン／＼／＼」

チョウジは小さく笑つて言った

「さあおチョウジ

やつぱりアランは格好いいよ……あんなわざなく優しくするなん  
てもっと好きに成っちゃうじやん……

大大大好きだよ……アラン／＼／＼  
s.i.d.oアラン

授業などが終わり今はお昼ご飯時  
皆好きな場所で好きな相手（恋愛間ではない）とご飯を食べている  
僕はめったに誰も来ないアカデミーの裏の森に向かっている  
廊下を歩いていたら急に肩を（優しく）叩かれたのでそちらを向い  
たらシノがいた

「シノ？」

「どうしたんだい？ 何か僕に用かい？」

「一緒に……食べない？ ／＼／＼

少し顔を赤らめながら言ひシノ

「ワオ……シノが誘つて來るのは珍しいね」

何時もはナルトやサスケ、いの等が多い

「…………駄目？」

「ん？」

「別に良いよ？」

僕はそう言つて裏の森に向かう足を動かした

数分後

数分した時いきなりシノが話しかけてきた

「……どこに向かってるの?」

「僕が最近見つけた食事場だよ」

そう言って更に森の奥を進と今までの雑草としたような場所ではなく広くて気の間から太陽の光が見えるのが綺麗で中央には大きな湖がある

「……綺麗」

シノはそんな場所に目を奪われていた

「僕のお気に入りの場所の一つだよ  
特別にシノだけに教えてあげるよ」

「……特別／／／／」

シノはアランの特別と言つ言葉を氣に入つたようだ

「だから

誰にも言つたら駄目だよ

「……言わない……絶対」

「それじゃあ

「飯食べよつか?」

「……うん」

その後今日のお弁当はチョウジが作った物つて言つたら機嫌を損ねたので頭を撫でたら機嫌が直つたよ……何で頭を撫でたら機嫌が直るんだろうね?

読者の代わりに言つてあげる……この鈍感!――!

作者より

何だい

今凄くムカつく声が聞こえたような?

s.i.d.oシノ

アランの手暖かかった……

シノはアランが撫でた頭をさすつていた

でも……弁当の時は胸がムカムカした……

次に胸のあたりをさすった

……胸……無い

アランもやつぱり胸がある方が好きなのかな?

……明日から牛乳飲む……

ガツツポーズをとつて決意するシノ

s.i.d.oアラン

今はシノとお弁当を食べた後シノと別れて先に教室に戻ってきた所  
だよ

そしてまた授業が始まる  
因みに隣の席はシカマルだよ

そう考えていたら教室のドアが開きそこから担任のカズヤ先生が出てきた

「それじゃあ  
授業始めるぞ〜」

今回の授業は隣の席同士で「心動の術」を行つぞ

心動の術……医療忍術の基礎の基礎で相手の体を触つて心臓が動いているかを瞬時に分かる術である

「それでは右に座ってる者は左に座ってる者の手を握れ」

右は僕で左がシカマルだから僕がシカマルの手を握る事になるね

因みに他はナルト×サスケ、いの×チョウジ、ヒナタ×シノ、キバ×サブキャラである

「／＼／＼／＼

アランの手が近づくに連れて顔をどんどんと赤らめる  
それと同時に7、8人位の手が赤くなる  
そしてアランの手がシカマルの手に触れて絡める

「ドキッ…………／＼／＼／

それと同時にシカマルの顔が一気に赤くなる  
そして7、8人位の手も一気に赤くなる

「手を繋いだら早速心動の術をかける」

アランは素早く片手で印を結んだ

「心動の術！……！」

ドクドクドク！……！

心臓の音が速い？

「大丈夫かい？シカマル」

「ふ……ふえ？／＼／＼／  
にや……にやに？」

「心臓の音が速いけど大丈夫かい？」

「だ……大丈夫だよ／＼／＼／？」

……本当に大丈夫なのか？

s.i.d.oシカマル

アランの手が私の手に……／＼／＼／

今日めんどうだからつて適当な場所に座らないで良かつた／＼／＼／

「それでは次は逆で術をかける」

ぎ  
逆?

逆って……私がアランの手を握るの！？

?

何してるの？速く印結ひなよ」

卷之二十一

私は慌ただしく印を結びアランの手を握った

この時また7、8人位の手が赤く成った

「し：心動の術」

ドク…ドク…ドク

これがアランの心臓の音…… / / / /

そんなこんなで今日の授業が終わり私は顔を俯けたまま帰った  
自分の手を握りながら

S. i. d o アラン

漸く授業が終わり各自帰つて行く  
まで、僕らは

そう思い立ち上がり玄関?に向かつた  
玄関?からでて門?を通る時

「ね……ねえ／＼／＼

アランもし良かつたら一緒に帰らない?／＼／＼

金髪の女子

いのから声をかけられた

「別に構わないよ」

「ほ……本当――――――――――――

「うん

ほら速く行くよ」

「あ……うん――――

アランが先々行くのを少し遅れてからいのが駆け寄る

アランに追いつきやうな時足を挫いてこけそうになるいの

「あつ――――

咄嗟に目を瞑つたいの

だが何時まで経つても痛み来ないので目を開けてみるとアランに抱えられていた

「大丈夫かい?」

「う…うん大丈…痛つー！」

いのは大丈夫と言いながら立とうとするが挫いた足が痛む為立てない

「無理しなくても良いよ  
僕がおんぶしてあげるよ」

「で……でも

「はあ

仕方ないね……先ず謝つとくよ?悪いね」

「うえ？ な……なに…… キヤアー……！」

アランはこの腰に手を伸ばしそのまま持ち上げる所謂お姫様抱っこである

「あ…アラン?」――――

「しざりの間我慢してね？」

「...」

その後いのをいのの家まで送つていつた  
刃輪うす様包ひ二のままである

Sidoいの

הנִזְקָנָה

アランが変な事するからお母さん達にからかわれたじゃない／＼／＼

アランが送ったあとこの母親は「いの何時の間にあんな格好いい  
彼氏作ったの?」といのをからかい父親は「孫を見るのは速いかも  
な！－！」と笑いながらいのに言い  
いのはそんな事を言われて顔を赤らめていた

うう／＼／＼

で…でもアランの顔をあんなに間近に見れたしあ…お姫様抱っこも  
して貰つたし…今日は最高の日だつたなあ／＼／＼

アランの田舎はフラグと共に毎日過ぎて行くのだった

## アカデミーでの日常（後書き）

「はい

今回のあとがきは私作者一人で勤めます

今回の話は今回新しく出てきたハーレム陣にフラグを強化しました  
つえ？シノ達のフラグを立てた時の話を書け？まあ……何時かね？

つえ？それからフラグ強化無理ありますぎ？

文才の無い作者の私が無理無しではやっていけませんよ  
つえ？ナルト達は？

彼等は今まで出てきていたので無しです  
つえ？TSキャラ達の容姿が気になる？  
仕方ないです……TSキャラの容姿は

ナルト

容姿

サスケ

容姿

キノの旅のキノ

リボーンの京子の髪を金髪にした感じ

キバ

容姿

とあるシリーズの御坂

シカマル

容姿

ブリークのルキア

チョウジ

容姿

遊戯王GXのレイ

シノ

容姿

涼宮ハルヒの長門の髪を黒くした感じ

ネジ

容姿

バンブーブレイドのタマちゃん

です

因みにチョウジは瘦せています

それからシノの口癖の「~何故なぜ~」は言いませんしグラサンも

当然かけていませんので悪しからずに……

それでは次回も見て下さい

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン（前書き）

「今回アランに新たなチート能力がつきます！-！  
つえ？これ以上強くなるのかつて？

成りますよ

それでには本編スタート!!!!!!」

## 神との遭遇新たな能力＆転生者VSアラン

あれから何年か経つて今僕は12才になつた

12才になつたって言ひことは皆分かるよね？

僕は木の葉の下忍に成つて3歳から始めていた影分身修行を終えた所だよ

つえ？アカデミー卒業シーンを書けつてかい？

書いても良いけどつまらないよ？

僕が分身の術をしただけだからね  
さて話が長く成ったね

今僕が何をしてるかって言つといきなり影分身を解いてフイードバ  
ックしてきた経験が凄すぎて氣絶しただけだよ

……今情けないって思つたかい？

なら君なら耐えられるのかい？何度も何度も殺される経験に？  
まあそんな事はどうでも良いんだけど

僕気絶したのに何故か白い空間に居るんだけど……？  
確か僕気絶したよね

なんでこんな場所に居るんだい？

「それは俺が話そう」

声がしたので声がした方を見ればモヤシみたいな奴が居た

……体は細いけど強いね……

僕は前世のスキルで此奴がただ者じゃないことが分かつた

「誰だいきみ？」

「俺かい？」

俺は神だ……それも最高神ゼウスだぜ！－！－！」

親指を立てて威張る最高神ゼウス

ウザイね

「それで？」

その最高神ゼウスが僕に何のようだい?」

「ま」

用事は2つあるだけよ……良い知らせと悪い知らせどちらが良い

1

一  
な  
ら

「分かつた……  
なら良い知らせだ……お前神に成つたぜ！――しかも最高神クラス  
の――――やつたね――――！」

n?

「今なんて言つたの？」

「だから……お前神に成つたんだよ  
ハハハ俺二一者ハ最弱神二一者

最高神なんて俺を入れても2人しか居なかつたんだぜ？」  
ああ…因みにもう1人は天照大神な」

「そんのはどうでもいいよ

それよりなんで僕が神に成つたりしたんだい？」

「まあ

お前が神に成つた理由は五個ある

一つ目はある永遠の影分身だ

あれのおかげでお前は12才という体で何万年も生きた事になったからだ

まあ何万年生きて神になる奴は沢山いるからな

2つ目はお前が転生した一族が神の血を引いて居たからだ

全能眼は神の血を引いているから出てきたんだしな

……しかもお前の場合前世でも神の血を引いていた一族だったからな

三つ目は転生者の能力のせいだ

あまりの膨大な力だつた為世界が神と認めたんだ

まあそれでも下級神だがな

四つ目は始まりの能力のせいだ

始まり……つまり始まりである俺や天照大神の力も使えると言つわけだ

まあ大抵の奴は力に負けるんだがお前は転生後で俺と天照大神の血を引いているから大丈夫だつたんだよ

最後の理由はやっぱり終焉の能力のせいだ

理由はまあ始まりの能力と一緒に魔神や邪心死神等々の能力が使えるまあこれも普通なら力に負けるんだがそれはお前の前世の神の血が役につつたんだろうな

まあこれだの理由でお前は最高神になつたんだな」

……何かとんでも無い真実を知つたよ

僕の家計が前世も含めて神の血を引いていたなんてね……はあまさか良い話で疲れるとは思わなかつたよ……

「まあ

その話はもう良いよ  
それで？悪い話の方は？」

「悪い話はな……

お前の世界に間違つて転生者を入れちまつたー！」

「…………ん？」

確か転生者の列は僕が一番後ろだつたし能力？に僕以外の転生者が  
居ない世界つて言つたよね？」

「すまん……手違いでな」

「まあ…………良いよそれは  
つで何故わざわざ僕を呼び出したんだい？もしかしてそれで終わり  
かい？」

「ああ…………実はなお前の世界に送つた奴を始末して欲しいんだわ」

「？」

「何故だい？」

神であるものがわざわざそんな事を言つのはおかしいよね？

「いや……な

そいつが転生した理由がな……」

「なんなんだい？」

「ハーレムを作るためなんだよ

……はい？

「そんなの僕には関係無いじゃない……」

「その所を頼む！……

やつてくれたらお詫びと神昇格のお祝いとして三つ能力をやるから

……！

だから頼む！……！」

「はあ

仕方ないね

なら能力の三つを言わせて貰ひよ？

「ああ！！！

何ででも来い！……！」

「まず一つ目の能力は転生能力」

「？」

なんだその能力？」

あれ？

こんな会話前もしたような……？？

「転生能力は死んだ後違う世界に転生できる能力だよ  
勿論僕が言った能力を持つてね」

「なる程なる程……

それで？次の能力は？」

「今の僕は疲れているからね  
その疲れとチャクラ等の消費を回復してよ」

「それは簡単だな……  
なら最後の能力は？」

「そうだね……  
なら……ついで出来るかい？」

僕は小声でゼウスに最後の能力を伝える

「まあ

難しいがやつてみよう

はあ……お前の頭の中はどうなってるんだ？今でも下手したら俺と天照大神2人が相手でも負けるかもしれないってえのに更に強く成ろうなんて

「僕はまだまだ強くなるよ

……もう後悔はしたくないからね

「……そうか

ああ後ろにある扉を開ければあちらの世界に戻れる  
それと同時に新たな能力を追加される

「うん

何から何までありがとうね

アランはそう言つて後ろの扉から出て行つた

「頑張れよ……

悪党【セコモ】と叫ぶ真理を見つけた神よ

ゼウスがそう言った言葉はアランに聞こえない  
だからアランは知らない  
アランが神に成った一番の理由は悪党【セコモ】とこう世界の真理  
の一つを見つけた事だということに……

i ロアランの家

わいぢりやう帰つてこれたようだね  
さて……先ずは転生者をかみ殺すとしようか

「能力作成……転生者探し……使用回数一回……創造……  
そして発動」

……いたつ……！

「腑罪証明【アリバイブロック】発動」

その瞬間アランが消えた

s.i.d.o 転生者

アハハハハ！！！！  
転生完了だ！！！！

これでヒナタやいのを俺の嫁に出来るぜ……ー！  
しかもこの世界はナルト達は女と来た！！！！

これは俺にハーレムを作れと言う世界からのメッセージだー！！！！

違います

作者＆世界より

あん?

今なんか聞こえたような……?

「まあ

どいつも良いやつ

「何がどいつも良いんだい?」

突然後ろから話しかけられて振り向いたときにアラウディイが居た……っは? 嘘だろ? なんでNARUTO世界にリボーンキャラのアラウディイが……?

ああ……「ラボか!?

ならハルや京子も俺のハーレムに……――――――

馬鹿な転生です

もう一度言います馬鹿な転生です

因みに今居るのは死の森です

「まあ……

僕には関係無いけど……僕は君をかみ殺すだけだからね」

っふ――――

何此奴!――アニメで出でても鬪わなかつた奴がチートオリ主の俺に勝てると思つてんのか!――www

「行くよ」

アランはトンファーを取り出して馬鹿な転生者に攻撃を仕掛ける

「うわあああ…………たんてね投影開始【トレースオン】  
…………」

馬鹿な転生者は馬鹿な演技をして如何にも転生者が選ぶ1位2位に  
出てくる投影で干将・莫耶【かんじょう・ばくや】を投影してアラン  
のトンファーを防いでそのまま後ろに下がったアランに干将・莫  
耶【かんじょう・ばくや】を投げつけ

「壊れた幻想【ブローケン・ファンタズム】…………」

爆発した

「ははははっ…………  
これで俺の勝ちだ…………」  
勝ちを宣言した馬鹿な転生者  
……だが

「誰が勝ったの？」

爆発で煙が立つたのが晴れてきた  
そしてその場には半分黒で半分白の指輪を右手に嵌めて左手には指  
輪と一緒に半分黒で半分白のボックスが握られていた  
指輪には黒と白の炎がたつていてその炎をボックスの穴に注入する  
そしてボックスが開きボックスからは真っ白なトンファーと真っ黒  
なトンファーが出てきた

「な……なんだよそのボックス兵器は！？  
そんなの原作でもアニメでも出でいなかつたぞ！？」

「当たり前だよ……

これは僕専用の武器だからね……話はもう終わりだよ……それじゃあ行くよ?」

「ツク……

投影開始【トレースオン】……熾天覆う七つの円環【ローアイアス】……「

馬鹿な転生者の前に花弁状の七枚の盾が現れた

……がアランの真っ白トンファーで攻撃すると盾は何事もなく破壊された

「つな……！……つく……！」

投影開始【トレースオン】……約束され【えぐ

聖剣を投影したが次は真っ黒なトンファーで破壊される

「つくそ……！」

王の財宝【ゲートオブバビロン】……

馬鹿な転生者は次の手でまたまた転生者が選びそうな能力で右手に赤い槍を取り出す

「突き穿つ死翔の槍【ガイボルク】……  
まだだ……！」

赤い槍を投げたと同時に新たな剣を取り出す

「天地乖離す開闢の星【エヌマエリシユ】……！」

最強の飛び道具に最強の一撃がアランに迫る

「Modemchanage盾……！」

真っ白いトンファーと真っ黒なトンファーが靄に変わった  
アランは片手を前に出した

その瞬間靄は真っ白い盾と真っ黒な盾に変わった

すると突き穿つ死翔の槍【ゲイボルク】は真っ黒な盾で天地乖離す開闢の星【エヌマエリシュ】は真っ白な盾に防がれた

「な……なに……！」

「うん……新しい力の試しはもう良いかな？  
ほら転生者君早く次の手を打たないと kami 殺すよ？」

「っく……！

体は剣で出来ている

血潮は鉄で心は硝子

幾たびの戦場を超えて不敗

ただ一度の敗速もなく

ただ一度の勝利もなし

担い手はここにひとり

剣丘で鉄を鍛つ

ならば我が生涯に意味は不要ず

「この体は無限の剣で出来ていた！！！」

その瞬間世界が塗り替えられた

三

それでこそかみ殺しがいがあるよ」

アランの目の前には無限の剣達がいる

「」  
など

僕の前じゃあ意味ないけどね

盾だったものが靄になり次に銃に成った  
アランは黒い方の銃で様々な方向に撃つた

「おはせつ」――――――

なにしてやがる！？」この剣達に怯えて狂つたか！？」「

相手はアランを挑発するがアランはお構いなしに銃を撃つた  
そして急にアランが撃つのを止めた

「あん？」

そして……変化が起きた世界が……塗り替えられた世界が壊れていく

「ここの銃は破壊を司る  
こんな事は簡単にできるよ  
れて……もつ君には打つ手はないよつだね」

そつまつて真つ白な方の銃を向ける

「あ……まつてく」

「わよなう」

バンッ

真つ白な銃を撃つと転生者は氷  
砕けた……

## 神との遭遇新たな能力&転生者▼アラン（後書き）

今回のあとがきは今回出てきた真っ白＆真っ黒な武器紹介です

今回出てきたあの二つは七つの武器になります

今回は七つの武器の能力を紹介します

刀

黒速さ

白見えない

弓

黒時空を超える

白

追尾生

銃

黒破壊

白創造

盾

黒 効果をなくす（ゲイボルグ等）

白 破壊力をなくす（エクスカリバー等）

トンファー

黒 どんな武器でも壊す

白 どんな盾でも壊す

グローブ

黒

殴った後（力は無い）指を鳴らすと殴った場所が爆発する

白 馬鹿力

槍

相手の身体の能力を関係なく殺せる

以上！――！

槍は2本より一本の方が使いやすうなので光と闇の靈を合わせたら槍になりと言つ設定です

……ってかチート過ぎだろつと我ながら思います  
こんなチート過ぎる能力を持つた主人公ですが呼んでいただけると  
ありがとうございます

それからお気に入り200を超えたまし……皆様本当に感謝します！！！

それではまた次回お会いしましょう！！！！

## はたけカカシ登場（前書き）

「今日は前回忘れていたアランの神としての能力とアランのもう一つの名前を出します」

「一応書かれてナビ前世の名前じゃないよ？」

「それでは本編スタート……！」

## はたけカカシ登場

昨日転生者を倒したアランだよ  
あの後魔改造＆持ち運び型精神と時の部屋に入つて昨日貰った武器  
の修行＆影分身修行の復習をしたよ  
……おかげで今はくたくただよ……

魔改造＆持ち運び型精神と時の部屋とはこの精神と時の部屋は1  
日で一年間であり持ち運びが可能なのだ！――！

今何をしてるかつて？  
下忍に成ったから写真？を撮つて今はアカデミーの席に座つてイル  
カ先生を待つてるんだよ  
それにしても……

因みにイルカ先生も性転換してます

ガヤガヤ……

相変わらず五月蠅いね

ガラガラ

「はい――！  
静かにする――！」

イルカ先生が入ってきて生徒達を静める

「今から先生が決めた班を発表する」

# イルカ先生がそう言つた瞬間

「ええ～～～～～」

## 不満の声が上がった

「それぐらい俺達で決めさせてくれよ…………」

「やつだそりだ！……！」

君達

忍に思ふ筈である。

一 静かに！！！！

お前等は」わたくし忍は戻るんだ!!」「こんな事で一々文句を言へた  
!!!!!!」「

イルカ先生がそう言うと皆は黙つた

「それでは一班から発表する…………次第七班――うちはクウロ  
春野サクラ…………そして…………うずまきナルト――――」

( クウロ君と一緒に )

(そんなあ……アランと離れちやつた……)

(..... ハン)

分かると思いますが上からサクラ、ナルト、クウロです

「次に八班

犬塚キバ

油女シノ

日向ヒナタ！――！」

(アラン……)

(アラン君……)

(アラン)

上からキバ、ヒナタ、シノである

「次に九班は…………第十班は奈良シカマル

秋道チョウジ

山中いの」

(…………めんどくせこ

アランとも一緒にないし…………）

(そんな……

アランと一緒にじゃないの！？）

(ええ――！？

なんでアランと一緒にないの――！――）

上からシカマル、チョウジ、いのである

「十一班…………だ」

あれ？

僕とサスケの名前だけがでなかつた……？

「そして青葉アランとうちはサスケは特別班第零班だ」

「先生

第零班って何ですか？」

サスケがイルカ先生に尋ねる

「まあ

基本はスリーマーセル何だが今回は2人が余ったからな男子と女子  
から成績優秀者を入れたんだ  
まあ基本第七班と活動してくれ  
担当上忍も一緒にだからな」  
これを聞いたナルトは……

(やつたあああ…………)

思いつきりガツツポーズを取っていたとか……

「それでは担任の先生を名前を言ひや

先ず一班は…………第七班と第零班ははたけカカシ先生  
第八班は紅先生第九班は…………つで第十班はアスマ先生つで第十一  
班は…………つだ

それじゃあ担任の先生がくるまで大人しくまつていろよ？」  
イルカ先生はそう言つて教室から出て行つた

それから数分後……

第七班と第零班の担任上忍以外は来た  
……それにしても遅いね

「サスケ

僕少し眠るから担任上忍が来たら起<sup>レ</sup>してよ

「つえ?

あつ……うん分かつたよ任せて

僕は隣のサスケにそつ<sup>ハ</sup>言つて眠りについた

ん?

何だいこ<sup>ハ</sup>は……

どこかで見た<sup>ハ</sup>ことがあるよ<sup>ハ</sup>うな……ああ神か……

「よう

久しぶり……ではなく昨日<sup>ハ</sup>ぶりだな

「そうだね

……それより僕に何の用だい?」

「いやな

お前の神の名前とお前の神の能力を教えようと思つてな

……ん?

「神の能力つて創造能力じゃないの?」

「いや

創造能力は下級神だ

俺達上級神になると創造能力でも出せない能力を出す  
具体例をあげるなら天照大神の能力は始まりと終焉の炎だ

「へえ

そうなんだ

それで僕の神の名前と能力は?」

「うん

お前の名前は阿瀧美須王汰那斗簾神【あぬびすおうたのとすかみ】  
だ

やたら長いね……

「神としての能力は死を司る……」

「?」

「良く分かつてないようだな……  
つまり死を司るって言つのは死体を腐らさなかつたり相手に死を錯  
覚させたり出来るんだよ」

「……なにそれ

僕今でも充分なのにそんなデタラメな能力……」

「まあ出ちましたもんは仕方ねえからな  
……ほら田代覚めの時間だぞ」

「ん? どう」「ア…… ラ…… サスケ?」

「お前今寝てるだろ  
どうやら起こそうとしてるらしいな」

「そのようだね  
じゃあ僕はもう行くよ」

「ああ  
じゃあな」

アランは光に包まれ消えた

s.i.d.oゼウス

それにして始まりの能力と終焉の能力でだいたいの神の能力が使えるってのにこの2つでも使えない能力をだすとはなしもエジプト神の死の友と呼ばれた神アヌビスとギリシア神の死の神の名前を足した名前……

全く恐ろしい少年……いや本当に恐ろしいのは人間だな……創造した俺より想像力があるなんてな……

「全く……

飽きないな人間は

ゼウスは微笑みながらその場から消えた

s.i.d.oアラン

さて……サスケに起こされた……此処までは良い……でも何故僕達の担任が黒板消しは頭に乗せてるんだい？僕が寝てる間に何があつたんだい？

そんな疑問を持ちながらもアカデミーから外に行き適当な階段の所に座った

「それじゃあ

先ずは自己紹介からだな

先ずは……金髪の女の子から順にだ

先生は女性です

金髪の女の子……ナルトしかいないね

「先生

先ずは先生から自己紹介してください」

ナルトが正論を言った

「私からか?

まあ良いか……私の名前はははたけ力カシ  
好きなものはまあ色々だ

嫌いなものをお前達に教える気は無い

将来の夢って言っても今更私が言つても意味が無いだろ?……  
ま……こんなところだな

……結局分かったのは名前だけだね

「それじゃあ

金髪君からだな

「仕方無いですね……

私の名前はうずまきナルト

好きなものは一樂ラーメンとイルカ先生と仲間です……でも一番好きなのはアラン（ボソッ）嫌いなものは諦めるやつと仲間を傷つけるやつ将来の夢は……内緒です／＼／＼／＼

ナルトは何故か此方を見て言った

今更ですがナルトの口調は荒ててる時とかにだつぱねといつ設定にしました

「それじゃあ次はピンク髪の子」

「私の（以下略）」

原作の所をサスケからクウロに変えたのと嫌いなものにナルトと言わなかつただけ

「次に黒髪の少年」

「俺の名前はうちはクウロ（以下略）」

此方も原作のサスケとほぼ一緒なので

「じゃあ

黒髪の女の子

「はい

私の名前はうちはサスケです  
好きなものは仲間と……アランです  
嫌いなものは仲間を傷つけるやつです

将来の夢はつちは一族復旧です

サスケが将来の夢を言つた瞬間クウロが睨んできたがサスケは完全に無視した

「最後に銀髪の君ね」

「僕の名前は青葉アラン  
好きなものは小動物に仲間  
嫌いなものは仲間を傷つけるやつに甘いものと覚悟のない正義かな?  
将来の夢は特に決めてないよ」

僕が自己紹介を終えると先生が口を開いた

「それじゃあ

明日演習場に集合してくれ

「先生

演習場に集合して何をするんですか?」

「何……下忍最終試験だよ

「…………え?」「…………」

僕以外が疑問視をあげる

「あれ?

君はビックリしないんだね

「だいたい

予想してたからね

「ふ～ん

まあ良いか……ああそれから明日朝、」飯は食べてこない方がいいわよ?」

「な……何故ですか?」

サクラがビクつきながらカカシに聞く

「…………吐くから」

先生は笑いながら少し殺氣を出してサクラに言つ  
殺氣だすつて……アカデミー卒業したての下忍に出てないでよお

「それでは……解散!――――――」

こりして僕達は家路についた

……何故か僕とクウロ以外は異様に燃えていたけどね

( (アランと一緒に…………――――――) )

(クウロ君と一緒に頑張るわよ――しゃんなる――――――)

分かると思いますが上がナルトとサスケで下がサクラです

まあ僕も楽しもつか

先生……覚悟してね?

明日は僕がかみ殺してあげるから

## はだけ力カシ登場（後書き）

「ねえ

僕の神としての名前のアヌビスとタナトスの話は本当かい？」

「本当だよ？」

ちゃんと調べたしね

アヌビスは死の友で死体を腐らさない神でエジプトの神  
タナトスは死の神でギリシアの神だよ」

「ふうん

魁斗にしては良くやつたね」

「初めてほめて貰えた！！！」

……さてと……あとがきはこれぐらいにして……次回もよろしくお  
願いします」

「次回も見ないとかみ殺すよ？」

## はだけカカシ／青葉アリノ（前書き）

「やあやあ皆の衆

我ほこの小説の作者魁ナドある」

「こもなつじうしたんだい？」

頭でもうつた？」

「ん？ ああ

ちゅつヒイメチヒンこよひと黙つたんだナビ…… もうぱつ辞めるー.

まあそんな事はどうでも良いだよ

今日はアリノの神としての能力を出かよーーーーーーーーーーーーーーーー

## はたけカカシVS青葉アラン

今僕は自分の部屋でいる

今の時間帯は9時30分

昨日上忍が指定した集合時間は8時00分……完璧に遅刻だね……  
つん? 何故落ち着いてられるかつて?

ああ……それはね

あの上忍必ず遅れると思つからだよ  
何故そう思うつて?

まあ昨日の出来事があつたからね

後は勘かな?

まあ多分僕の勘は当たつてると思つけどね

さて10時00分までに行くとして……先ずは転生者狩りに行こう  
かな?

つえ? 前倒しだろつて?

それがねあの馬神またやつてくれてね……

全く困つたもんだよ

とりあえず行きましょうか……

数十分後……

ある野原……

ここは数十年有名になる場所である

何故? 理由は簡単……そこで死んだ数十人の死骸が“腐らなかつた  
”からだ

皆は個々を【死の神が居た野原】と呼ぶ……

さてと……転生者狩りも終わつたし早速演習場に向かうじょうか

……

因みにアランが演習場についた時間はジャスト10時00分だったとか……

「遅い……！」

着いた瞬間ピンク髪の……サクラにそう言われた  
つえ？今忘れてただろって？

うん忘れてたよ  
だつて興味ないもの

「そうだよアラン……

集合時間から随分遅いよ……」

周りのナルトやサスケもそう言つてくる

「つか

君達あの上忍が速く来ると思つたの？」

僕はこれから思つていた疑問を三人にする

残念ながら僕は信じられなかつたよ……まあ現に今居ないんだけどね

「……遅いわね

「「……そうだね」」

話そらしたね……

まあ別に構わないけど……

さてあの上忍担任が来るまでどうやって転生者を狩ったか教えてあげるよ

（回想）

あの時僕はとりあえず転生を見つける能力を創った後また能力を創つて転生者を一力所に集めた

「な……なんだ！？」

「（）は何処なんだ！……！」

「俺は波の国の近くに転生した筈だぞ……！」

何十人と居る転生者の前に僕は降りた

「やあ

転生者達君

転生したばかりの君達には悪いけど……此処で“死んでよ”

僕がそう言つた瞬間転生者達は倒れていぐ  
……何をしたかって？

簡単だよ僕の神としての力を使つたに過ぎないよ

「つぐ…………！」

「な……なんなんだよ！……！」

「俺は…………まだ死にたくない……！」

あれ？

2人も残っちゃったね  
つえ？何故残つたかって？

……僕の神としての力はね複数人を相手だと生き残る“可能性”があるんだよ

まあ最低でも神とかから力を貰つた転生者レベルがなきゃ駄目なんだけどね……さてどうしようかな？あの2人は……よし……カカシと戦う前のウォーミングアップとして闘つてあげるよ

### 奇術師【マジシャン】&暗器術師【ブラックマスター】発動

奇術師【マジシャン】とはどんな相手でもばれずにマジックが出来る  
暗器術師【ブラックマスター】とは暗器がとても上手く出来る異常である

この一つを使ってボックス兵器とリングを取り出した

因みに奇術師【マジシャン】を発動していたので指輪は指に嵌つている状態です

ボウツー！

僕はリングに炎を灯しボックスに炎を注入する

そしてボックスから出でてきたトンファー（普通）を持つ

「それじゃあ  
行くよっ！」

アランが脅威的な速さで相手に近づく

「つくそが……！……！」

**光化静翔【テーマソング】発動！……！」**

「settピカピカの実！……！」

2人はアランを上回る光の速さでアランの攻撃をよける

「settゴムゴムの実！……！  
ギアセカンド！……！」

2人のうち1人が体が赤くなり体から煙がでる

「ゴムゴムの……」E+ピストル！……！」

**「光化静翔【テーマソング】……フルコーラス！……！」**

1人は目にも止まらない拳でアランに攻撃をしもう1人は何十何百となり周囲から攻撃をする

「……死の翼【デス・バッド】」

ドカンッ

「「ハアハアハア  
ど…どうだ！……！」

煙が晴れ……そこには何も居なかつた

「「よ…よっしゃー！……！」

「何を喜んでいるんだい？」

「「……つな……！」」

突然後ろから声がして振り向くと銀色に輝く髪に全てを飲み込みそうな青い瞳……そしてボロボロな黒い翼を生やしたアランがいた

「な……何故だ……！」

光の速さで攻撃したのに……何故お前が其処にいる…？

光化静翔【テーマソング】を使っていた転生者がアランに問う

「確かに君達は速かつたよ……それも光の速さ並みにね……でもねただ光より速いだけだよ……僕は死よりも速い」

「俺……よりも速い……だと？」

そんな事はない……俺が負けるはずがない」

「あ……有り得ない

悪魔の実の能力を持つた俺が負けるはずがない……………

つくそ…………

「ゴムゴムの…………Eテピストル…………！」

「そうだ……さつきのはまぐれだ………！」

「そうに違いない…………

なら次は無い…………光化静翔【テーマソング】フルコーラス！！

「…………！」

「君達に次はないよ

いつの間にか転生者の後ろに立っていたアラン

「誰も僕には触れられない」

ドナッ！……！

アランの言葉と同時に倒れる転生者達……

（回想終了）

つとこんな事があつたんだよ……

「やあ監査はよ」「「「遅い…………」「「」

さてと……どうやらカカシが来たようだね  
じゃあ楽しもうか……

「それで……

何をするんだ？」

クウロはカカシにそう聞いた

「うん？ ああ

今日わね……」

チャリン

カカシは忍具入れのポーチから鈴を4つと時計を取り出した

「「」の時計が鳴るまでに鈴を私から取れたら合格だよ

「つえ?

せ……先生それ……数あつてませんよ?」

「?

何言つている

これであつてこむ

「で……でも!—!

私達5人ですよ!—?1つたりませんよ!—!—!

「だから

それであつてているだよ

必然的に1人残ると言つことは1人は最低でも失格するんだよ

「そ……そんなの」

「忍の世界は“そんなの”って事ばかりだよ

「つ……」

カカシの最後のセリフで黙るサクラ

「それじゃあ

私がスタートと言つたら開始だ

因みに殺す氣でこないと取れないぞ?」

少々殺氣を出しながら言つカカシ

「それじゃあ……

スタート……！」

スタートと同時に全員隠れた……

さて……

この試験の正解はチームワーク……わざとみんなで行けないようにしているようだけど忍の世界ではどんな任務でも成功するために何でもする……犠牲は必要になる今回もそれなんだけど……サクラとクウロは無理だね

それに僕も1対1でやつてみたいしね……まあナルトとサスケにはこの事は話しておくかな？

数分後……

取りあえずナルトとサスケを見つけて今回の試験の答えを教えた後カカシと1対1で戦いたいから邪魔しないでと釘をさしたその代わり僕がサスケとナルトの分の鈴は取るけどね……ん？どうやらクウロとカカシの戦闘が終わつたようだね何故分かるつて？僕の能力の一つの千里眼を使ってるだけだよさて……と

次は僕の番だね

s.i.d.oカカシ

さてと……うちは生き残りの1人とピンク髪の女の子は倒したと

あとはあの人の娘とうちは一族のもう1人の生き残りとあの人のラバルと呼ばれた人の息子……楽しみだね

そんな事を考えていたら手裏剣が飛んできた

「つーーー」

カカシは忍具入れのポーチからクナイを取り出して手裏剣を弾く

「流石は上忍だね」

手裏剣が飛んできた方向には太陽で輝いている銀髪の少年アランがいた

「今的手裏剣

当たつていたら危なかつたよ?」

さつきの手裏剣は正確に急所を狙っていたからね……

「あれは挨拶だよ

それにあらぐらいしてもうわなづけやね」

「ツーフフ

言つね」

あれぐらー少なくとも中忍では出来ない事をあれぐらーね

「話は此処までだよ」

アランは何処から出したか分からぬいけビトンファーを取り出した

「まあ

本を仕舞つぐらーの時間はあがるよ」

原作と一緒にクウロやサクラ相手に本を読んだ状態で闘つてました  
読んでいた本はイチャイチャパラダイス（男性版）です

「結構優しいね  
だけどそんなのいらない  
ビュン

カカシが喋り終わる前にアランがクビにトンファーを軽く当てる

「つーーーー！」

トンファーをカカシの首から外して後ろに下がった

「次が最後だよ  
本……しまいなよ」

……フフ

これは……本気をださないと駄目のようだね

「これで良い？」

カカシはポーチに本をしまった

「うん……

これで遠慮せずに鈴を奪えるね

「簡単には取らせないよ」

アランとカカシは同時に動いた

アランが右手で殴りうとすると左手で防ぎ防いだと同時に左手で鈴を取ろうとすると右手で抑えた  
抑えた瞬間足を上げて左足でカカシの頭に当りようとするがカカシは咄嗟に左手で防いだ  
そして開いた右手で鈴に手を触れるがカカシが後ろに飛んだ為取れなかつた

「結構やるね  
君」

「……ふふ

君本当に下忍成り立てかい？」

何処から出したのか分からないトンファー  
何時仕舞つたのかも分からなかつた  
こつちに近づいたときには手元になかつた……  
本当に恐ろしいね

「これは……本当に本気で行かなきや駄目かな？」

「……ん?

なに言つてるんだい?

もう勝負はおしまいだよ?」

「ど言う事だい?

まだ鈴は取れてないよ?」

「鈴ならもう……」

チャリン

「 「 「 取れたよ 」 」

草村から出て来たナルトとサスケとアランの手には鈴が握られている

「 …… 」

何時の間に……

それになんであの2人まで……？

ピリリリリ

3人が鈴を見せたとほぼ同時に時計が成った

s.i.d.oアラン

漸く終わつたね……

ん？どうやって鈴を取つたかって？

暗器術師【ブラックマスター】で目にも見えない糸をつけたと同時に鈴を2つナルトとサスケの方向に鈴を投げた後糸を引っ張つて奪つただけだよ

まあ……そんな事よりどうやら終わつたみたいだね  
何がつて？

ああこの試験の第2幕がかな？

簡単に説明すると

時間が来たので終了

みんなが集まる

サクラとクウロにこの試験の答えつまりチームワークを教える

そして鈴を取れなかつた2人に忍を止める宣言をするカカシ

### キレて攻撃をするクウロ

だが普通に抑えられて首過ぎにクナイを当てサクラに「クウロを助けたければアランを殺せ！……」と叫び

### 戸惑うサクラ

……ねえ？もしかして本当に殺す気？  
あんな小食動物以下の奴のためにかい？

そんなサ克拉を見て殺氣を出すナルトとサスケ

……何故？

取りあえずクウロの上からざつて話の途中で襲ってきた罰としてクウロには弁当を食わせるなど言つてどいか（遠く？の木の陰に）行つた

なんやかんやでナルト、サクラ、サスケそして僕のお弁当をクウロに上げる事に……全部じゃないよ？流石にクウロも全部は食べれないよ？

皆のお弁当からちゅうどづつ出した

あげたと同時にカカシ登場

その後カカシが「忍者は裏の裏を読むべし忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズと呼ばれる」ちょっと間を開けて「だけどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだだと私は思う……」つと

言つて合格に成つた

……第2幕の答も当たつていたね

まあ取りあえず明日から下忍なんだね

ツフ……頑張ろう

## はたけ力カカシ▽S青葉アラン（後書き）

「ククッ……」

読者の君達……アランの神としての能力を出すのはカカシだと思つたか？……残念！……！転生者だよ！？」

「またイメチエンかい？」

「いやこれは言いたかっただけ」

「まあ……僕には関係ないね

それより僕の台詞で死よりも速いって何だい？」

「つえ？」

「ああ書いてみたかっただけだよ！……！」

「それだけかい？」

「いやもう一つ理由がある」

「？」

「どんな？」

「人は……いや動物もだね

脆く直ぐに死ぬ……僕はそれは何よりも速く……誰でも止められないと思つうんだ……」

「何か深いような深くないような感じだね」

「まあ良いんだよ  
それでは次回もよろしくね?」

「またね」

# 死の神アラン（前書き）

「ヤツ亦一！一！」

「……アランだよ」

「アーヴン元帥が無いよ………」やつて片側よ「いぬねこ」よ……」ま

・ あお儀には元氣が無い時もあるね(?)

「と話がすれた……今回の話はアランの修行＆セウスの秘密？」で  
かみんな絶句する秘密＆新しいキャラクター3人登場です！！！」

「  
結構

沢山あるね

「書いていたら書きたい内容が増えてね！！

まあ万三の修行は短いけれどね……

卷之三

## 死の神アラン

「ふあ よく寝た

……「ん?どこだい此処は?」

アランが目を覚ました場所は右は真っ白な空間で左が真っ黒な空間で後ろと自分が立っている場所は灰色だった

そして真っ白な空間には見覚えのある人物がいてその人物を見た瞬間冷めた目をして

奇術師【マジシャン】と暗器術師【ブラックマスター】を発動して黑白のボックスと黑白の指輪を取り出して指輪に黑白の炎を灯す

「また君かい?ゼウス  
次はなんだい?またミスとかなら今すぐ君をかみ殺すよ?」  
それを聞いたゼウスは汗を流しながら

「ちょ…ちょっと待つてくれ!?いやマジで待つて!!!!君のそ  
の武器まじで滅茶苦茶だから!!!!  
特に槍の能力が!!!!

なに能力関係無く殺せるかつて!!!!それなら不老不死である  
俺でも死ぬから!!!!  
つてか自分にあった能力を持つ武器って言う願いで何故そんな武器  
が出て来た!!!!ぶっちゃけそれだけで世界の一つや二つぐらい  
手に入れられるだろ?が!!!!」

何故か途中でキレるゼウス、まあ一理はあるけど……作者より

「話聞くから早く言こなよ」

## 炎を消していくアラン

「お前がいきなりボックスとリングを取るからだろ？」「

「……早く言わないと殺すよ？」

再びリングに炎を灯すアラン

「はい言わせて頂きます！！！」

今回アランを呼んだのはアランの神としての能力を完璧に扱って貰うためです！！！！

「？」

完成【ジ・エンド】で十一分に出来るんじゃないの？」

「完成【ジ・エンド】にも限界があるわよ？」

いきなりゼウス以外の声が真っ黒な空間からしたのでそちらを見たら白髪で黒眼の女性がいた

「誰だい君？」

「私？」

私は神……名前は天照大神

「君が……もう1人の最高神か……」

「私もあなたの事は知っているわ  
ゼウスとか他の神が始めた暇つぶしの転生者でありながら神に成った少年……しかも最高神と言う今まで2人しか居なかつた席につい

たつて……

神界、天界、地獄、地底では有名よ?「アラン……いえ阿濡美須王汰那斗簾神【アヌビスオウタナトスガミ】と呼んだ方が良いかしら?」

「好きな方で構わないよ」

「そう?」

ならアランと呼ばせて貰うわ

私も天照大神ではなくアテムって呼んで

私の真名よ」

「真名?」

なんだいそれ」

「あら? ゼウスから聞いてないの?」

「……聞いてないよ」

「そつ……真名を教える前に神には位があるのよ  
下から順に見習い神、下つ端神、新人神、下級神、中級神、土地神、  
悪神、善神、上級神、最上級神、そして私達最高神とあるわ  
そして中級神になると神としての名前を頂ける訳なのよ  
真名はそれまで名乗っていた名前つてわけよ」

「?」

僕は前世と現世では名前が違うよ? それならどうなるんだい?」

前世の名前に成るんだつたら……イヤだね

「神に成った時に名乗っていた名前だからアランになるわ」

良かつた……

「分かつたよ……  
それで？さつきから気になつてたんだけど何故黒色、灰色の空間が  
増えたんだ？」

「これはさつき言った神位が土地神に成つた時にそのものの空間を  
あげるのよ  
ゼウスの場合創り私の場合炎  
つまり創る者と壊すもの対に成つてるから白と黒の空間……そして  
今君が立っている空間はあなたの空間よ」

「やう言つこと……

つまり死＝灰色ってイメージ何だね

「それだけじゃ無いわよ？」

「？」

「やう言つ事だい？」

「さつきも言つたけど創る者＝白

壊すもの＝黒なの」

「…………つまり

僕が貰つた能力始まりの能力と終焉の能力も関係してゐるわけだね

「やう言つ事よ」

「白と黒を混ぜたら灰色っぽいもんね……

「それで？」

僕の能力を完璧に扱う為にどうすれば良いんだい？」

「簡単だよ

君には今からアルところに行つて貰う  
そこで100000万年居るだけで良い  
その中で何をしようと構わない

……ああそれから時間の事は気にしないでね現世の世界の時間は止  
めてるからね」「ね

「へえ……

なら心おきなく好きこなさせて貰うよ」

「せう……

なら後ろの扉に入つて行つて」

アテムがそう言つといきなり後ろから扉が出て来る

「じゃあ

行つてくるよ

「行つてらっしゃい

アランは戸惑わずに扉を開けて中に入つていった……

「あれ？

俺……空氣？」

等とゼウスが咳いたり咳かなかつたり……

扉の中

扇に入つたら入つてきた扇が自動にしまつた  
自動なら行きも自動で開けてよね……

そう考へているとあらゆる痛みが走った

そして次に「この世の物とはいえない熱さが出てくる

「ツグ！－！」

次は「この世の物とは思えない寒さがはしる

寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い

寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い  
寒い寒いサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサム  
イサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサム  
イサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサムイサム  
イサムイ

イサムイ

次々に苦しむ程の事が出て來た

……これだけで何回“死んだだろうか”

s.i.d.oアテム

アランが扉の中に入つていつた……

「何故……アランがあれを受けなきや成らないんだろうな」

ゼウスが寂しく悲しい声で言つ

彼……アランが入つた扉は私達神は……“生き地獄”と呼んでいる

……  
あの中で起ころるのは様々な死に方……人間が今まで経験した死に方  
から悪魔、天使、動物、魔王、神等の全ての死に方を一気に体に押  
し付けられる

……今までであの中に居られた最高時間は……10万年10000  
万倍の時間を受けなきやいけない

因みに10万年つてのは私どゼウスの事よ

まあそんな事今関係ないわね

今はただ……アランの帰りをまつだけ……

「そんな事より

ゼウス……あなた何時まで男のつもりでいるの?」

気分転換でゼウスに訪ねる

「つな！？」

お…お前それは言わない約束だろうか！？」

「はあ……あなた最高神だから男って考え方いわよ……変化までして……そんなの解きなさい」

私がそう言つとゼウスの体が光みるみる小さく成つていく

た：確かに古いかも知れないけど

「まあ自覺してゐるなら譲めなれど……

なな何言てるの// // // ! ! ! [

「知ってるんだからあなたが何時もアランの事を見ながら「ジ」主人様……／＼／＼」つて言いながらオナ「それ以上はダメ~~~~~！……！」／＼／＼「……

גַּעֲמָה

そうだよ……好きだよ

アランが転生してから今まで興味方位で見てたらどんどん好きに成ったよ……」

「他の神がミスしてアランの世界に転生者を送ったのを自分がした

ヨウジヤマコ

アランにお仕置きされたりしてる時頬赤かつたものね（変化のした

で……」

「「フ…フ…フ…」」

こんなやりとりをしていると扉が開いた（扉の中の時間は一秒で10000万年であるからもう出て来ても可笑しくありません）扉から出て来たのはボロボロな黒い翼を生やしてボロボロな黒い剣を持ち田が黒と白に成っているアランだった

「「ゾクッ！…！」」

な…なななに？

アラン君を見ただけで自分が殺される感じがした……

「？」

ああ……君、ゼウスかい？」

アランはゼウス（女）を見つめながらいつ

ああ……ゼウス変化解いてる状態だもんね

因みにアランに見つめられているので当然……

「／＼／＼／

真っ赤だった

「取りあえずあの扉で100000万年耐えたよ？

次は何をすれば良いんだい？」

剣を空間？に仕舞いこんで眼も白黒から何時もの青色に変わっていた

「つえ？……ああ

そ……そうね……なら天使召還でもしましょうか

「？」

天使……召還？」

首を傾げながら

「ああ……知らなかつたわね  
天使召還とは上級神から許されるんだけどね……自分の相棒？いえ  
使い魔？……みたいなのが召還するのよ」

「何故天使召還つて言つんかい？」

「今まで召還されたのが天使だったからよ

「へえ……

面白そうだね……どうすれば良いんだい？」

「先ずは六芒星をイメージして」

「…………」

アランは目を閉じ耳に集中するよつこした

「次は指で六芒星を書いて」

アランは言われた通りに空氣に六芒星を描く

するとアランの眼前に半分黒と半分白の六芒星が出て来た  
それにビックリしながら説明を続けるアテム

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

S.i.d.oアラン

アテムに言われて天使召還?って言うのを今はしている所だよ  
それにもゼウスが女だったのは驚いたね  
……次からかみ殺す時は手加減した方が良いかな?

アランは普通の時は子供や女性には優しいですが自分の信念を貫く為には容赦はしません

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

そう言われ自分の心に聞こえる言葉を口にだす

「我始まりと終焉なり  
我死を司る神なり  
我的呼ぶ声がしたら駆け寄れ  
我的叫ぶ声がしたら駆けつける  
汝の体は我が矛に……汝の魂は我が盾に……」

そこまで言つたら六芒星が強く光アランもゆっくり眼をあける

「我的命に従い現れよ……！」

ピカッ……！

最後の言葉を言った瞬間六芒星から今までの光より更に眩しく輝いた

流石のアラン達でも眩しいので目を開じた

光が止むと目を開けた

そして六芒星があつた場所には真っ黒なアランと違つて綺麗な真っ黒な翼と対面的な真っ白な翼を持つた女性（少女？）がいた

「ルシファー

主の命に従い召還されました」

「ラファエル

主の命に従い召還されました」

上が黒い翼の持ち主で下が白い翼の持ち主である

「「我が命

主と共に……」

2人はアランに片膝をついて誓つように言つ

「今……契約が成せれた」

自然と動く口にビックリするアラン

契約が完了したらルシファーとラファエルは立ち上がり

「ルッシーー！」

良かつたね！……また一緒に居られるよ……

「なんでラファエルが居るのよ……ちよ……抱きつかないで……

！！！

あ…主…助けて……」

「ルツシー！！！」

先程の威儀が全く無くなつた2人にどうすれば良いのか分からん  
アランは取りあえずラファエル？つと言う天使を落ち着かせる事に  
した

「ねえ

僕の話聞い「ルツシー ルツシー…………」「だから抱きつかないでつて……！」……僕のはな「だつてだつて……！嬉しいだもん！」ルツシーは私と一緒に嬉しくない？」「嬉しくない……わけないじやない……」「やつた」「ねえいい加減話聞いてくれないなら召還破棄してかみ殺すよ……？」

神としての能力を発動するアラン

さつきも言いましたが普段は女子供には優しいですがムカついたり自分の信念を貫く時には容赦しません

數分後

君達……僕に召還されたんだよね……？」

「はい……」

ルシファード・ラフエルに正座をさせて説教？教育？をしているアラン

「なのに

なんで召還者の前でいきなりなれ合つんだい？

先ずは僕に自分の名前と能力等を教えるのが先じゃないかい？  
それに主である僕の言葉を遮るなんて……君達本当に使い魔なのか  
い？」

「そ……それはラファエルが……」

「わ……私だけのせいにしないでよ……－－－！」

「な……何よ！－！」

始まりは「うるさ」よ？2人共黙るうね？」

「「は……はいいい－－－！」」

暴れ出しそうな2人を殺氣をだして抑えた後……  
数分後……

「反省したかい？」

2人に問うアラン

「「はい……」」

元気のない2人

「はあ」

そんな2人を見てため息を吐くアラン

「反省したならもう良いよ……  
だけど次からは気をつけてね？」

少し笑いながら2人の頭を撫でながら言つ  
そんなアランを見て……

「「主さまあ／＼／＼」

顔を赤らめながらアランを見る

(（私達の主……  
格好良すぎます／＼／＼  
絶対惚れてしまします／＼／＼）)

因みにゼウスとアテムは……

(格好良いよ～～～  
アラン／＼／＼)

(や……やばいわね  
ゼウスだけじゃなくて……私まで惚れるなんて／＼／＼)

被害を受けてた

「じゅあ

君達は僕が呼んだら来てね  
呼ばない時は僕の空間で好きにしていて構わないよ」

「「はい……」

頭から手を離して言つと何故か元気が無い2人

(（主様と離れ離れ……））

「？」

じゃあ僕は行くよアテムにゼウス

「つえ？」

あ…「うんまたね」

「う…うん

また来てねアラン／＼／＼／＼

「来ても良いけど男の体だつたら会いに来ないよ？」

「つえ？」

な…なら辞めるよ」

「その方が良いよ君アテムと一緒に可愛いんだからね」

「「か…可愛い／＼／＼／＼」

「「ツム」」

神2人は顔を赤らめ天使2人は不機嫌になる

「それじゃあね

……また会おうね可愛い天使ちゃん」

最後の最後に天使2人の耳元そう言つて現世？現実に戻つた  
因みにその後数時間は神2人と天使2人は顔を赤らめていたとかい  
なかつたとか……

## 死の神アラン（後書き）

「はい

今回まさかのゼウスが女だつた

……書いてた時に「あれ？なんでゼウス男にしたのかな？」うわあ  
～ミスつた……いや？これは良く一次元である「実は女だつた」  
でいけるか？」つ的な事があり急遽女にしました！！

……ああ因みに天使召還の時に使用した呪文はある漫画|一つの呪文  
をアレンジした感じです

それでは次回もお会いしましょう！――

「それにしても……アラン君どうしたんだろ?  
つえ？まだ寝てるの？」

任務!! 波の国編（前書き）

「はい！！！！！」

漸く波の国編まで来ました！！！！！」

「ねえ？

編つて事は……」

「はい！！！そうです！！！！」

今までと違つて一話完結ではないです！！！！！」

「……大丈夫なの？」

「……多分」

「…………」

「と……取りあえずスタート！！！！」

## 任務!! 波の国編

最終試験？鈴取り？から一週間たつた  
因みにアテムに会つたのは一週間半前の事だよ  
今僕達第七班と第零班は火影様の部屋にいる  
何をしてるかって？

理由は田の前にあるよ

「ああ……」

私の可愛いトラちゃん！！死ぬほど心配したのよ…………

この甲高い声をだしている人は今し方終わった任務の依頼者でこの  
火の大名の妻マダム・しじみ……依頼は迷子（逃げ出した）ペ  
ットを見つけて連れてくること……今は迷子になつたペットとの  
再会に熱い抱擁を交わしているけどね……

ニヤアアアアア…………

右耳にピンクのリボンを着けた猫【トラ】は御主人様の抱擁に涙を  
流し悲鳴のような鳴き声を上げていた……「ごめんね？忍の世界では  
冷徹な考えも必要なんだよ…………

「！」苦労じやつたな

さて第七班と第零班の次の任務は…………

ん～…………老中様の子どものお守に、畠仕事の手伝い、忍具の手入  
れど、それから…………

はあ…………分かつていていたけど……下忍の任務はつまらないね…………まあ  
もうそろそろ飽きてきたしね…………駄目でも聞いてみるかな？

「ねえ……

それ以外の任務つて無いのかい？」

「そうだよ！――！」

もつそろそろ私も忍者らしい任務をしたいよ――――――」

ナルトも僕の言葉に続いて言う

火影様は僕とナルトの言葉を聞いて困ったような顔をしている  
周りを見てみるとイルカ先生は止めようと力カシ先生は来たか  
みたいな顔をサクラはめんべくさそうな顔をサスケとクウロは一理  
あるみたいな顔をしていた

（もつそろそろ駄々をこねるとは思つてたけど…………）

（……彼奴等にしたら良いことを言つたな）

（なにめんべくさい事を言つてるのよ――――――）

（私もそろそろ草ムキとか以外の任務を受けたい――――――）

アランの推測は当たつていた

「ナルト、アランお前はまだ新米なんだ  
ちゃんと下済みを積まないといけないの  
サクラ、サスケお前たちも聞いてなさいよ  
そもそも……」

確かにね……下忍の任務はなんだけど……それでも忍者なんだ  
から……もつそろそろ氣の入る任務をしたいよ

最近転生者とばっかり闘つたり修行したりとそんなのばっかだったからね

「イルカ先生

僕ももう弱くないよもつともつと強くなりたいんだよ

この気持ちに嘘はないし半端な気持ちで言つてる訳じゃでもないよ

僕の言葉にため息を吐きながら「仕方ない奴だな」つと少し笑いながら言うイルカ先生

「う～～む

「火影様

こいつの思いは真剣なモノです

生半可な気持ちで言つてる訳じゃないですよ  
それにもろそろここつらにも上の任務を受けさせよつと思つてしまつたしね」

カカシ先生が火影様にそう言った

……カカシ先生も偶には良いことを言つね

「カカシ……お主がそう言つならば考えてみよつかの……」

「ありがとうございます

火影様」

三田は一杯ある紙を見る

「やうじやのう……ならこれでも受けて貰うかの

お主達に受けて貰う依頼難易度はCランク……ある人物の護衛じゃ

護衛……ね

「ランクでももの足りなさそうだけど子供ものお守や畠仕事の手伝い、忍具の手入れとかよりはマシだね

「護衛？それって結構偉い人だつたり……！」

「ランク任務の護衛で偉い人の訳無いじゃないか……」はあ

「そう慌てるでない今から紹介する……  
入つて来て貰えますかな？」

火影様の言葉を聞いて部屋に入つて来たのは片手に酒瓶を持った老人だった

「なんだあ？超ガキばっかじやね〜かよ

特にその銀髪お前それ本当に忍者かあー！？」

銀髪……僕の事かい？

……へえなかなか勇氣のある老人だね……

「君……そんなに死にたいのかい？」

「ゴゴゴゴゴー！……！」

「ねえ……アラン

間違つても依頼者を殺さないでよね？」

「分かつていいよ？カカシ

僕がそんな幼稚な事をするわけ無いじゃない

「ならその殺氣を沈めてよね」

「……分かったよ」

「わしは橋作りの超名人タズナというもんじゃ  
わしが国に帰つて橋を完成させるまでの間命を賭けて超護衛しても  
らう！」

「うん……こんな事なら畠仕事の手伝いの方が良かつたかもね……」

「直ぐに出発するそ�だから荷造りが終わり次第任務開始だよ」

「こうして僕たちは波の国へと向かう事になった  
途中暇だけど……なにしようかな？」

集合時間に30分も遅れて来た力カシにサクラが痴を言つのも今で  
は見慣れた光景だね

そして里と外を隔てる『あ』『ん』と書かれた門を開けて僕は初めてとなる（本体での）里外への一步を踏み出した

移動中……

移動中暇なので久しぶりにチャクラコントロールの修行をしている  
アランだよ

「ねえ

タズナさんタズナさんの国つて【波の国】でしょ？」

何を思ったのかサクラが読めない空氣を無理に読もうとしてタズナ

に話しかけた

「……それがどうした？」

不機嫌な声を出すタズナ

サクラ……僕はサクラをジト目で見るがサクラは気付かずタズナに向いていた顔を力カシに向ける

タズナの機嫌を悪くしたのに気付いたのか力カシを話に巻き込んだ

「ねえ力カシ先生…………その国にも忍者つているの？」

「いや波の国に忍者はいないよ

だけど大抵の他の国には文化や風習こそ違うが隠れ里が存在し忍者がいる

その中でも【木の葉】【霧】【雲】【砂】【岩】は忍び大国とも呼ばれている

つで里の長が【影】の名を語れるのもその五力国だけでね

その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者たちなんだよ

その火影の四代目つて絶対ナルトの父親だよね？

面影あるし昔の写真の髪の毛の色や眼の色なんかも一緒にいたからねそんな事を考えてふとほかの4人を見るナルトとサスケは「やっぱ火影つて凄いんだ……」みたいな感じで改めて火影の凄さを実感していくクウロは興味が無いらしくサクラは「へえ火影様つてスゴイんだあ～！」と感嘆していた

顔と言葉が一致してないけどね……

「君達火影様のこと疑っていたでしょ？」

……僕は疑つてないよ？

現に火影様は闘いたい人物の1人だからね

因みにバレたサクラは肩をビクッと震わせていた

「ま、安心しなさい……！」

（ランクの任務で忍者対決なんてするわけないよ

「じゃあ外国の忍者と接触する危険はないんだ  
はあ良かつた」

「もちろんだよ

アハハハ」

タズナの表情がカカシとサクラの談笑を聞いて変わったね……なに  
かあるね……この任務

周りを見てみたらサスケ、クウロ、ナルト、カカシも気付いたみたい  
いだけどナルトは微かしか気付けず疑問を捨ててサスケとクウロは  
気のせいかな？っと首を傾げていた  
カカシは目を細めてタズナを見ていた  
……これが下忍と上忍の違い……

ピチャピチャピチャピチャピチャピチャ

……早速来たようだね

整備された土の道に水溜まりがあることは別に疑問に思わないだろ  
うね……普段なら

だけど……ここ数日雨なんて降っていない……しかも今は任務……  
それも護衛任務だよ……

そして

水溜まりからちょっと行ったところで水溜まりから大きな鉤爪を付けた変な二人組が現れた……

動き辛く無いのかな？

場に似合わない事を考えていると一番後ろにいたカカシがそいつらの最初の的に成っていた

「なに！？」

カカシが態と負けた……流石上忍だね

これで誰が標的かと僕達の実力……2つの目的が達成できる

まあこんな奴2人なんかじや僕の敵にも障害にも成らない……

「ただの的だよ……」

アランは忍具入れからクナイを2本持ち2人に向かって走りだし近づいた時クナイを2本相手の首過ぎにクナイを当て……

「雷遁・雷移しの術」

雷遁・雷移しとは相手に触れる又は武器で触れた場合に使える相手に静電気をおこして戦闘不能にできる

もう出て来て良いんじゃないの？」

「……何時から氣づいていたの？」

「さあ？」

何時からだと思つ? 「

「はあ

まあ良いわ一応合格ね

……1人しか分からなかつたけどね」

僕以外の人物はいきなり過ぎて反応出来なかつたらしく暫く固まつていたよ

数分後……

「先生さつきと話が違うじやない!!

忍者との接触はないつて言つてたの私覚えてるんだから……」

全く……五月蠅いね

任務にトラブルはつき物何時何時何が起ころか分からない……例えCランク任務でもね……

「それは私も聞きたいわ  
タズナさん」

「……

な……何じゃ?」

カカシはタズナの目をジッと見て……

「ちょっとお話をあります」

嘘はつけない……いやつかせない

ついた瞬間……どうなるか分かるからね

数分後……

はあ……力カシ長いね

何度も何度もチャクラをあつらひしきに集中させる修行も飽きてきたね

……あ

右足が23%、左足に8%、右手に12%、左手に17%、胴体に28%、顔に12%と……はあ漸く来たようだね

「こいつらは霧隠れの中忍つてとこか……

いかなる犠牲を払つても戦い続けることで知られる忍だよ」

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは真剣に力カシの言葉を聞いている  
僕？僕も一応聞いてるよ？……つあ右手に1%行き過ぎた……

「何故

俺達の動きを見切れた？」

……ん？

なに言つてるの？クウロ  
嘘だよね？

「数日雨も降つていない今日みたいな晴れの日に水溜まりなんて無い  
いでしょ？普通」

4人はつあー！って顔を……つてナルトにサスケも分からなかつた  
んだね……はあ大丈夫かな？この班……

「あんたそれ知つてて何でガキにやらせた？」

タズナの疑問も当たり前だね……僕達がやられる=護衛されている自分の命だからね

忍なら絶対やらない事だしね

……でもねそれをしてもやらなきゃいけない事があるんだよ

「私がその気になればこいつらくらいい瞬殺できます  
ですが知る必要があつたのですよ

この敵のターゲットが誰であるのかをね」

「そつ……あんな事までして知らなくちゃいけないのはこの事……Cランク任務に他里の忍が出てくる筈がないからね……普通は……ね

依頼内容はギャングや盗賊などただの武装集団からの護衛だった筈です  
忍者が襲ってくるとなるとBランク以上の任務です  
依頼は橋を作るまでの支援・護衛という名目だった筈です  
敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定された筈  
何か訳ありみたいですが依頼で嘘をつかれると困ります  
これだと我々の任務外つてことになりますね」

「僕達忍者にとって一番大事なのは情報……一つでも情報と違う部分があつたら……最悪命にも関わるからね……」

「……先生さんよ話したいことがある  
依頼の内容についてじゃ

僕の言葉を聞いた後タズナはカカシに話だした

……真実をね

「あんたの言う通りおそれくこの仕事はあんたらの任務外じゃらつ  
実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている」

「超恐ろしい男……ですか

……誰です？」

「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃらつ  
海運会社の大富豪……ガトーという男だ……！」

……一応僕も影分身で波の国や様々な国に行つたけど……聞いた事  
ないね

「あのガトーカンパーーの……！」

世界有数の大金持ちと言われる

……そんなに凄いの？

ん？ ガトー？ ガトー…… ガトー…… ガトー…… ああ…… 思い出しだよ

確か僕が四歳の時の影分身でガトーカンパーーって集団の半分を殺  
した事があつたね…… ああ弱すぎて忘れてたよ……

「そう…… 表向きは海運会社として活動しとるが裏ではギャング  
や忍を使い麻薬や禁制品の密売…… 果ては企業や国の乗つ取りとい  
つた悪い商売を生業としている男じゃ

一年ほど前じゃ…… そんな奴が波の国に目をつけたのは財力と暴  
力をタテに入り込んできた奴はあつ…… いう間に島の全ての海上交通・  
運搬を牛耳つてしまつたのじゃ…… 島国国家の要である交通を  
独占し今や富の全てを独占するガトー…… そんなガトーが唯一  
恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ……！」

へえ……そんなに凄い集団だつたんだね  
知らなかつたよ……

「……なるほど

つで橋を作つてゐるおじさんが邪魔になつたつてわけね

日本文庫  
第三卷

……君頭良いって嘘でしょ？話聞いて襲つてきたその2人がガトーカンパニー？だつけ？からの刺客じやなかつたらなんなんだい？話聞いてた？

「…………波の国は超貧しい国での…………大名ですから金を持つてない。勿論わしらにもそんな金は無い。高額なBランク以上の依頼をするよつな……な」

そうなんだ……

「すみませんが

「この任務はなか「ちょっと待つてよ」つ…アラン?」

「タズナ……悪いけど呼び捨てで呼ばせて貰うよ。」

あなたが嘘をついた事は悪だよ

僕達木の葉の里の忍者に対する侮辱だよ？それを分かつてでしたのかい？」

「……ああ」

גַּם

ならこの任務……………僕は受けれるよ

「つ、え？…」

タズナがビックリして俯いていた顔を上げる

「アラン！？」

「タズナ……あんたは悪……でもね自分の守りたい者のために悪に成ったあんたを少なくとも僕は絶賛するよ……それに僕任務を途中で放り出して逃げるような忍者には成りたくないんだよ……逃げたらもう一度と……僕の信念を貫けないからね」

「な……なによ！？」

信念のために死ぬわけあんた！！！馬鹿じゃないの！！！私は絶対いかないからね！！！！！」

サクラが僕に向かつて叫んだ

「別に良いよ

さつきも言つたけどこの任務を受けるのは木の葉でもこの第七班と第零班でもないよ……僕青葉アランが個人的に受けるだけだよ

……それに

「ヤツと笑つて……

「僕は死ぬつもりはないよ？」

## 任務!! 波の国編（後書き）

「やあ 読者のみんな！！」

毎回毎回 NARUTO～転生と始まりと終焉～を見ててくれてありがとうございます  
とづー！！！

それから白が出てくると思つた読者残念！！！！

……今回もあとがきにアラン君が居ないから寂しいけど頑張ります  
！！！！

今日はアランの信念を書きました

他の小説じゃあ絶対に無いような感じを書きたいと思つていたらこんな形に……でも信念を貫くアランの姿に僕も痺れた！！！  
信念を貫く主人公って格好いいですよね！！！！  
……それではまた次回お会いしましょう！！！！

## 任務一一波の国編2（前書き）

「今回」これは桃地さん達が出でたと思こまへよ………」

「思ひだけかい？」

「いや…………出るが一…………絶対であるが一…………」

## 任務！！波の国編2

あれから波の国にタズナと向かってるんだけど……

一  
ねえ

「なんて君達も来てるんたし？」

「君だけで行かせれないでしょ？」

「アラカルト」が「アラカルト」

「別に良いでしょ！！！！！」

「フン...」

クウロ「フン……」つて答えに成つてないよ……？

「まあ別に構わないけど僕の邪魔だけはしないでよね」

數分後

「ヒツヒツフーヒツヒツフー」

今僕はクウロと一緒に視界を遮るくらい濃い霧が発生している大きな川を小船に乗つて渡つている最中だよ

周りを見てみるけどホントに何にも見えないね

まあ僕には関係無いんだけどね

因みにヒツヒツフーとは舟漕ぐ時に発する言葉なんだつて……

妊娠じゃないだけね……はあ

最近ため息が増えたような気がするよ……

取りあえず陸に着いたよ  
クウロが隣で「ハアハア」言つてるのが凄く憂鬱だけどね……僕は  
つて? 僕は大丈夫だよ体力的にも精神的にもね  
……ん? 僕は誰と話しているんだろ?

「護衛頼むぞ!!!

ガハハハハ!!!!

はあ……帰つて寝たいよ

歩いていると僕の感知……円に知らないチャクラが掛かつた

円とはハンターハンターで出てくる技です

力カシに言つた方が良いのかな?  
いや……まだ敵とは限つてないね……

「それでも遠いですね

まだ町は遠いですかタズナさん?」

「もう少し行けば見えてくるじゃろう

町に着いたらわしの家で休んでいけばいい!!!

疲れが取れなかつたら、一晩でも一晩でも休んで行つていいで!!

ガハハハハ

僕は速攻で任務を終わらせて帰つて寝たい気分だ!!!!

!

「皆伏せろ！！！！！」

F. F. F. F. F.

ナルト、サスケ、クウロ、カカシは僕の言葉に従つて伏せた  
タズナは僕が頭を掴んで無理やり伏させた

レジデンス

そんな音を出しながら大きな塊が飛んできて木に刺さつた  
そして大きな刀の上に忍者？の男が立っていた

これは霧隠れの上忍桃地再不斬君じゃない」  
へえ

カカシは軽口を言いながら立ち上がる

……それだけヤバい相手なんだね

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは相手の殺氣に当たられて震えている

僕も震える経験をしたなあ……3歳半位の時にね……確か相手は蛇人間だつたかな?

「お前等下つてなれ

「こいつはさつきの奴らとは桁が違う……」こいつが相手だと私もこのままじやうよつとキツいかな……？」

カカシが隠している方の額宛を掴む

「写輪眼の力カシか……」

悪いがお前に用はない

そのじじいを渡してもらおうか」

「お前達タズナさんを囮つて守つてなさい  
それからアランお前がさつきからウズウズしているのは分かつてい  
るがこればっかりはお前にはまだ早い  
ここは私に任せとおけ」

「……仕方ないね

今回だけは譲つてあげるよ」

「再不斬

まずは私と戦え」

「……渡す気はないようだな

だが噂の写輪眼を見れるなら幸運だと思つておくか……」

相手はニヤッと殺氣を出しながら言つからサクラが失禁しそうだよ

……

そしてカカシが額宛を上にズラして左眼を開ける

……へえカカシって写輪眼使えるんだね……

そして後ろではクウロがサクラにサスケがナルトに写輪眼を説明し  
ている

……サスケにクウロ君達仲悪すぎでしょ

ほらサクラとナルトが場違いに苦笑いしてるじゃない……

「お話しはこれくらいでいいか

俺はさつとそこのじじいを殺らなくちゃなんねえからよ」

相手は木に刺さった剣を抜いて木から飛び降りる

川の上に飛び降りると瞬時に印を結び【霧隠れの術】を使って視界が見えなく成った

……まあ僕には関係ないけどね……

「あいつがまず最初に狙うのは私だろう  
だが桃地再不斬

こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術の達人として知られた男だよ気がついたらあの世だつたなんてことになりかねない…………私も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない!!!!  
お前たちも気を抜くな!!!!!!」

いや……必ずも力カシを狙つて来るつてわけが無いね……

『ハガ所だ……』

……馬鹿なの?

無音殺人術なら喋つたら駄目じゃない  
なに?下忍だからって舐めてるのかい?

忍者なら【無情になれ、殺す時は躊躇するな、相手が誰でも油断はするな】だよ……

『咽頭・脊柱・頸動脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓

……さて、どの急所がいい?くくくくく』

殺人宣言かい？

律儀だね……何も言わずに来たら一瞬で殺せたかも知れないのにね

「クウロ

安心しろお前達は私が死んでも守つてやるから」

……死んだら守れないのにね

それよりクウロの名前を出すつて……ショタかい？カカシ

シリアスな空気が崩れた瞬間だった……

それからカカシはクウロに気はありませんから

「私の仲間は絶対に殺させやしないから」

はあ……相手も何律儀に待つんだろう？

案外忍者つて馬鹿なのかい？

はあ……本当帰つて寝たいよ……

『それは

どうかな……』

カカシが斜めに斬り裂かれる

……流石は上忍……

「終わりだ

カカシ……なにっ！……！」

あの一瞬で水分身をするとはね……

斬られた力カシはバシャツといづ音を出して水になって辺りに飛び散る

それを見た桃地は動きを止めて自分の首に突き付けられたクナイを横目で見る

「水分身の術だと…………まさか霧隠れの術の時には既にコピーしてたつてのか！……！」

「動くな…………これで終わりだよ」

「さっすが力カシ先生！！！」

私先生ならやつてくれるって信じてた！……！」

あからさまな嘘だね……

それから力カシ…………警戒無む過ぎそんなど……

「ククク

終わりだと？

分かつてねえな力カシ猿真似如きじやあこの俺様は倒せない  
絶対にな！！！！

しかしやるじやねえか

分身の方にいかにもらしい台詞を喋らせてることで俺の注意を完全にそっちに引きつけ本体はその藪の中に隠れて俺の動きを窺つていたつて寸法か……」

桃地が力カシの事を絶賛するが僕なら隠れてる方も分身にするね……

「けどな…………俺もそつ甘かねえんだよ！……！」

力カシと一緒に水に成つて消えた本体は力カシの後ろに回つて切り

かかるが……

ドゴンッ！――！

「つな――！」

「君……僕の事忘れてないかい？」

僕が先に蹴り飛ばした

「カカシは休んでなよ  
此処は僕がやらせて貰うつ」

カカシの前に出てそつぱつ

「な……なに馬鹿な事言つてるのあんた――！私達にあんな化け物  
に勝て「僕を君程度と一緒にしないでよね」つ――！」

僕はサクラに向かつて殺氣を飛ばす

信念も何もない君なんかには言われたくないよ……

「さて……行くよ。」

僕は右手の親指を噛み左手に横に線を引き印を結んだ

「口寄せ……白月」

左手から煙が立ち煙が晴れると白い竿に入った刀が現れる

「抜刀術……白瞬！――！」

一気に桃地に近づき瞬速の速さで刀身を抜く

キンッ！――！

「つ――！」

「へえ……

白瞬を防ぐんだね……なら一刀流……速さの型……白速……」

刀をまた瞬速の速さで振るう

「ツグ……！――！」

刀を避けようとするが掠り傷が頬をに出る

「まだまだ

一刀流……攻撃の型……白龍――！」

避けた桃地の首に向かって突きを放つ

キイン！――！

「ガハッ！――！」

剣で防いだ桃地だがあまりの衝撃で剣を飛ばされる

「ハアハア

「終わりだ……」

な……何モンだテメエ」

「お前の死神や……一刀流……連続の型……はぐく

ザクザク……！」

アランが攻撃を仕掛けようとしたら桃地の首に細い何かが刺される

「フフフ

本当に死んじゃった

どうやら霧隠れの暗部らしく桃地を回収しに来たらしい  
一応力カシが桃地の生死を確認して暗部が桃地を連れて行く……前  
に僕が桃地に触れた

異常……田印【ペイント】発動……発動完了……  
僕が田印【ペイント】を桃地にかけていたら近づいてきた暗部が口  
を開いて……

「？」

何ですか？」

僕に質問してきたよ

「ん？ああ

何でもないよ……気にしないで良いよ」

「そうですか

それでは僕はこれで……」

そう言って桃地を担いでどこかに行つた

僕達が桃地を担いで去っていくのを見ていると……

バタツ

後ろで突然力カシが倒れた

「だ……大丈夫ですか！！！！！」

サクラが力カシに駆け寄り大丈夫かを聞いた

「ああ……うん  
大丈夫よ……ただ写輪眼の使いすぎで倒れただけだから」……これ  
がうちは一族が使うのとうちは一族以外が使う違い……か  
はあ……仕方ないね

僕は力カシに近づき持ち上げる

「キヤア！！！！！」

「力カシは僕が連れて行くから速く行くよ

「つちよ……ちよつと……！」

「五月蠅いよ

歩けない人は黙つててね」

「うつ……あ……ああ／＼／＼／＼

何故か顔を赤くする力カシ……何故?  
それから睨んでくるサスケにナルト

……何かしたかい？僕

s.i.d○カカシ

同僚の皆も言つてたけど

アランってやつぱり格好いいわね

……つて何を考えているんだ私は！――――――――――――――

でもやつぱり格好いいな～～～／＼／＼／＼＼＼

カカシをも虜にするアランであった

s.i.d○ナルト

なんでアランってあんなにフラグたてるだつてばね……しかも鈍感  
だし

私の気持ちも分からないつてばね  
こうなつたら直接言つた方がいいのかな？

（想像中）  
……

む……むむ無理だつてばね！――

つて何時の間にか口調を可笑しく成つてた！――――

でも昔アランにこの話方をつい言つたら「？可愛いや？」つて言つ  
てくれたから私的には気に入つててばね  
つて何言つてるてばね私／＼／＼

s.i.d○サスケ

アラン……またなのね  
しかも教……いえアカデミー時代から教師も虜にしてたわね  
でも任務を続行する時のアランや戦つてる時のアラン……格好良か

つたなあ～～／＼＼＼＼

駄目だ思い出したら顔が赤くなってきた／＼＼＼＼

s.i.d.oアラン

?

何故かナルト、サスケ、カカシが何か険しく成つたり顔を赤くしたりしている……何かあつたのかな？

当の本人は全く気づかないと言つ……全く鈍感なアランだったん？何かムカつく声が聞こえたような？気のせいかな……？

恋愛以外は鋭いアラン

……なんで恋愛は鈍いんだろう？主人公だからかな？  
はあ全く難儀な主人公だよ……

やつぱりムカつく声が聞こえるよね……？  
誰だい話しているのは……でも気配は無いしやつぱり気のせいだ  
ね

任務！—波の国編2（後書き）

「ほりね  
出たでしょ？」

「それよつ  
最後の何だい？」

「つえ？」

「ああ……あれは時間稼ぎならぬ文字稼ぎかな……つてアラン……！」

「そんな事だと思ったよ……君に地獄を見せてあげるよ」

「ギャアアアアー！久しづぶりの『こんな流れ……』！」

「（）こんな作者の小説だけどこれかひもよんじへね？」

## 任務！—波の国編③（前書き）

久々のNARUTO～転生と始まりと終焉～更新しましたー！！！  
グダグダ過ぎますので温かい田で見て下さい

## 任務!! 波の国編3

あれから力カシを抱えてタズナの家にやつてきた……

「もしかしたら……」

桃地は生きてるかもしない……」

力カシが突然発した言葉にサクラ、サスケ、ナルト、クウロは「え……？」って顔をした

それから力カシがあの暗部が使っていたクナイの確かに千本だつたかな?を説明した

そしてなんやかんやあつて修行する事に……

つえ……?なんやかんやつて何だつて……?

なんやかんやはなんやかんやだよ

30分探○でもそう言つてたよ?

うん……?30分○偵つて何だらうね……?

まあ……良いや……

ああ……修行内容は木登りだよ……手ではなく足でのね……

今力カシが木登り修行の意味とやり方を説明している

……ナルト……チャクラの事ぐらい覚えとこうよ……

「じゃあ

やつてみようか」

サクラ、サスケ、ナルト、クウロ、僕は足にチャクラを込めて木を登り(走り?)始めた

一番始めて落ちたのはナルト次に落ちたのはサスケとクウロ  
サクラはチャクラコントロール、だけ、は良いのか木の上で座つて  
いる

僕……？片足でてつぺんまで登ったよ？

当たり前じゃないか

僕はずつと前からチャクラコントロールの修行をしてるんだよ？

上手く無かつたら泣いてるよ

（サスケ、ナルト、クウロは予想どりつ……

サクラもチャクラコントロールは上手だから予想どりりね……だけどアランにはビックリしたわね……

出来るとは思つてたけど……予想以上ね

「あれ？

名門のうちは一族……しかも今年ナンバー2のうちはの天才と言われてるうちはクウロ君は女の子に負けるのかな？

「……くわつ」

（先生……！……！

何よけい事言つてクウロ君を苛めるのよ……！……！）

「それに……！」

クウロ君はナンバー2じやなくてナンバー1よ……！

そこにいるアランが勝てたのは偶々……ってかクウロ君が手加減したからよ……！……！

ピクッ……

「「何言つてんのよ（てばね）……！……！

アランが一番に決まつてるじゃない（てばね）……！……！」

はあ……

力カシの挑発に乗るのか……まあ確かにあの弱者にそう言われるの  
は苛立つけどね……

アランは相手の力量によつて呼び名が変わります  
下からゴミ、クズ、ヘタラ、弱者、草食動物、馬鹿、阿呆、肉食動  
物、強者の順です

因みに上の呼び名を使うときは使う相手に苛立つ時に使います  
それ以外は基本呼び捨てです

「ハイハイ

落ち着く落ち着く……」

……力カシ……君が挑発するからだよ……

まあこいつ等も過激に反応したのも悪かつたんだけどね……

「取りあえず

アランとサクラは自由にしといて良いわ

ナルト、クウロ、サスケは引き続き木登り修行をしてなさい」

カカシはそう言ってからタズナの家に戻つていった  
僕は影分身を作つて（一体）この場に残してナルト達から離れる

sid○アラン（影分身）

本体が離れていくのを見て姿が見えなくなつた所で視線をナルト達  
に向ける……

ナルトはチャクラ量が多くて上手く扱えないようだね……サスケも  
チャ克拉量は多いけどナルトより少ないしナルトよりチャ克拉コン  
トロールが上手いから少しづつ上達してきた

クウロはつて……？

興味ないよ

そんな事を考えていたらクウロがサクラに「コッ」を聞いていた  
それを見たサスケとナルトは僕の方にやってきた

「ねえ

アラン【コ】とかつてないの？」

「ん?

……まああるかな?」

「「な……なら教えて………」」

ん～～

まあ暇つぶしにはなるかな?

「分かつたよ

教えてあげる」

「「や……やつたあああ……」」

喜ぶのは出来てからにしなよ……

s.i.d.oトラン（本体）

れい……と

漸くあいつから離れられたな……

先ずは……異常発動……田印【ペイント】発動……よこよこへこつ  
たね……次に脇罪証明【アリバイブロック】発動……

## 異常説明

### 目印【ペイント】

発動方法は相手に触れて頭の中で目印【ペイント】発動と言う事  
後から目印【ペイント】発動と言った場合触れた相手の位置が分かる  
複数居た場合は思い浮かべた者の位置が分かる

ふう  
…

偶々創つていた目印【ペイント】が役にたつとはね……人生何があるか分からぬものだね……

「――――!

君は……」

うん?

ああ……やつぱり

「君はそこに倒れる……

いや桃地とはぐるだつたんだね……」

「……何時気づいたのですか?」

「何時?

そうだね……疑問を持ったのは初めっからだよ」

「……なぜ?

自慢ではないけどなかなか上手く暗部のフリができるとおもつたんですけれど……」

「確かに上手かったよ……

一つを除いたらね……」

「一つ?

何ですか?」

「数だよ数」

「数?」

「桃地ザブザ……

力カシの話を聞いた限りなら最低でも三人は居るはず……なのに来たのは暗部一人……流石に桃地相手に一人で行かすはずがないよ」

「……もしかしたら

人員が居なかつたかも知れないし別々行動をしたかも知れませんよ?」

「確かに……それは有るかも知れないな

だから一旦逃がした……印をつけてね……」

「泳がしたんですね?」

そう……俺の推理は所詮空論

確かに証拠がない

例え桃地を逃がさずに異議を唱えたとしても今のようにかわされるのみ

無理やりという選択もあつたけどもし僕の推理が間違つていて本物の暗部なら戦争が起きる……

だから逃がした、フリ、をした

逃がした後に目印【ペイント】で居場所をつかむためにちゃんと霧の国に向かっていたなら本物

霧の国に向かっていなければ偽物……

「凄いね君

そんな年で……でも一人で来たのが……ミスだったね……」

相手は一気に俺に近づいて攻撃してきたが……

「木遁・木縛り」

先に印を結び木で相手を捕らえる

「まあ

そんなにいきりたつな

別に殺しに来た訳じゃないよ」

そうだ

僕は別に桃地を殺しにきたわけでもまして偽物を殺しに来たわけでもない

「じゃあ……

なにしに……？」

「君達

ガトー……だつたけ?  
に雇われてるんでしょ?」

「……ええ」

「だつたら……

君達を僕が雇う

「……つえ？」

「対価は命と自由……まあ自由と叫びても木の葉の中ってのと僕の意志によるけど……不自由ない自由ぐらいはあるよあとは……生活に困らないお金と生活場所を貰えるよ」

「……内容は？」

「内容は戦闘……

もつと言えば僕が戦つて欲しい時に戦つて貰つだけだよ

「……分かりました

良こでしょ？……だけどザブザさんほどつまつぱいですか？」

「どうするつもつもなにも……雇つんだけ？」

何を言つてゐるんだい？

「い……いえ

ザブザさんは色々な意味で有名ですから……」

ああ

そういう事……

「大丈夫だよ

僕の忍術でみんなが犯罪者桃地ザブザとは云つかないようにするからね」

まあ……認識妨害何だけどね……なんなら異常を作れば良いし

大嘘つき【オールファイクション】で無かつた事にすれば良いしね

「……なんで

こんなに良くしてくれるんですか?」

「まあ

戦力がいるが30%

まあ……木の葉は平和だからね……良い意味でも悪い意味でもね……

「残りの70%は?」

「?

友達だからだよ?」

「つえ……? ??」

「うん?

まさか忘れたのかい?

由

「つえ?

あ……アラン……なの?」

そつ

彼……いや彼女とは知り合いで……まあ影分身でだけどね  
昔霧の国に行つたときに友達になつたんだよ

まあ……由印【ペイント】使つまで気づかなかつたけどね

由印にも由印【ペイント】を昔つけていた

「あ…アラン君！…！」

契約成立したと同時に木を解いた  
そしたら白が急に抱きついてきた

「？？？？」

どうしたんだい？？」

「アラン君……アラン君

会いたかったよ……」

白にあつた時に落とします

落としかたはナルトの時と一緒にです  
つくー！羨ましいー！！！」

「なんだこれ……」

桃地さんは白を覚ましてそうひ言つてたとか言つてなかつたとか……

⋮

# 任務！！波の国編3（後書き）

最近

五つの炎とこのNARUTO～転生と始まりと終焉～以外の小説を  
2作品書い、と思つのですが一つのうしなの一つのキャラの姿を悩  
んでいます

だからアンケートをしたいと思います。――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

時得醫無用（護謹）—？

？市丸銀

?ウルキオラ

? 日番谷

國文二年六月

因みに百鬼と曰番谷は過去（仮面編）か現在（死神代行消失篇）かを選んでいただくとありがたいです

ああそれからうちの小説にアランを書きたいと言つ方は書いて下さい  
何時でもアランを貸し出します――――――

# 任務！波の国編4（前書き）

任務！！波の国編4

「つまり

てめえが俺達を雇つたって事か……？」

「うん

そんな所だね」

「てめえ

正気か？」

「なにがだい？」

「はあ……

だから俺達を雇うと言つことは俺達を匿つと言つ事だぞ？  
そんな危険な橋を自分から渡るなんて……って事だよ

「ああ……

そんな事」

「お前……

そんな事つて……結構重大事じやねえか

確かに重大事だね……

一般的にはね

「この一般的はNARUTO世界の一般的です

「だけど……

君達を雇つた方が樂しそうじゃないか  
危険？構わないよ

僕は僕のしたいようにするだけ……それだけだよ

「俺達は……人殺しだぞ？ それでもか？」

桃地は殺氣をだしながらアランに言ひ  
白は黙つて成り行きを見守つてゐる

「はあ……

桃地お前は馬鹿なのかい？」

「なに？」

いきなり馬鹿と言われてイラッとする桃地  
そんな桃地を無視して話を続けるアラン

「忍の世界で殺しなんて日常茶飯事じゃないか  
今の所木の葉は殺しがない……温い里になつたけどね……それに……」

「…

そこ今まで言つて口を開じるアラン

「それに……何ですか？」

アラン君

流石に気になつた白がアランに聞く  
アランはゆっくり口を開き

「僕の方が君達より沢山殺してるよ

「 「つ……！」

殺氣をだしながら言つたアラン  
そんなアランの口元は……笑っていた  
そんなアランに恐怖を抱いた桃地

「桃地……」

君の問は間違つてるよ

あの言い方……人も殺した事のない人間に言つ葉だよ  
ああ……因みに初めて人を殺したのは……一歳の時だよ」

皆さん覚えてるだろうか？

アランの修行方を……何人も影分身を“一緒に空間”で修行する  
……と思ってましたか……？

それは違いますよ……アランの修行方は影分身をだして変化の術で  
木の葉の里から出てその後時空間忍術で様々な時代に行つて修行を  
していたんだよ

「 「…………」」

突然のアランの言葉に声を忘れるぐらいい咤然している2人

アランはため息をつき「……仕方ないね」って言つたと思ったら……

「これぐらいで良いかな？

桃地“ちゃん”」

「つな……」

その言い方お前まさか……」

「ククッ

久しぶりだね」

急に桃地の言い方を変えた

それに啞然としていた桃地が口を開いた

アランはそんな桃地を無視して口寄せの術の応用技を使い家にある

仮面を持つて桃地に見せた

「アラク……お前……アラク……なのか？」

「ああ

アラクだよ」

「……

……そうか……久しぶりだな」

「ああ

久しぶりだね」

数時間後……

「でも

まさかアラン君とザブザさんが知り合いだったなんて……

僕も最初気づかなかつたよ

まさかあの時の“餓鬼”がここまで成長するなんてね

「ああ

「止めてくれねえか？」

その呼び方

しかも今ではお前の方が餓鬼だらうが」

「僕は実力の所を言つてゐんだよ?」

それに年齢も(前世と影分身の年齢を疋すと)君より上だよ」

「んなわけねえだろ…………」

桃地は呆れながらアラク……いやアランに言つ

「まあ

年齢の所は別にどうでも良いけど実力の方は本心で言つてるよ?

君は餓鬼……いや“弱者”だよ」

「…………」

桃地はアランの言葉に反応してアランを睨みつけるがアランはビリ吹く風つと言つて風に無視をする

白はどうしたらいいのか分からずそわそわしてゐ

「君は昔より弱いよ」

「どう言つ意味だ……?」

アラク……いやアラン」

「どう言つ意味も……言葉のまんまだよ  
昔教えたよね?どんな相手にも油断しない  
例え子供でも……ね」

「つ――――」

アランの言葉を聞いた瞬間、ピタリッと止まつた桃地

「言つたよね？」

覚えてないって言わせないよ？

今回僕たちが来たときに気配を消して殺せば良かつた、カカシと喋る前に殺せば良かつた、気配消した時何も言わずに殺せば良かつた、カカシを狙わずにナズナを初めてから殺せば良かつた

君は油断したんだよね？

相手は下忍……上忍はいるけど子供3人にじいさん1人だ……殺すのも簡単だつて思つたんだよね？

しかも額宛から見て木の葉……あんな温い里のしかも下忍が3人もいる……でも君は【負けた】

その生温い木の葉の下忍の僕にね

……まあ君が本気で来ようと僕は勝てたけどね

「…………」

桃地はアランの言葉を聞いても何も言わずにいた  
白も唯單にアランを見ていた（見惚れていた）

「確かに……」

俺は油断していたのかもな……」

「まあ

分かればいいよ

何時までも同じ話題を言つほどネチッこくないしね僕は……そんな事より白と桃地をこれから木の葉に連れて行こうと思つんだけど構わないよね？」

アランは一応確認として桃地と白に訪ねた

「ああ

構わねえよ

「僕も構いません」

「分かつたよ

まあ安心しなよ……一瞬だから

アリバイブロック  
脇罪証明発動

アランは2人の体に触れて（白と桃地の肩）そう言つた瞬間3人が  
消えた

231

「どう……ん？」

「「どうしたんだ（ですか？）」「

アリバイブロック  
脇罪証明を使用して来た場所は……先程と同じ場所だった

アリバイブロック  
（脇罪証明が発動してない……？

アリバイブロック  
いや……脇罪証明はちゃんと発動した……なら何が……？

「分からぬ一つ顔してやがるな

“アラン”

アランが考え事をしていると急に上空から声がかかる

アランは上空に目を向けると……真っ赤な目と真っ青な青い髪をし

た少年? がいた

「誰だい…?」

君……」

アランは少し威圧的に訪ねた

「ツクク

怖いなあ……やはり“噂”道理だぜ

阿濡美須王汰那斗簾神【アヌビスおうタナトスガミ】……いや転生者殺しつてほうが良いか?」

「君……転生者かい?」

威圧……いや凄まじい殺氣を青髪の少年?に飛ばすアラン

相手も相応な殺氣をアランに返す

そんな中アランの殺気に当たれて動けない白と桃地

(な……!!)

なんだ!!

俺が……この俺がビビッてるだと!?

昔より強く成つたって言つのに……!!

クソッ!!)

(な……なんですか?

この殺氣は……

今まで様々な敵……そこでこそ強敵と言われる人と戦い(殺し合い)をしましたが……それが子供の戯れ……いえ赤子の戯れみたいに感じる……!!)

「へえ

なかなかやるね……

でも……勝つのは僕だよ?」

指に（人差し指）つけてる指輪に炎（死ぬ気の炎）を灯してボック  
スに注入したアラン  
だけど……

「!?

ボックスは開かなかつた

「ククッ

なんで開かない?って顔をしているな

理由は簡単だよ

俺の2つのうちの能力……却下キャンセルの能力だ

絶句しているアランに顔を歪めて笑いながら自身の能力を話し出す

「却下キャンセル……?」

「そうだ

相手の能力を封じる能力だ」

「そう……

でもね?僕は体術にも自身があるよ……!」

アランはそう言いながら瞬歩で一気に近づき殴りかかるが……

バシッ

「…………」

簡単に腕を捕まる

「ツクク

俺の2つ目の能力…………ノイコール平等

相手の力量と同じに成れる能力だ

但し相手なら数人でも良い…………つまり君ら三人+俺が今の俺の力量  
つて訳だ……

ツクク……どうする転生者殺し?』

「…………」

アランは何も言わずにもう一度瞬歩で近づき殴るが今度は逆にカウ  
ンターで攻撃（殴り）られて吹き飛ばされる  
吹き飛ばされたまま木にぶつかって煙がたつ

「へえ……確かに桃地、白、そして僕の力量が入ってるぽいね」

煙が晴れたその場所には口から血を吐き…………先程まで無かったボロ  
ボロの黒い翼と右目が黒く左目が白く成ったアランがいた

「それが……本気モードか?』

「本気…………?』

確かに…………そうかもね!――!――!――!』

先程より更に早く成ったアランは一気に近づきまた殴りかかるが……

「まあでも  
意味ないけどね」

「ツグ……！……！」

またもカウンターで殴られた  
だけど今回はギリギリ耐えてもう一度殴りかかるアラン

「無駄だぜ」

「グハツ！……！」

次は蹴りで蹴り飛ばされるアラン

「ノイコール平等は相手が成長……又は封印された力を解き放した場合その分追加されるんだぜ？」

「アラン（アラン痴）！……！」

「ハアハアハアハアハアハア」

血を出して息を切らしながら立ち上がるアラン  
ボロボロな翼が片翼になり左目が青い目に戻っている

「ん……？」

なんだあ……もう本氣モードは終いか？……まあ良いか……  
もう飽きたし……終わりにするぜ？」

今度は相手が一気にアランに近づき空中に蹴り飛ばす  
空中に浮いたアランと同時に相手もジャンプして更に蹴りを入れて

どんどん上に蹴りを入れ雲の上ぐらい来た所で今までより一番大きく飛んでアランより上に行つて高く上げた足を一気に振り下ろした

「終わりだ！！！！！転生者殺し！！！！！」  
地獄空中蹴り！！！！！」

急速に落ちてる中殆どない思考で状況を読んでるアラン

(負ける……？)  
僕が……？負けるのか……  
そんなのを認めるのか?  
認めて僕の悪等せこぎが間違つていると……  
そんなの認めるわけない！……)

ドンッ

漸く地上に落ちたアラン（煙がたつてゐる）  
それから数秒後相手も地に足を着ける

「「「フ…………」」」

桃地と白は息を呑み

相手を何時もより高い殺氣をだす

「ククツ

漸く倒れた……いや死んだな

ククツおいおいそんなに睨むなよお一人さん  
それにして……やはり転生者殺しは伊達では無いな……1人消え  
ただけで此処まで力が下がるとは……」

おどけたように桃地と田に言つてから関心したよつてアランに言つた

「まあ……

そいつは死んだが「誰が……死んだって?」つな……

煙の中から声が聞こえそちらをみる相手

其処には珍しくボロボロに成つていてバチバチ音が成つているアランがいた

(ば……馬鹿な!!!!

あれでも死なねえのか!!!!

いやそれより俺からあいつ分の力量が“消える”だと……!!

!!)

「吃驚してゐるかい?

君も僕に能力を教えてくれたようだからね……

特別に教えてあげるよ」

煙が完全に晴れて完璧に見えるように成つた

その場に立つてゐる……黄色髪と田をしたアランがいた

「これは

忍術・纏いだよ

「まど……い?」

「雷、水、風、火、土等の性質変化を自身の体内に溜めて爆発させる事によつてそれぞれの性質を体に宿す……因みに僕があんな高いところ落とされてピンピンしてゐる理由は……纏い土を使つたからだよ  
纏い土は防御力を上げてくれるんだよ

つで今使ってるのは纏い雷「

「纏いかなんか知らねーが何故俺の平等<sup>ノーマル</sup>が発動してねえんだ!!!!!!  
いやそもそも何故却下<sup>キャンセル</sup>が発動してねえんだよ!!!!!!」

アランの説明を途中で覆い被さるよつに疑問に思つた事をアランに  
問い合わせる

「……はあ説明は最後まで聞きなよ……  
まあ……その理由は簡単だよ……先ずは平等<sup>ノーマル</sup>が効かない訳は平等<sup>ノーマル</sup>は  
相手の【力量】だけしか無理なんだよ……  
纏いは確かに力などを上げるけど自身の【力量】出はないんだよ  
ついでに言えば僕の分の力量が落ちてるわけは僕が自身の【力量】  
を殆ど封印したからだよ  
それで次の却下【キャンセル】が効かない理由は……君が一番知つ  
てるだろ?」  
「つ…………」

アランの言葉を聞き吃驚する相手

「却下【キャンセル】は相手の能力を発動させるんじゃないよ  
相手の能力が空氣に触れて発動する時にその出来事を【却下】させ  
るんだよ  
だから僕の腑罪証明<sup>アリバイブロック</sup>は消えた後に戻つてきて死ぬ気の炎の時は死ぬ  
氣を灯す事は出来たのに武器をだす事はできなかつた  
纏いは“体内”で発動する力……つまり空氣に触れてない  
だから君の却下【キャンセル】は効かないんだよ」

アランがすべてを言い終わった瞬間ゆっくり相手に近づく

「ねえ

雷の纏いの時の性質は何だと思つ?

一つは速度だよ

だけど雷の纏いの性質には二つの能力があるんだよ  
なら二つ何は……？」

其処まで言つてこきなり消え……

「答へは……鋭さだよ」

相手の背中でそいつた

相手の胸にはぽつくり穴が開きその場所にあるはずの心臓がない  
「余りにも鋭いから……心臓なんかも殺さずに取ることが出来るだ  
よ……」

「た……頼む

殺さないでくれ……わ……悪かつたから……」

アランの右手にある自分の心臓を見てアランに頼みだした

「ん?

良いよ」

「ほ……本当か……！」

(やはり人間だな……

ククツ心臓を奪い返した瞬間殺してやる)

ゆっくり相手に近づいて残り数歩の所で止まるアラン

「な…何してるんだ?

は…早く返してくれ

「おもい」

返さない

アラン体内の電気を心臓を持つてゐる右手に集中させて心臓を潰した  
潰した時に血がアランの顔につく

バタン

相手は悲鳴を上げながら死んだ

「君は……調子に乗りすぎたんだよ」

そう言いながら頬についた血を手で取るアラン

「さすがだな……」

「す：凄い」

その光景を見て改めて関心する桃地と絶句しそうで思考が追いつけず凄いとだけ言つた白がいた

## 任務！！波の国編4（後書き）

はじめてアランが負けかけましたね！！！！！  
いやあ！！！！チートにし過ぎたけど上を考えれば案外いた感じです！！！！

さて今回の残酷な描写は勿論アランが心臓を潰した所等へんですね  
まあ分かった方も居るかと思いますがハ○ターハ○ターの○ルアの  
戦闘を参考に書きました！！！！

さてそれから波の国編に終わりが近づきました！！！！  
最近更新が遅いですけど呆れずに見てやって下さい！！！！  
それからアンケート結果で桃地は男性のままでつて事で！！！！  
アンケートに協力してくれた方ありがとうございます！！！！

## 任務！－波の国編5（前書き）

今回はアランの前世の話です  
別に見なくて大丈夫な気がしますが……多分前世の話は今回だけ  
だと思いますがね

s.i.d.o白

アラン君と謎の人物が戦っていた……  
……正直に言うとアラン君と謎の人物は強かつた……5影レベル  
……いやもしかしたらそれを超えるレベルの戦い  
殺氣だけで大気が揺れる……僕は立つてるのがやっとだった  
そして漸く長いようで長くない戦いが終わった

「す……凄い」

漸く殺氣が無くなり喋られるように成った僕は……それ以外の言葉  
が出なかつた  
まるで時がとまつたかのようにただただ呆然とするだけ……でも時は  
動き出す

バタツという音と共に……

s.i.d.o桃地

時がとまつたかのようにだつた……今まで俺は彼奴を目標に頑張つ  
た……殺して殺してまた殺して……その途中で首切り包丁を手に入  
れた……そして俺は彼奴<sup>アラン</sup>と同等……いやそれ以上に成れたと思つて  
いた……そうだ思つていたんだ……だけど現実は違つた……彼奴は  
昔よりも遙かに強かつた

ショックはあつた妬みもあつた……だけど同時に嬉しかつた……憧  
れた奴は……今も昔も変わりなく強かつた事が……  
俺達は彼奴の戦いをみてまるで時がとまつたかのようになつた……け  
ど時は動き出した……彼奴<sup>アラン</sup>が倒れたと同時に……

s.i.d.oアラン

此処は……何処だ

アランは様々な色になる空間にいた

僕は……何をしていただ?

久しぶりに桃地と白に出会つて……雇つて……そして……転生者と  
……戦つた

転生者は正直に言つと今までの敵で一番強かつたし……久しぶりに  
死を覚悟された……でも僕は勝つた……じゃあ此処は……何処だ??  
僕は死んだわけではない……様々な色の空間が突然グーザリと歪  
み新たな空間……いや道場になつていた

「　　！」

そんなんじゃ駄目よ…………

「は……はい」

道場には長い黒い髪をしている女人の人と短い髪をした少年がいた  
アランは少年を見て絶句した

ぼ……く?

そう短い髪をしている少年は……前世のアランだった

そして空間はまたグーザリと歪んだ場所は先程と一緒に長い髪の少女がいた

!!!!

紅夜【くよ】……

「紅夜!!!!」

あなたは天才だわ!!!!」

長い髪の女（アランと紅夜の母親）は紅夜に近づきやがていつまつ昔のアラン……夜半音はその場面を見て悔しそうに……それでも嬉しそうに見ていた……

またまた空間が歪み新しい場面になる

そこには高校生ぐらいに成った夜半音と紅夜と男がいた  
ただ夜半音は倒れていた

男と紅夜は暫く話して男が道場を出た瞬間夜半音は何事も無く立つ

「あれで紅夜は彼奴とつき合えるのか？」

「うん!!!!」

これで　君とつき合える!!!!お母様が約束してくださったもの  
!!!!」

少女は嬉しそうに夜半音にそう言つた

夜半音はそれを聞いてどこか無理しながら少し笑つて道場から出て行つた

道場には歪んだ笑みをした紅夜がいた

またまた空間がグーキーと歪み次に出てきたのは夜半音と夜半音の母親と紅夜がいた

母親は夜半音に刀を向けていた

「な……何故……ですか

母様……？」

「なぜ？

それはあなたが一番分かってるでしょ  
才能の無いあなたに最後のチャンスとして　　と戦わしたのに負け  
るなんて……だからあなたを私の手によつて殺します」

「……紅夜の彼氏を利用したのですか？」

「？」

何を言つてるんですか？

が紅夜の彼氏に成れるわけありませんよ  
紅夜も好きではありませんしね

夜半音はそれを聞いてゆつくり紅夜をみた  
紅夜は歪んだ笑みを浮かべて頷いた

「そう……ですか  
母様……あなたが私程度に手を汚す必要はありませんよ  
私の命は私が……」

「……そづですか」

それを聞いた母親は刀をゆつくり鞘に直して夜半音に渡す  
それをみた紅夜の顔が歪む  
何故なら紅夜は知っていたのだ  
夜半音の実力を……だから刀を渡した瞬間私を襲うと思つて身構えた

その予感は当たり夜半音は刀を持つた瞬間信じられないスピードで母親を気絶させて紅夜に近づいた。そして……斬った自分の腹を……それを絶句した顔で見た紅夜

「ゴホッ……ハアハア……分かつてたよ

紅夜……君は嘘をつくとき必ず右手で左手をさする癖があるからな

……「

笑いながら紅夜に言つ夜半音

「な……なら……なぜ」

「ふふ……

妹の頼みを……初めての頼みを断る兄がビート居るか……少なくとも俺には無理だった」

「……馬鹿……ですね」

「分かつてる……

俺は……兄馬鹿だ……」

「う……めんなさい」

紅夜は泣きながら夜半音に言つた

「駄目だ

許さない

「つ……」

夜半音は笑顔からいきなり真顔で言った  
それを聞いた紅夜は悲しそうな顔した  
そんな彼女を見て再び笑いながら口を開く夜半音

「だから……お詫びとして生きる」

「……つえ？」

夜半音の言葉を聞いて絶句した紅夜  
夜半音はゆっくり手をあげて頭を撫でた

「生きて生きて……好きな奴をみつけるなり  
好きな事をみつけるなりしろ

世の中は辛い事が沢山ある

嬉しい事なんてほんの少ししかない……死んだ方がましだと思つ時  
がある……でも……な

辛い事が後に成つて笑える……あああんな事もあつたなあ……つて  
だから……そう言えるように生きる……

それが……兄馬鹿の妹に願う馬鹿な願い事だ

「う……うん

約束……するよ

絶対……その馬鹿な夢……叶える

「……ありがと」

夜半音は笑いながら目を閉じた

それと同時に空間が歪み始めの様々な色がある空間にいた

「……そう

あれが僕が死んだ理由……ふふ

まさか僕が兄馬鹿だつたなんてね  
紅夜……僕も馬鹿な夢を叶えるよ」

「……………」

空間がピシリッと割れた  
割れ目から光がさす

「……………ふう

目覚の時かな?

さて……頑張つて行こうかな

そひ……笑いながら言ひアラン

## 任務!! 波の国編5（後書き）

さあて……波の国編つて書いてるのに全く波の国編が進んでない……なんて感想はいりませんから 私自身が一番分かつてますからね

まあそれはそうとして……優氣凜々さんの作品授天力の戦士が世界を廻る・作るぜ……最強の”絆”……にアラン君が出演しました!!!!

皆様も見てみては……？（まあ……ヴィータ好きは止めた方が良いかも知れませんが……）

朧さんの作品遊戯王 Satisfaction ask for エネル もかなり面白いです

まあ全部面白いんですがね

まああとはレイもヒロインに加われば……つと話がずれましたな

ではまた次回お会いしましょうー！！！

波の国編6（前書き）

「はい

久しぶりに前書きで話しました  
今回もアラン君は居ないけど変わりにアテムさんが来たよ」

「久しぶりね

みんな

「畠ちゃん覚えてこますか？

天照のアテムさんですよ  
さて早速なんですがアテムちゃん

優氣凛々様の作品コウタ君から伝言があります

「コウタ？

ああ……ヒリリイを落としたあの可愛い坊や  
なんて言つてたの？」

「えつと

『いつもありがとう…！』

なんかあんちくしょーはず『ブチンだけど色々頑張れ…！…』つと

「…………確かに彼はにぶちんだナビ…………べ…別に私は好きじゃないわ  
よ…

気になるだけよ／＼／＼／＼

「本当！」

「本当よ／＼／＼／＼

「本当に本当に？」

「本当に本当に……」

「ならアランの『好きだよ』つと囁いてるトープはいらぬか……」

「…………！」

「ほ…欲しい…………」

「あれ？　

好きじゃないんじゃないの？」

「つ…つ…」「う～～～～～～～～／＼／＼

好きよ…………」

「つ…え…………？」

「なんて？？」

「好きよ大好き／＼／＼」

「そう初めから素直に成つてたら良いんだよ  
はいテー／＼」

カチッ

『好きだよ』

「アラン…………／＼／＼  
つん…………」

「さて……と

アテムがテープを何度も再生して【18禁】なことをしだしたので  
前書きはこの辺で……では楽しんできて下さい」

## 波の国編6

s.i.d.oアラン（分身体）

あれからサスケとナルトにアドバイスをしていたらいつの間にか夜に成っていた……一人共木の天辺まで登れた……つえ？クウロは？知らないよ興味ないしね

まあ二人共ボロボロに成ってたから背負つてあげてどうにか帰ってきた

クウロは……まあ自力で帰つたらしいｂｙ作者

ん…？

今声がしたような…………？

氣のせいかな？？？

え？今何してるか？」飯食べてるよ

……ねえクウロ？

食べるのは良いけど……吐くのは辞めてくれない？  
食べる気が無くなるから

ほらサクラも引いてるよ？

それに食べながら僕を睨むのも止めてよね  
やらないからね？

つとほのぼの？としてるとあのじいさんの孫娘の……たしかフシミ  
が立ち上がり……

「どうしてそこまで頑張るんだよ！……！

どんなに努力しても結局ガトーに殺されるんだよ！？

なのに……なんでそんなに頑張れるんだよ…………

「「五月蠅いよ(ヒバネ)……」

君みたいな泣き虫は隅っこで泣いてなよ」

「つちよ……2人共言い過ぎた……」

ナルトとサスケは黙つたまま外に行つた

クウロは……吐きすぎてダウン

サクラはオロオロ

……本当使えないね

フシミはベランダ?で落ち込んでいる  
カカシはフシミに近づいてとしたりけど……アランが右手でカカシを  
止めた

「……」は僕任せでよ

ツフと笑いながら言つアランに赤面して止まつてしまつカカシ  
そんな事も知らずにフシミに近づいて隣に座るアラン

「……分からないよ

なんで……無駄な努力なんか……」

「フシミには2人の努力が無駄に見えるかい?」

アランはフシミの疑問に質問で返した

フシミはアランの質問に対しても無言……そんな状態にアランは一息

ため息を吐き……

「少し……話を聞いてくれる?」

「…………」

アランがそう言つとコクンと頷くフシミ

「今から話すのはある少女2人の話……  
まずは1人目……金髪少女の話だよ  
彼女は生まれた頃から……1人だった」

「…………」

アランの言葉に目を見開くフシミ

「周りからは何故か化け物と呼ばれ……嫌われていた  
でも……彼女は諦めなかつた……  
皆に認めて貰おうと……彼女は今でも頑張つてゐる」

「…………」

「次は黒髪の少女の話……」

アランの話を黙つて聞くフシミ……アランは淡々と話を続ける

「彼女は1人ではなかつた……途中までは」

「?」

アランの話に首を傾げる

「殺されたんだよ」

それを聞いて青ざめる

「彼女は復讐を誓った……父を……母をころした奴を殺す……と  
でもある少年が言つた事によつて……復讐を諦めた……その代わり  
新たな夢を見つけてそれを叶えるために今も努力をしている」

アランの話は終わったようで一息つき……

「僕は……そんな彼女達の……いや……努力をしてる人に……“無  
駄”な努力なんて無いと思うよ……君には無かつたかい?」

「…………」

「フフフ……」

まあ……無いなら良いけどね……  
でも……もしあつたなら……もう一度努力をしたら?  
一度の失敗で諦めないで……ね」

フシミの頭を一度撫でて家中にはいった

s.i.d.oアラン（本体）

「……つん?  
ふあ……」

目を覚ました場所は小屋みたいな場所だった

「アラン君！！！！！」

なんだい？

「良かつた……良かつた……」

「めんね

- 11 -

數分後

「白  
？」

「なんですか？」

「何時まで抱きついてる気だい？」

「つえ？ あつ…………」『めんなさい！――！』

アランに言われ自分が抱きついている事に気づいて一気に離れる白

「君も女の子なんだから抱きつるのは好きな人にしなよ？僕だから

良かつたけど違つたら勘違こあるよ?」

「アラン君なら勘違いしてもいいの?」

「なにか言ったかい?」

「う…ううん

なにも言つてないよ……!」

「?

そう……なら良いけど

アランは見事な鈍感つぶりを發揮していた

「……やつらの場所は相変わらずだな……」

「?

何がだい?桃地

「「はあ」

桃地と白は同時にため息を吐いた

「訳の分からない2人だね……

まあそんな事より速く移動しようつか

僕もそろそろ戻りたい(影分身と変わりたい)しね

「ああ

「そうだな」

桃地と白はアランの肩に手を載せた

「アバパイロット  
脇罪証明発動」

「ハントアランと白と桃地は消えた

数分後……

わわ……と

桃地と白を僕の家の近くに買つた家に連れて行つて影分身と変わつた所何だけど……色々とあつたみたいだね……それにしても……吐きすぎてダウンつて……本当に使えないねクウロは……まあ……居たからつて何が出来た?つて話なんだけどね……さてとまあ……今から何をしようつかな?

『アラン様』

ん?この声はたしか……

「ルシファーか?」

『はい

そうですか』

「?

何処にいるんだ?』

周りを見て言つアラン

『これは念話と言つもので天使や悪魔や神などが使う魔法?みたい

なものです』

「僕も出来るのかい?」

『はい

心の中で思つた事に神力……アラン様ならチャクラでしょつか?を集中させてみてください』

『こんな感じか?』

『はい!…

完璧です!……ですがアラン様!……!

『其処まで褒めなくとも良いよ  
それで……何かあったのかい?』

『つえ?

あっ!……!……そうでした!……!

今アラン様に会いたいって方が居るんですけど……

『僕にかい?』

『はい

『まあ……別に構わないけど……

どうせつて其方に行つたら良いんだい?』

『寝てるときに前回行つたアラン様の空間を思い描いてくれば

此方にこれます

『それだけで良いのかい?』

『はい』

『なら今からそいつに行くよ』

『はい! ! !

楽しみに待つてます! ! ! ! ! ..』

ルシファーとの念話が終わり自分の（借りてる）布団に入り目を瞑つて自分の空間……灰色の空間を思い描いた瞬間眠気がきて一気に寝た……

## 波の国編6（後書き）

……中途半端だな

そして久しぶりに登場のルシファー

それと新しいキャラの予感……アランに会いたいと言つてゐる人物は誰なのか……

それから今日からキャラ人気を集めたいと思います

見事第一位に選ばれたキャラの話を載せたいと思つのでデシドシ応募下さい

アランが一位の場合は一位との話を書きます

1人3票までいきます

あとついでにアランが使うオリジナル忍術、異常、荷負担、スキルも募集します

あと最後にイナリ君のアンケートにお答え七夜士郎様パンチ様ありがとうございました

パンチ様が考えて下さった名前もありがたく使わせていただきます  
ではまた次回お会いしましょう――――――

## アラン&コウタ まさかの「ラボ！－！－！」（前書き）

「はーい

今日は優氣凜々様の作品授天力の戦士が世界を廻る・作るぜ－！－最強の”絆”！－から御神コウタ君が来てくれました」

「よう

アラン久しぶりとして魁斗はじめましてだな  
今回はこの作品の読者を頂にきたぞ」

「つえ……？」

「まなんか幻聴が……」

「コウタ無駄だよ

この作品そんなに人気無いから  
そんなのするなら他の人気がある作品に言つた方が良いよ

「……冗談で言つたんだが……それにアランお前辛口だな……」

「本当の事だよ」

「もう……やだこの子……」

「大変だな魁斗も……」

「じゃあ

「読者の君達楽しんできてよ」

## アラン&ユウタ まさかの「リボー！――！」

ある草原にアランは立っていた

「もつそろそろかな？」

そう言つた瞬間空間がパックリ開いて一人の美少じ……「ホン……」ではなく美少年が居た

「久しぶりだね  
ユウタ」

アラン振り向きながら美少年の……ユウタに言つた

因みにユウタってのは優氣凜々さんの作品の主人公だよ

「ああ  
久しぶりだなアラン  
それで？今回はどうでよんだんだ？」

「まあ何時もなら僕の暇つぶしに戦つてって言つんだけどね……今回は転生者潰しを手伝つて貰おうと思つてね」

「……お前でも勝てない相手なのか？」

「そんな訳ないよ

ユウタはアランが手伝いを頼んできたのに驚いたがもしかしたらアランでも勝てない相手なのか？つと思ひアランに聞いた

「僕一応最高神だよ？」

曲がりなりにもね  
……

そんな僕が負けるのは余程の事が無いと無いよ

「余程の事があつたら負けるんだ」

「当たり前だよ

「僕も生き物だからね  
因みに僕に勝ちたかつたらゼウスとアテムをつれできたら本気の七  
割は出せるんじゃない?」

「…………それほど最強じゃねえか」「

アランの言葉に呆れながら言つコウタ

「まあ幻想殺しみたいな能力があればなかなか苦戦はするよ  
まあ……身体能力も異常なんだけどね」

「……もう悪いから俺をよんだ理由を教えてくれ」

「ん？」

ああそんな話をしていたね」

「忘れてるんじゃねえア……」

アランの言葉にツツコムコウタ……あれ? こんなんダグダで良いのかな? コウタのキャラってこんなんで良いのかな? つと不安がる

「良いんだよ

君の力量ではこんなもんだよ

「地の字に言つなよ！！！！

つて！……また話が逸れた…………」

「まあ

無駄な話は此処までにして…………」

「……自覚があつたんだな」

もう疲れたような顔をするコウタ

「コウタをよんだのは……まあコウタの修行に役立て貰おうと思つただけだよ」

「……つえ？」

「コウタもこれから転生者と……まあ今も肩と戦つてるナビ……それ以外の転生者とも戦うかも知れないわけでしょ？なら転生者との戦いに馴れて貰おうと思つていてね……ひょいぢ異世界に10万1人ぐらいの転生者が居るらしいんだよ」

最後まで聞いたコウタの顔がピシャリと止まつた

「…………なあ

アラン

「？」

「？」

「あすきだろ……」

「大杉？だれだい？」

「大杉じゃなねえよ……多すぎの方だ……じゃなくて……途中までは良い……いやマジで涙が出そうだつたよ？でもさあ……10万人つて多すぎじゃないかなあ？」

「違うよコウタ

「10万1人だよ」

ユウタは口調を優しい？方に変えてアランに言った  
アランはアランでコウタの間違いを言った

「そこは良いだろ……！」

10万人つて言つのと10万1人つて言つのどどう違うんだよ……！……！」

「1が増えてるよ

「良いんだよ……！」

「この場合は良いんだよ……！」

なんかまた話が逸れそうなので……作者の特権のキングクリムゾン

発動！……！」

「まあ

理由はさつき言つた通り君に転生者との戦いに馴れて貰うためだよ  
毎度毎度負けて貰つては困るし僕も暇じゃないから何時でも行ける  
訳じやないからね

「……何気に酷い」と言つてねえか?

三  
てが俺負けてねえ

「……負けてたよ」

コウタの言葉に呆れた田をしげと書うアラン

「負けてない」と認めない限りは負けてねえんだよ！――――――  
それに次は勝からいいんだよ――――――！」

「……いまの言葉（次はつて所）負けたつて認めてるよ。」

「いいから…！…！…！」

速く行くぞ！！！！！」

- はあ  
...  
全く

でも、速く行くと言ふ部分には賛成だよ

無駄は時間使つたがりね……いや、古の外僕の肩を抱いて

卷之三

アランはため息を吐きながらも速く転生者狩りに行こうと言つ案？に賛成してコウタに肩を掴むように言った

**「脇罪証明発動……行き先は……リリカルなのは世界！－！－！」**

# いまなん

デジタル！！！

「う…………！」

おい！――アラン人の…………」

ユウタは人の話を聞けっと文句を言おつとしてアランを見たがアランを見た瞬間啞然とした

何故か？それは…………

「何故小さく成ってるんだアラン！――！」

ユウタより少し低いぐらじまで縮んでるアラン

……説明中

「つまりアランが使用したアリバイブロック脇罪証明で一人同時に異世界に跳んだ為アランが縮んだって事か？」

「まあ

簡単に言えばそうだね」

「でも……アランってこうして見れば女が「なんか言ったかい？」  
いえ……なにも」

いつの間にか持つてたトンファーをユウタの首に当てて殺氣をだし  
ながらいっただアラン

そんなアランに冷や汗を流しながら答えるユウタ

それを聞いてトンファーを首から外してまるで何も無かつたかのようにトンファーがどこかに言った

トンファーが出たり消えたりした理由は奇術師【マジシャン】と暗器術師【ブラックマスター】の能力のおかげです詳しく述べたけカカシVS青葉アランを見て下さい

「つと……

そうだつた……さつき移動した時にリリカル“なのは”世界つて言つてたよな？  
もしかして……」

「違うよ

君が居たリリカル世界ではなく……全く違う第一のリリカルなのは世界つて言えばいいかな？  
だから君がいる世界とは違うよ」

「……そつか」

「つと……漸く見つけたよ」

アランがユウタの疑問に答えていると突然何かを見つけたつと言い出すアラン

「何を見つけたんだ？」

訳のわからないユウタはアランに聞いた  
アランは呆れたような目をユウタに向かた

「僕達は転生者狩りに来たんだよ？」

見つけたつて言つたら転生者が集まつてる場所に決まつてるでしょ

「？」

なぜ転生者が集まってるんだ？？」

「ああ

まだ言つてなかつたね今回転生者達が集まつた軍団……たしか……スクール……そんな名前だつたね

目的は肩（咲哉）と似ていて可愛い女の子を奴隸にするだつたよ

「……なに？」

それを速く言えよ！！！速く行かねえともう捕まつてる子が「安心しなよスクールが活動したのは三時間前……つまりまだ本格的な活動はまだなんだよ」そ……そつかなら安心だな

「まあ……何時活動するか分からぬから速めに言つた方が良いのは確かだからね  
また移動するから肩を掴んでくれるかな？」

「ああ

ユウタがアランの肩に触れた瞬間また2人は消えた

「あともづりひとつだ……あともづりひとつでなのはたちを……

「」「」「グヘヘヘヘ」「」「」

ある場所にイケメンなのに近寄りたくない雰囲気を出してる男達がいた

その場に突然美少女……美少年の2人が現れた

すいませんマジすいません謝るから命だけは……

「「……特別だよ（だぞ）」」

さて……まあメタな事は置いといて……突然現れた2人に吃驚して  
いた男達だが1人が口を開いた

「ん？」

なんだ？君たち？俺達に犯されに来たのか？？」「

「「「「マジかい？！こんな美少女なら大歓迎だ！！！！！」」」

1人の男の言葉を聞いて周りの男達が盛り上がった

「よかつたねユウタ  
モテモテだよ」

「何言つてんだよ  
アランお前がだろ」

「ユウタは女顔なんだからユウタに決まってるよ

「今のお前も女顔だろ…………」

「「かみ殺す（灰にしてやる）…………」」

いきなり口論を始めたと思つたらさつき出して（アランはユウタに  
ユウタはアランに）戦おうとした瞬間また男が出てきて

「まあ

「2人共落ち着け」

「 「…………」「」

「2人を宥めようとするが2人共その男を見ていない  
見ていないにも関わらず話を進める男

「2人共可愛いからちゃんと2人共犯してあげるから……喧嘩はし  
たら駄目だぞ」

「そうだぜ

「俺達はお前等2人を可愛いがってやるから」

他の男達も色々言つていたらアランとコウタ下を俯き話をす

「ねえ……コウタ」

「なんだアラン」

「君をかみ殺すのは後にするよ」

「奇遇だな……俺もお前を灰にするのは後にするぜ」

バツと顔を上げて……

「先ずは君達（お前等）をかみ殺して（灰にして）あげるよ（して  
やる）！……！」

男達にさつきを出した

そしてアランは異常の奇術師と暗器術師を発動してトンファーを取

り出しユウタ……

「サンライト

set up!-----!

「yes my master!----!  
version “K” set up!----!..」

ユウタの手に刀が握られた

「疾風迅雷!----!----!

ユウタは田にも止まらない速さで転生者達を狩る

「へえ……やるねユウタ」

「つくそ!----!

そっちの化け物じゃなくこっちの奴を先にや

「君……遅いよ」

アランはいつの間にか変わった黒い刀で転生者を狩る

「アラン!----!

お前に俺の新しい力を見せてやる!----!----!

「へえ……

それは楽しみだね」

戦いながら話をする2人

そして突然止まつたユウタ

「身体能力強化 “王臨” ! ! ! ! .  
れんおうがいじゅう  
鍊王凱哮 ! ! ! ! !」

ユウタの髪の毛が漆黒に染まつた瞬間今までより更に速く更に強力な攻撃をしだした

「へえ……身体強化……これは僕も負けてられないね……」

「スキだらけだ ! ! ! ! .」

「 「 「 「 「つおおおお ! ! ! ! .」 「 「 「

「僕も少し本氣を出そつか……我が名は阿濡美須王汰那斗簾神……  
我が力の一部を見るがいい」

何時もの黒い翼は出てないが黒い目と白い目  
そしてユウタと似ている黒い髪になつた  
違うとしたらユウタの髪は闇を連想させる  
アランの髪は“死”的闇を連想させる色だ  
そしてアランの周りを囲んでいた男達が倒れたと同時にアランも動  
いた

数分後……その場にはアランとユウタがいた  
ユウタの髪がゆっくりと元の色に戻りアランの目と髪も元に戻った  
戻つたと同時にユウタが大の字でその場に倒れた

「どうだい？」

初めての転生者狩り

「疲れた……つてかお前はなぜ倒れない？また大嘘つき（オールフイクション）か？」

ユウタがアランが倒れない理由は大嘘つき（オールフイクション）のおかげかを聞いた

「違うよ

今日は使つてないよ

「ならなぜ倒れないんだ？」

「馴れだよ」

「馴れ？」

「一応これ位の数を倒すのは結構してたからね  
これぐらい戦つたぐらいじゃ疲れないよ」

「はあ……お前に何時になつたら勝てるやう……お前からも神の力を授かつたら少しは近づくか？」

ユウタがアランの強さに吃驚しながらもアランから神としての力を貰つたらどうなるかを聞いた

「やめた方が良いよ」

「？」

「なんで？」

「僕はなんの神か知ってるかい？」

「死の神だつたよな？」

「その通りだよ

神つてのは1人ではなく沢山いる  
癒やしの神つて言つてもエリリイ以外にもいる……まあエリリイが  
癒やしの神の中では上位だけね」

「へえ」

アランの話に真剣に聞くユウタ

「でもね

死の神は数が少なく殆どが下級神レベルなんだよ」

「なぜだ？」

「死の神が上に行くためには、様々な死を経験し体現しそして理解  
しないといけない」

「……

……じゃあアランは

「僕は裏技を使つたんだよ」

「裏技？」

「未来、過去、現在の神界、地獄、魔界、天空、下界の全てのしを  
体現できる生き地獄と呼ばれる扉の中に1000000万年間耐えた

……だから僕は死を経験し体現しそして理解した

「…………」

アランの話に睡然とするコウタ

「だから

僕が君に力を渡すと君の体と心が“死”ぬ  
だから無理なんだよ」

「…………アランの話が終わった

「セヒ…………

“死”や“死ぬ”のようだね

アランはコウタの方を見ながら言った  
コウタも自身の体を見るどんどん薄く成つてるのがわかる

「な……なんだ  
これは…………」

「安心しなよ

簡単に君の世界に帰るだけだよ」

「そう……か」

「なに寂しそうな顔をしてるんだい？」

「…………してねえよ」

「ふふ……まあどうちでも良いんだけどね……

またね……」「

「………」

「あ…………」

この瞬間ユウタは消えた……

s.u.o.yuuta

全く……あいつときたら……

「ユウタあ  
おかえりなさいですう」

ユウタが声をした方をみるとヒリリイがいた  
ユウタは少し微笑んだ

「ああ……ただいま  
エリリイ」

また会おうな…… 親友

アラン&ユウタ まさかの「リボー!!」（後書き）

「はあ……もうお別れ……か」

「寂しくなるな……って言つ場面なんだらうけど……僕ことひては慰めてくれる人が居なくなる……って言つた方が良いだろ?な……」

…

「まあ……なんだ

頑張れ……」

「ありがとうユウタ君……」

「ユウタ  
はいこれ」

「?」

なんだこれ?」

「軽く作つたケーキだよ」

「軽くじゃないよな!…

なんだよこの大きさ!…!

軽くでこんなのがくれねえよ!…!…!」

「ああ……アラン君家事とかも完璧だからそれぐらいのケーキなら軽く作るよ……しかも軽くプロを越えてるし」

「……完璧人間つて訳か」

「まあ

ユウタ君また来てよ」つでも歓迎する

「暇になつたらまたそつちに行へよ」

「ああ

ありがとうな魁斗

そして待つてゐるぞ親友!――!――!

そう言つて消えたユウタ

「はあ……寂しくなるな」

「せうだね

だけど何時までも悲しんでは入れないよ」

「うう

分かつてゐよ……

ではまた次回お会こしましょ!――!――!

「またね」

誤字があつましたので修正をせて貰いました

## 波の国編7（前書き）

今回のお話では物語は進みません  
つえ？何時に成つたら進むんだつだつて？  
僕が一番知りたいです…

## 波の国編7

s.i.d.oアラン

さて……どうやら僕の空間（これからは死空【じくつ】と書きます）にきたようだね……

「ルシファー？」

「居るかい？？」

「アラン様！――！」

アランが大声？をあげた瞬間パックリと空間は開き其処から黒い翼を持つ少女……ルシファーが現れた

「やあ

久しぶりだね

元気にしてたかい？」

「はい！！！」

アラン様も元気にしてましたか？」

「うん？僕かい？」

僕は……まあまあな？

まあそんな事より確か……僕に会いたい奴が居るんだよね？」

「あつ……そうでした

アランの言葉に思い出したと言つ顔をするルシファー

アランはため息をだして「忘れちゃ駄目だよ」つと呟いた

「すいません……」

「ふう……まあ今度から気をつけよね」

アランは少し微笑みながらルシファーを頭を撫でて言った

「は…はい／＼／＼／＼

（やつぱつ…

アラン様格好いいです！…！…神の中でもＺ〇・イです！…！…／＼／＼／＼

「ん…？  
顔赤いけど大丈夫かい？」

アランはルシファーの顔に自分の顔を近づけて言った（あと少し前  
屈みに成つたらキスしてしまうぐらい近い）

「／＼／＼／＼

だ…だいひょうびゅでえしゅ／＼／＼／＼

アランの顔が近くにあるためさりに顔を赤らめて「大丈夫です」つ  
と呟つるシファー

まあ…全く言えてないけど…

「ふふ…露みすぎだよ」

「／＼／＼／＼（パシュー）

更にたたみかけるように微笑むアラン  
それにノックアウトして頭から煙が出るルシファー

「ねえ？

……駄目だね完璧に返事がない……はあしうがないね……ルシファーが意識を取り戻すのを待つとするかな……でもなんで意識がとんだんだろ？」

何処までも鈍感な主人公アランだった

「つは――――！」

「漸く意識を戻したね」

数分後に漸く意識を取り戻したルシファーは周りを見てアランが居ることを確認した瞬間に何があつたかを思い出して慌てて頭を下げて……

「（＼）……ごめんなさい……！」

せっかくアラン様がきてくださつたの……ふえ？

涙が出そうになる程誤っていた途中に頭に何かが乗つた感触がして頭をみるとアランの手があつた

「良いよ

可愛い使い魔？の失敗にいちいち怒らないから……まああまりにも酷かつたら怒るけどね」

アランそう微笑みながら言つ

「あ…アラハ世界の…」

「それで……つあ」はあ……また後で撫でてあげるからそんな悲しそうな顔をしないで「は……はい……／＼／＼」さて……話を戻すけど……僕に会いたいって言つてる人？はどこに居るんだい？」

アランが話を戻すためにルシファーの頭から手をどけた瞬間に寂しそうな声と共に悲しそうな顔をしたルシファーを見てため息を吐きながらまた後でと言いそれを聞き恥ずかしく小さな声で答えるルシ

そして漸く話を戻したアラン

「えっと……魔界です」

「魔界？」

魔界とは妖怪や怪物などが居る場所だと思つてください

「はい！！！」

「それで？魔界にはどうやって行けば良いんだい？」

「アラン様は最高神なので頭の中で魔界に『行きたい』と思って転移を使えば行けます！！！！！」

魔界や天界などは基本その界に住むもの以外はいけない  
だから天使は魔界には行けず妖怪などは天界にはいけません

それと同じで神も魔界や天界にはいけません

但し例外に大天使、魔王は1日数時間行ける

神の場合は悪神、善神以上は行き来できて最高神は何時間、何日でもいれる

ちなみに魔王、大天使でも神界には滅多にはいけない（最高神1人の許可または善神、悪神以上の神の許可が5個いる）

「じゃあ

行こうか？ルシファー」

「はい！――！」

数分後……

（魔界）

ここが……魔界

つん……普通だね

魔界……つと言つたら黒いとか赤いとかなんか下が馬で上が人とか

巨大な男がいるとか考えた人！！！！

甘い……甘いよ……砂糖に湯をいれた中に更に砂糖を入れるぐらい  
甘いよ

此処での魔界至つて普通なんだ！！！！

まあ……武器とか売つてるが……それ以外は至つて普通なんだよ

「……まあ別にどうでも良いんだけどね……」

「？」

どうしました？アラン様

「ん？」

……いや何でもないよ

それで？会いたい人？はじいに面会するんだい？」

「もうちょっとした所にあるお城にあります」

「そう

なら速く行こうか」

「……………かい？」

でつかいお城の前にアランは止ま居る

「はい」

「じゃあ早速入るか」

「つあ……

待つて下さ……」

先々行くアランを追いかけるルシファー  
そしてでつかい扉の前で止まるアラン

「ルシファー

如何にもここに入れつてみたいな雰囲気なんだけど……もしかして

？」

「はい

この扉の奥に今回会いたいと言つた方がいます」

「なら入るしか無いね」

アランはでっかい扉を片手で開けて中に入る  
中には片手で開けたアランを見て絶句してゐる幼女がいた

「だ……誰が幼女じゃ……！」

「？」

いきなり何を言つてゐるんだい？君

「む？」

済まぬ何かいま聞こえた気がしたんじゃよ

幼女……ではなく少女はアランに向き直り謝つた

「別に構わないよ

それより君が僕と会いたいって言つた人？なのかな？」

「うむ

人ではないが……会いたいって言つたのは私じゃな

「へえ……それでなんのようだい？」

「私は……お主のファンなのじゃ！……！」

シリアルっぽい空氣が一瞬で崩れた瞬間だった

「僕の……ファン？」

「僕アイドルとかじゃないよ？」

「魔界、天界じゃあの

神はアイドル？みたいなものなんじゃ  
だいたいの神は姿はよからう

そうなるのじや

最近出できた……コウタ？つて奴とお主は大人氣じゃよ  
まあ私は……ではなく魔界ではお主がダントツ一位じゃがのう」

天界ではコウタとアランビちらもつて奴が多いとか……

「……知りたくない事を知つた気分だよ  
それで？ファンなのは分かつたけど……それだけじゃないよね？」

「つむ

当たり前じやよ

最近コウタつて奴のファン？。·1の癒やしの大娘が騎士団つと  
言つものを神界で作つたらしいのじや  
じやからのう……アランにも作つて貰いたいんじや」

何故だらうね……癒やしの大娘……心あたりが凄くあるよ  
まあ……そんな事より……コウタが軍団？を作つたとはね……知ら  
なかつたよ

「でも作つて何か良いことでもあるのかい？」

「アランの……守りたいと言つ信念に憧れて入つてくるものがある  
だからお主の信念をそやつ達に教え……そしてお主にはお主の信念  
の為にそやつ達は動く

「……………えりげや？ 作ってくれぬか？」

「信念……ね

「良いよ

「作ってあげる」

「…………

本当かの…………」

「うん

僕はこんな時に嘘は言わないよ」

「それじゃあ

早速なんじやが……団の名前を決めて欲しいこのじや

「？ 騎士団とかで良いじゃないの？」

「駄目じや

それはユウタが作った団と重なるからの」「

「…………そんなものなんだね」

アランはため息を吐き違つ団の名前を考える

「…………ならプロトシジンレフタ // コー…………ならビリだこー？」

「…………プロトシジンレフタ // コー…………なぜかの名前こー」

「考えてたら浮かんだんだよ」

「……せつか……ならプロトシジンレーフードマリーで決定じゃ……！  
早速知り合いの神や大天使や天照、ゼウスに話して貰ひのじや……！」

「――」

「ねえ

ちょっと待つて

「な……なんじや？」

私は今から速く聞いてなかつたからね

「まだ君の名前聞いてなかつたからね……」

僕は青葉アラン……君の名前は？

「私の名前は……

ベルゼ……この名前よつベルゼブブと書つた方が分かるかの？」

「へえ

君が魔王なんだよ……

まあそんな事よつ……これからよつじへねベルゼ

アランは微笑みながらベルゼに書つた

「――」

「――」

そ……それじゃあ私は伝えに行くから帰つても良い――

「さう

なら帰らせて貰つよ

そう言つてアランは魔王城?から出て行つた

天照とゼウスも惚れてるようじやしな……まあ例え最高神じやとしても負けぬがのう

オマケ

# 「私最後らへん空氣」

「ルツシーはまだマシじゃない  
私なんてアラン様に会つてないだから

「そう言えば……ラファエルは何してたの？」

「天界で天使としての仕事をしなきゃ駄目って言つたじやないのーー！  
忘れるなんて酷いよルツ シー」

# 忘れられた天使2人だつた

「 酷い言い方だね（だな）！」

因みにルシファーとラファエルがアランの事を主ではなくアラン  
と呼ぶように成った理由はアランと呼びたいが呼び捨ては駄目

.... もんもちやんもくくんも勿論駄目.... なら様で.... みたいな感じ  
でそうなつたらしい  
因みにアランはちやんは無理だがそれ以外はどれでも良いらしい

波の国編7（後書き）

プロテッジュレフアミニー……考へてた案だつたんですがどいで出  
そうち迷つてた時に優氣凜々様が似てるような感じのを出して  
いたので乗つかる感じでいきました  
優氣凜々様……すいませんでした……！……！

## 波の国編8（前書き）

「五刃蠍によ……」

「最近アランが冷たい……」

?

**最近じゃなくて最初からだよ？**

「五月蠅い作者はほつとして良いからね  
楽しんで来てよ」

一九五九年二月

「……まだ話は終わって、かみ殺すよ…………？」すいませんでした！――！――！

## 波の国編⑧

わい……田が覚めたのは良いんだけど……なにあれ? フシ//とフシ  
ミの母親……それと謎の男、……  
しかもフシ//の母親は縛られてるし……何が何やら分からぬけど  
取りあえずあの男達をかみ殺せば良いのかな?

アランが飛び出でたとしたとき……

「か……幽世を離せ…………」

フシ//が男達にしがみついた

「餓鬼! ……離しやがれ! ……」

「フシ//……離しなさい……あたも殺されるわ…………」

「イヤだ! ……」

母さんが殺されるのをただただ見てるだけなんて……イヤなんだよ  
もう諦めるなんてしたくないんだよ! ……」

「……フシ//」

「餓鬼が……調子に乗るんじゃねえ! ……」

男がフシ//に刀を振り降ろすとした瞬間……刀と男が吹き飛ばされた

今日お爺ちゃんとあの銀髪の人と金髪の人以外が橋に行つた

その後金髪のナルト人が橋に向かつた

その数分後にはいきなり男の人達が入ってきて僕を人質に母さんを繩で縛つた

そして1人の男が母さんに刀を向けた

その瞬間僕を掴んでいた男の力が緩んだ

僕は咄嗟に男の腕から逃れて母さんに刀を向けた男にしがみついた

「餓鬼！……離しやがれ！……！」

「フシ//…離しなさい！……あたも殺されるわ！……！」

母さんにそう言われた時頭に「もう良いだろ僕は必死に母さんを助けようとしたんだ母さんもああいつてるんだし」と浮かんだでも銀髪の人の話が頭に浮かんだ

僕は何時も努力をしたか？死ぬほどに……皆に誇れるような努力をしたか？何時も何時も言い訳をしてなかつたか？

……イヤだ……イヤだ！……また言い訳をするのだけはイヤだ！……！

「イヤだ！……！」

母さんが殺されるのをただただ見てるだけなんて……イヤなんだよ……もう諦めるなんてしたくないんだよ！……！」

「……フシ//」

母さんが泣きそうな顔をするがそれでも僕は離さない

「餓鬼が……調子に乗るんじゃねえ！……！」

男が僕にめがけて刀を振り降ろそうとする  
咄嗟に僕は目を瞑った……

何時までも痛みが来ない……僕は勇気をだして目を開けると……

「ヒーローは遅れてやつてくるんだってばね」

「君達……かみ殺される準備は良いかい?」

金髪のお姉ちゃんと銀髪のお兄ちゃんがいた  
2人はまるで……まるで小さい頃に憧れていたヒーローに僕は見えた  
まあ銀髪のお兄ちゃんはヒーローより王子様に見えたんだけどね／＼

s.i.d.o無し

「ナルト……

残りの5人も速くかたずけるよ」

「うん……！」

ドンドンドン

ナルトが1人アランが2人を一気に倒した

「調子に……乗るなあ～～～～！～～～～！」

「オラア！～～～～！」

残りの2人の男がアランとナルトがぶつ飛ばした

「「遅いよ（つてばね）」」

男達を倒した2人はフシミの母親の縄を解いた

「じゃあ

行こうかナルト」

「うん」

「行っちゃうの……？」

フシミが泣きそうな顔をしてナルトとアランを見つめる

「今のフシミなら大丈夫だつてばね！？」

「大丈夫だよ

僕達は必ず勝つからね

……だからフシミは僕達を信じて待つててね

ナルトは笑いながらアランはフシミの頭を撫でてそう言った

「うん！……！」

フシミは2人に笑顔でそう答えた

フシミの答えを聞いて2人は森？の中に入つていった

s.i.d.oアラン

さて……

今橋に向かつてゐ所何だけど……白に似てゐるチャクラがあるね……  
でも白は今木の葉に居るわけである……まあ着いたら分かるね

s.i.d.oカカシ

私とクロウとサスケとサクラは朝タズナさんに着いて橋に向かつた  
昨日は修行で疲れたのかナルトは起きず珍しくアラン君も起きなか  
つた……けど私の班は2人抜けてもスリーマンセル……だから今回  
は2人に休んで貰う事にした  
アラン君が抜けるのは痛いんだけどね……

そんな感じで漸く橋に着いた私達……だけど突然霧が出てきた  
!!!!やはり生きてたわね桃地……

「残念だが桃地が相手ではねえよ」

「!?

あなたは……刀狩りの菊池……」

刀狩りの菊池……刀一本を持ち様々相手と戦い刀を持ったものと戦  
つた時だけ武器を壊す……桃地と同等かそれ以上に危険な男だね……

オリキャラです

NARUTOにそんなキャラ居ません

「あん？」

俺の事知ってるんだなあ……

まあ俺もあんたの事知ってるぜえ……千の術を扱う女……写輪眼の力カカシって言つた方が良いかあ？」

「……そんな事はどうでも良いわ……それよりなんで桃地じゃなくてあなたが居るわけ？」

「まあ説明しなくても良いんだがなあ……

まあ特別におしえてやる……桃地達が依頼破棄してなあ……変わりに俺に依頼してきたんだわ……分かつたかあ？カカシ」

桃地が依頼破棄？

……でも今はそつちじやなくて……

キイン！――！

その時2人の少年がサスケとクロウにクナイで攻撃した……が2人共反応してクナイで受け止めて蹴りを繰り出した

相手の2人は菊池の所まで吹き飛ばされたが瞬時に立て直した

「……へえ

瞬と進のスピードと渡り合いつとは……なかなか優秀な奴だなあ

「当たり前よ

この一人は木の葉のうちのは生き残りで女子でN○・1のうちのはサスケと男子N○・2のうちはクウロ……こっちの春野サクラは女子、男子でもトップクラスの頭脳を持つてる……そして」

その時菊池の前に銀髪の少年が瞬の前に金髪の少女がいた

「木の葉N.O.・1のドタバタ忍者つづまきナルト  
下忍にして実力は未知数のN.O.・1忍者……青葉アラン  
この5人が私の直属の部下……第7班よ！－！－！」

## 波の国編⑧（後書き）

「今回クウロ以外のオリキャラ菊池、瞬、進が現れました……まあ桃地とか居なくなつたからでたキャラ……つまり後釜なんだけどね

瞬と信2人を出したのはアランとクロウ……オリ主とオリキャラがいるからつと言つ理由です

つと……どうやら時間のようですね……

では皆わんまた次回もお会いしましょ……」

# 波の国編！！！！9（前書き）

「はあい！」

「久しぶりだね

それより魁斗？なぜ更新が遅れたんだし？」

「い  
い  
い  
や」

「一レ寝てしまつてね……」

「……相変わらず駄作者だね」

死神の剣製、五つの炎を楽しみに待つて いる読者様へ  
最近全く更新してませんが途中で終わりにはしません  
あの2作品はこの小説を書いて行き詰った時に書く用について事  
で投稿したので亀更新なだけです

s.i.d.oアラン

漸くたどり着いたのは良いんだけど……誰だいあの三人？  
ん？2人はサスケとクロウに攻撃して反撃されたね？  
じゃああの三人は敵つて事だね？

s.i.d.oナルト

アランと一緒に橋に向かってる途中なんだけど……アラン速すぎない？（ナルトを気遣つて全然本気で走つてない）

そして漸く橋に着くつて所で桃地ではない三人組が力カシ先生達と対峙していた

つあ！相手の2人がサスケとクロウに攻撃して逆に吹っ飛ばされたつてばね！！！

s.i.d.o菊池

瞬と進のスピードに着いてきたのにはびっくりしたがあ……まあいつらにはあれがあるから大丈夫だろおそれよ……力カシをどうにかしねえとなあまあ見た感じ桃地の野郎と戦つたせいか疲れてるようだし直ぐに倒せるだ……!!!!!!

菊池が力カシを観察してると突然ナルトが出てきて菊池を蹴り飛ばそうとしたが菊池はナルト氣づき後ろに飛んで交わした……が着地する場所にアランが現れて周り蹴りを繰り出そうとしたが瞬が間に

たちアランの蹴りを受け止めた……瞬間アランの体が水になり上空から菊池にかかと落としをしようとしたが次は進が蹴りで相殺しうとしたが白い煙がでてアランが消え次に菊池の背中に現れて三人が重なるように蹴りを入れた

「　「　「　がはつ…………」

菊池はアランにぶつ飛ばされ瞬と進は菊池を受ける感じで一緒に吹っ飛ばされた

「す……凄い……」

誰が言ったのか……そう呟いた

(水分身に影分身……初めの蹴りと2回目の蹴りは瞬という少年と進という少年が受けに……または相殺しに来るためのもの……そして三人が避けられないようになに成った瞬間に菊池を背後から蹴り2人も巻き添えにした……下忍とは思えない計算の高い攻撃……流石……三代目火影が未来の火影候補と言うほどね……しかもカリスマ性もあるからね……特に女性に……)

カカシはアランの戦いを冷静に分析していた

s.i.d.o 菊池

な……なんなんだあこいつあ…………――――――  
瞬と進の防御を簡単に出し抜いて俺に攻撃してきた……ただもんじやねえなあ……

s.i.d.o 瞬

なんですか？この少年は……見た限り僕より年下……でも実力は僕以上……厄介ですね……  
でも菊池さんの邪魔に成るなら……例え実力が上でもあなたを殺します

s.i.d.o進

な……なんなんだ

こいつ……俺の防御を……ツク……悔しいが俺より実力が上のようだ……だが……それでも俺は……俺達は止まらない！！  
菊池さんの為に……！……！

s.i.d.oアラン

白と似た感覚……これは……匂い？  
違う……もしかして……

「アラン！！！」

こいつの相手は私がする！！！！

「サスケ

私も手伝うつてばね！！！！

「なら……

あんたの相手は俺がする

サスケとナルトが瞬に攻撃してクウロが進に攻撃した

サスケとナルト……一人掛かりならどうにかなるけど……クウロー

人だと……もしも僕の予感が当たれば……十中八九死ぬね  
ここは……

「ナルトとサスケはそのままで良いとして……カカシ先生はクウロ  
の手助けサクラはタズナさんの護衛をして」

「で……でも」

カカシは菊池を見てもう一度アランを見た

「あの男は僕が相手にするよ  
それよりカカシ先生は速く行つて……でないとクウロが死ぬよ?」

「クウロ君が死ぬわけ無いわよ!—!クウロ君はあんたなんかよ「五  
月蠅いよ……」つ!—!!」

サクラがアランに講義しようとしたがアランの殺氣に負けて言葉を  
失つた

「カカシ……速く行くんだよ」

「はあ……分かつたわ

菊池はあなたに任せると

カカシは一回ため息を吐いた後アランにこの場をさせてクウロを追  
つた

「誰が行かすつて言つたあ?」

そこに菊池が横は入りしてカカシに刀で攻撃しようとした……が

キン！――！

「誰が攻撃して良いって言ったかな？」

アランがクナイで刀を防いだ

「ツチ……

やつぱり厄介だなあ……  
餓鬼……名前は？」

「人に名前を尋ねる時は自分からって習わなかつたかい？餓鬼」

「ククッ……ハハハハハ――――――！」

俺を餓鬼呼ばわりかあ……良い度胸してるじやねえか二下あ――――！」

「君ほどじゃないよ

弱者君」

挑発に挑発を重ねたやり取りが終わり菊池は刀を構えアランはクナイを仕舞いトンファー（ちょっと頑丈な普通のトンファー）をだして構えた

そして……両者が同時に動いた

s.i.d.oナルト

「モーフ――――！」

「ツク――――！」

サスケの攻撃を防御した瞬

「今だよ……ナルト！！！」

「わかつてゐつてばね！！！」

「しまつ…………！」

今頃気づいても遅いってばね

瞬の後ろにあつた木に変化していたナルトが変化を解いたと同時に  
瞬を殴つた

殴られた瞬はサスケの方に飛ばされた  
サスケは瞬を周り蹴りを入れたが……瞬の体が水に成った

「…………！」

「これは……」

「水分身ですよ」

いつの間にかサスケの後ろにいた瞬

「水遁！！！」

「千針！！！」

「…………！」

水分身で出来た水が針のようになりサスケを襲つたが間一髪の所で  
避けるサスケ

だが……まだまだ襲つてくる水の針  
水の針はサスケだけではなくナルトも襲いだした  
そしてナルトとサスケが背中合わせに立つた

「捕らえました!!!!」

氷遁！……氷結界！……

ナルトとサスケを囲むように氷が出来た

s.i.d.oカカシ

アラン君に言われて来たけど……

「っく……ー！！！」

敵の彼……速いわね

あのクウロでさえ追いつけなく成つてゐ

「どうしたどうした!!!!」

お前の実力はこんなもんかあ……

進がクウロにクナイを当てよつとした時

キイン

「あら?

あなた私を忘れてるわよ

カカシが間に立つてクナイを止める

「カカシ…………！」

邪魔するな……奴は俺の獲物だ！……」

「はあ……残念だけ今あなたじやあ彼には勝てないわ

クウロがカカシに殺氣を出して退くよつて言つたがカカシは呆れた様子でクウロに正論をいった

「…………！」

「なんだと……」

「部下を見殺しなんてできないからね

今日は諦めて貰うわよ」

「…………ツチ  
分かった……」

クウロは渋々カカシの命令？に従つた

「話は終わつたか？」

「ええ

でもあなた優しいのね  
わざわざ待つてくれるなんて

「三ツの話し合いでぐらり待つのが俺達流だ（菊池と進だけです……）

「

でも……三下だと思ってた相手が実は自分以上の場合があるわよ

「そり……

でも……三下だと思ってた相手が実は自分以上の場合があるわよ

カカシは殺氣を出しながら進を睨んだ

「へえ……

あんたは俺より強いつて言つのか?」

「さあ?

どうかしら」

「……ふん!!

なら俺に見せてみなあんたの力をな!!!!!!」

キイン!!!!

両者同時に動いてクナイで攻防をしだした

s.i.d.oアラン

「俺の名前は木原菊池だあ……俺あ名乗つたぞお……てめえも名乗  
りやがれ三下あ」

「青葉アランだよ

弱者君」

刀とトンファーで競り合つてたのを両者が後ろに飛んで一度離れた  
……がまた相手に近づいて

キインキインキインキインキインキインキインキイン!!!!!!

何度も何度も刀とトンファーをぶつける

「何時までその態度をとつていられるかなあ……」  
「君こそ何時までその口を開いてられるんだい？」

弱者君

こうして初のCランク任務の最終決戦が始まった

# 波の国編！！！！！9（後書き）

なかなか進まない今日この頃……何時に成つたら波の国編終わるのやら……

今回の後書きは此處までにしておきます  
ではまた次回お会いしましょウーーーーー

波の図編――――――（繪書也）

グダグダです  
めつちやグダグダですのド氣をつけて下れ  
では――始まり始まり――――――

キンキンキンキンキンキン

いまだ競り合っているアランと菊池

Γ Ο Λ . . . ! ! ! !

# 水遁・水龍弾の術！！！！

菊池が離れた瞬間に刀を一瞬で仕舞つた後素早く印を結んで術名を叫んだ瞬間水の龍が現れて（橋の下にある水から）アランに襲いかかる

「ぬるりぬるり…… “あれ” 試してみようか……」

アランが持つてゐるトングバーにオレンジ色の炎が纏つた

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション…………コントンファー」

アランは迫ってきてる水の龍にトンファーを当てた……瞬間水の龍が凍つていった

「な……なに……!」

あいつら以外にも氷遁使いが…………！！！」

「やつぱりね……通りで白と似た感じがしたわけだよ。まあどうちでも良かつたんだけどね。じゃあリウンド二に行ひつかへ。」

つく……

やつぱり速いわね……

それに負け惜しみみたいに聞こえるけど写輪眼を使った為なのか……  
体に披露が残ってるわね

「へえ……

あつちの餓鬼よりは楽しめそうだな」

「ふふ

その余裕……何時まで続くかしら?」

相手の挑発?を軽く受け流してたが内心何時までこの状態で戦える  
かつと焦っていた

s.i.d。クウロ

何も出来ないのか……?

クウロは力カシと進の戦いを見ていた

また……何も出来ないのか……?

能裏に蘇る記憶

帰った時に両親を……兄弟を殺されていた忌々しい記憶

あいつを殺せないで……今殺されるのか?

死にたくねえ……死にたくねえ……死にたくねえ……死に

たくねえ……死にたくねえ……死にたくねえ……死に

その瞬間今まで速かつた力カシと進の動きが……遅くなつた

s.i.d.oナルト

やばいってばね……

ナルトとサスケは氷の中にいた

「火遁・豪華球の術！……！」

サスケが火遁で氷を溶かそうとしたが全く溶けなかつた

「この氷を溶かそうと思うならもつと火力がいりますよ」

「ツク……」

「でも……」この氷の中ではあんたも攻撃できないつてばね……

「ふふふ……出来ますよ……こうすれば……」

そう言つた瞬間瞬が氷の中にショット入つていつた

「「……」」「

「僕の本気のスピードに……着いてこれますか？」

氷の中に居た瞬が今までよりも速く攻撃してきた

s.i.d.oサスケ

は……速い……………！

追いつけない……いや……見ることも出来ない…………！

「がはつ…………！」

ナルト……………！

ツク……本当にやばいわね……このまま防戦一方……いえ……防御すら出来ないわね……ここで終わりなの？

姉さんを殴らず終わり？仲間と遊んだりしないで終わり？「ちは一族を復興しないまま終わり？アランに……アランに告白しないまま終わり？……終われない！！！私はまだ……こんな所では終われない！！！！！」

つえ……？

相手の動きが……遅く見える……これなら…………！

s.i.d.oナルト

真つ暗な……真つ暗な暗闇……まるで海底みたいに沈んでいくように  
ナルトは下に……下に行く

終わるつてばね…………

諦めてしまふの？

所詮ここまでつてだけだつたんだつてばね

仲間は……どうするんだい？

でも……無理なんだつてばね

お主はそれで良いのかのう？

嫌だ！！！

本当は死にたくないってばね！！！！仲間達と遊んだり馬鹿みたいに笑つたり……アランともまだまだ一緒にいたいってばね！！！

初めは女の人の声次に男の人の声最後に女の人の声を聞いたナルト  
は本音を叫んだ

ふふ

それでこそ俺の（私の）娘だ（つてばね）

つえ……？

小娘……いやナルト儂もまたアランと話したいからのう……力かしてやる

その瞬間暗闇が光で覆われた一瞬……一瞬だけ九本の尻尾を持った  
私と赤い髪を持つた女人と金髪の男の人気が見えた

s.i.d o???

行つたかのう……

「しかし……びっくりしたよ

君が素直にナルトに力をかしたことには……しかも僕達に気づいて

も消れないなんてね」

「別に良いだろ? そんな事……」

檻のまえに先ほどの金髪の男性と九本の尻尾を持つた女性と赤髪の女性が話をしている

「九尾? ..

そんなにアラン君つてのは格好いいのかい?」

「つな…… ! ! !

アランなど関係ないじゃ ろうつ… ! ! ! ..」

「ならカツ 「良い」の?」

「や…… そんな事など無い

あやつはお主なんかより数倍…… いや数千倍格好いいのじゃ // /

/

「 「ふふふ (ははは)

まさかあなた(九尾)にこんな顔を見せるとはね」

赤髪の女性と金髪の男性が九尾を見て笑い出した

「む…… むう…… 儂の事は良いのじゃ…… それより “四代目” と “クシナ” よ…… あれで良かったのかの? 久しづびりの…… いや初めての親子の対面じや わう?」

「 「良いんだよ (つてばね)

もう…… 何時でも会えるからね (んだつてばね)」

「……そつか」

「それよりアラン君の話をもつと聞かせてよ」

「そうだつてばね！……！」

九尾がこんなにほれるなんて……気になるつてばね！……！」

「ええい！……！」

五月蠅いのじや……儂の事は良いのじや！……！」

s.i.d。四代目

九尾を丸め込ました少年……ナルトを元氣にしてくれた少年……アラン君

君には感謝してもしきれないね

「でも九尾とナルトは簡単にはあげないよ！……！」

「ミナト

駄目よナルトの邪魔したら」

「なぜ儂まで入つとるのじや！……！」

s.i.d。クシナ

ナルトと再開と九尾の意外な顔を見て口調が変?に成つてしまつたわね……でもナルトも私と一緒にぼかつたわねえ……まあそれより九尾に私達の事がバレた時はドキッとしたけど……ここまで丸くなつてたとはね

青葉アラン……H!!ヒイト君の息子……ふふ2人には色々恩義が

あつたけど……まさか息子にまで恩ができるとはね……  
まあ今はナルトと九尾の恋を邪魔しようとしたミナトを懲らしめる  
つてばね

s.i.d.oアラン

ん……？

誰かのチャクラが大きく……このチャ克拉は……九尾？……って事  
はナルトだね……チャクラは安定してるから九尾がチャ克拉を貸し  
たのかな？

まあそれならあつちは大丈夫だね

「余所見なんとしてる余裕があるのかあ二下あ――――――」

「君程度余所見していくても勝てるよ」

相変わらずトンファーと刀でやり合つてる2人

時たまに菊池が水道の忍術を使いアランが死ぬ気の零地点突破・初代エディション<sup>ースト</sup>i.n.t.oトンファーで凍らせるつという様に成つていた

s.i.d.oカカシ

このチャクラは……！――！――！――ナルト――！――！――！

ツチ――！――急がないと駄目かしら？

カカシが進と戦つてる時にでっかいチャ克拉を感じて『輪眼を発動  
しそうとした時……

「カカシ――――！」

「退け――――！」

「…………」

クロウの声がしてカカシは横に退けた瞬間……

「火遁・豪華球の術…………」

火の弾が進に襲いかかる

だけど進は凄いスピードでよけた……がクロウも進に負けず……いやそれ以上のスピードで進に迫り蹴った

「…………」

あの田は……“[写輪眼]”

クロウの田は赤くなり2つの勾玉が浮かんでいた

s.i.d.oサスケ

これが……これが[写輪眼]……これならあいつの動きも捕らえられる  
…………

サスケの田にもクロウと同じ2つの勾玉が浮かんでいた

「つな…………！」

「捕まえた！――！」

サスケは凄いスピードで動く瞬の腕を掴んで投げ飛ばした……が瞬は危なつかしいがきちんと着地した……瞬間赤いチャクラを纏つたナルトが凄いスピードで瞬に近づき殴った

そして氷の結界にぶつかって氷の結界が壊れた

s.i.d.oアラン

「……

瞬――――――

「余所見してゐる暇があるのかい？」

「ツチ……――――

「終わりだよ……

雷遁・雷皇牙」

トンファーに雷が覆つた  
そのまま2つトンファーで菊池に向かつて……攻撃した

s.i.d.oクロウ

「これで……終わりだあ――――――

俺は敵に向かいクナイで攻撃しようとした……が

「――――

「わりいが……まだ死ねねえみたいだ」

そう言つて奴は俺の腕を掴んでカカシの方に飛ばしやがった

s.i.d.oナルト

吹っ飛ばした相手はゆっくり立ち上がり

「僕の……負けですね

ほら……留めを刺しなさい

「「え……？」

「？」

何をビックリしてるのですか？  
まさか僕を生かす気ですか？」

「「…………」

私……私達はお互に黙った

「ふふ

優しいですね……ねえ？あなた達には大切な人は居ますか？」

「「…………」「クつ

私とサスケは何も喋らず頷いた

「なら……大切なものを守る時には……相手を“殺す”というのも  
必要です

それが……今です」

彼の言葉に……私とサスケはクナイを取り出して彼の命を……取り  
にいった

「-----」

だけど彼は私達の手を取りクナイを止めた

「すいません  
まだ死ぬ事は出来ないみたいで  
すいません」

彼はそう言つて凄いスピードでどこかに行つた  
私達は彼を追つことが出来なかつた

s.i.d.oアラン

「雷皇牙……！」

当たつた……確かな感触……だけど菊池は死んでいない……死んだ  
のは……進と瞬だつた

「「……」

菊池とアランは有り得ないつという顔をした

「「ホッ……菊池さん……あなたは……僕のすべてでした……」

「菊池さん……俺を……俺達を救つていただき……ありがとうございました」

2人は笑顔を浮かべて……死んだ

「……クク

「うやらラウンド3のようだ……なあ……」

菊池は刀を振り2人」とアランを斬りつとしたがアランが凄いスピードで離れて2人を地に下ろした

「……もつ無理だね」

アラン2人を綺麗に並べて菊池の元に戻った

「あんな奴らあ構うとはあ……やつぱり三下だなあお前え」

「無理をしなくても良いよ……」

アランは菊池の涙を見てそつと語った

「無理なんて……してねえよ三下あ……！」

「安心しなよ……あの2人と一緒の……天国に連れて行つて上げるよ……千鳥……」

アランは手に雷をためて……それを……菊池の心臓部分に刺した

「ゴホッ……三下あ

最後に……あいつらの顔をみせてくれねえかあ？」

「……ああ」

アランは菊池をせよつて2人の中に寝かした

「ああ……瞬に進……てめえらなに死んでんだよ……死ぬんだつたら俺より後に死ねつてんだあ……馬鹿やろうが……」

てめえ、りと同じ場所に行けねえ俺の事も考えやがれ……」

「菊池……大丈夫だよ

君はこの子達と同じ場所に行くよ……僕が保証してあげる

「やつ……かよお

二下あ……テメエの言葉……信じてやる」

いひつて菊池やつへつ田を開じた……

波の国編――――――（後書き）

次回でとつとつ波の国編終了です  
つえ……？あとなに残つてたかつて？  
ほら……まだガトーいるじやん？

ではまた次回お会いしましょう――――――

# 波の国編！！！！！（前書き）

波の国編終了~~~~~！！！！！！！！！！！！

つ  
え?  
?

## ピックリマークが大きい？

確かに大きなお

まあ何はともあれ波の国

因みに今回一あとから無しはせで讀し出す

S.i.d oアラン

終わつた  
ね

ゾロゾロゾロゾロ

アランが菊池から離れたその時大きな船がやってきて船の中から小太りなおっさんが出てきた

「つか……高い金で雇つてやつたのに……」んな糞餓鬼共に負けるなんて……」

「が……ガト……………！……！」

ガトードラム?

ああ……黒幕の事すっかり忘れてたよ

「おい進？」

あんた確か俺の腕え……折つてくれたつけな？」

近くにあつた進の顔を思いつきり蹴った

F 10

「瞬？てめえも確か俺の首にクナイを当てたよな？」

次に近くにあつた瞬の顔を蹴つた

「最後に……菊池～」

高い金で雇つてやつたつての事よ……やっぱガラクタは何処までい  
つても……ガラクタなんだよ…………」

最後に菊池の顔を思いつきり蹴つた

「な……何をしてるんだ……！――！」

ナルトが文句を言おうとした瞬間……今までに感じた事のない殺氣  
が出てそちらを見る……殺氣を出しているのは……アランだった

s.i.d.oナルト

あ……アラン……？

『あれは……完全にきれとるの』

つえ……？

今……声が……？

『なんじや？

まだ儂の正体が分からぬのか？』

だ……だれ？

『お主に封印されとる九尾じやよ』

若干呆れたよ、ついに言つて九尾

『そんな事より……今から始まるわ……青葉アランの……戦争が』

アラン……

s.i.d.oサスケ

アラン……完璧に怒ってるね……  
多分……今からだと思つ……アランの“実力”的一部が見れるのは  
でも……アラン……怪我だけはしないでね……

s.i.d.oカカシ

これが……これが下忍に成り立ての者の殺氣か……?  
私でさえ足が震えるつて言うのに……情けないわね……担当上忍な  
のに……帰つたら修行ね……でも今は……アランが怪我をしないこ  
とを祈りましょう

s.i.d.oクウロ

く……そ……!!

アランの奴まだ実力を隠していたのか……!!  
クソクソクソクソ!!  
負けねえ!!!!絶対負けねえ!!!!  
ねなよ……アラン

s.i.d.oサクラ

な……なんのこの殺氣?

これは……クウロが出してるの?

足が震える……怖い

凄く怖い……でも……何故?……なんで?

なんで……“懐かしい”つて……“嬉しい”つて思えるの……?

……わからない……わからないから……勝手に死なないでよね……

アラン

s.i.d.oアラン

「君が……その3人……蹴る資格なんて無いよ」

「資格?」

「こいつらを蹴るにか? 無いな……負けたこいつらにそんな大層なもんは無いよ……」

「謝りなよ……3人に……そうしたら……許してあげる……」

「謝る?俺達がか?

……ツハハ……ハハハハハハハハハハ!!!!謝るだつてよ俺達に!!!!

!!!!ハハハハハ!!!!

ガトーの言葉に周りも笑い出した

「いやだね」

「……最後だよ……謝りなよ」

「謝る必要性は……無いな……」

「そつ……なら……」

何処から刀を取り出して鞘から取り出した

取り出された刀は……何処までも輝いていて刃こぼれ一つ無い刀  
だった

s.i.d.o無し

鞘から刀を取り出したアランはゆっくりと顔を上げた……何時もの  
ように何処までも輝いてる髪……そして何時もとは違つ……包み  
こむような青い目ではなく……血のよう赤い紅い朱い……真っ赤  
な目に変わっていた

死眼……発動

この世には魔眼と言つものが存在する  
写輪眼や白眼……ギアスなど様々ある  
全てにある共通点は強力だつという事だ

一つでもあれば一国を落とせる程に……その中でも直死の魔眼……  
あらゆるもの死を見る事が出来る……魔眼の中でも有名なもので  
……魔眼の中で最凶の魔眼だ

なんせ……やろうと思えば神でさえ殺せるんだから

死眼とは直死の魔眼と似ていてものの死を見る事が出来る……が死  
眼は寿命などはわからない……変わりに“死んでない”ものなら例  
え死期が来っていても例え理解出来なくても……殺す事が出来る

「行くよ……」

アラン一気に相手に近づきものの死……つまり死の線を切つていった  
腕、足、武器……様々な死の線を……相手もただやられるだけでは  
なく……目前にいる化け物に……後ろから横から……囲んででも攻  
撃するが……全て避けられ腕又は足を切られる

そして……真っ直ぐ……ひたすら真っ直ぐ来たアランは直ぐにガトーの目前に来た

「わ……悪かった……！  
俺が悪かつた…………！」

ガトーはアランに対して凄く汗をだしながら謝つたがアランは止まらない

「あ……あれだ……！  
俺を殺さないでくれたら……何でもやる……金か？部下か？ほら言つて見ろ…………！」

その時アランが止まつた

「何でも……かい？」

「……………あ……アラン？？」

「あ……ああ  
何ででもやる」

「……………」

アランが止まつた事に安心したガトー  
止まつた事に吃驚して声を出すカカシ、クウロ、サクラ、ナルト、  
サスケの5人  
アランは気にせガトーに近づき……

「なら……君の命を……貰うよ

「つえ……？」

ザシユツ

ガトーの死の線を切った

ガトーが最後に見た景色には……死神が見えたらしい

s i d o アラン

あの後ナルト達と集まつて村?まで帰つて数日たつて漸く橋が出来た  
その間にあつた事はフシミがナルトとサスケに懐いてお姉ちゃんつ  
て呼んでいたよ……一応僕にも懷いてるんだけどお兄ちゃんとは呼  
ばれない

ほかにも偶にフシミ、ナルト、サスケがにらみ合つたりと様々な事  
があつたが……桃地や菊池みたいな奴は出てこなかつた

そして橋……ナルト大橋が出来た

初めはアラン大橋とどっちにするか迷つたらしいが僕が拒否つたた  
めナルト大橋になつた

ナルト、サスケ、フシミは必死に涙を堪えていたね……そして橋を  
渡りきつた時にその文字は見えた……

なあ?知つてるか?

波の国に新しく橋が出来たみたいだぜ?

あん?名前?ああ……確か2つあつたな……ナルト大橋と……たし  
か……

“アラン大橋”

木の葉の里に帰つてゐた――――（前書き）

波の国編が終わつた……と嘆ひ「ひとせ……皆さん分かりますよね?」

## 木の葉の里に帰つてきた！！！

s.i.d.oアラン

波の国から漸く木の葉に帰つてきて「」意見番の爺さん婆さんに任務の報告をした（実はB、Aランク並みだつた事は伏せて）後各自家に帰つて行つた

僕も一度家に戻つて白と数分会話をした後散歩に出かけた

今はその散歩の途中なんだけど……

「木の葉丸を離せつてばね……！」

「嬢ちゃん？  
俺は餓鬼が大つ嫌いなんなじyan……特に躰の成つてない餓鬼つてのはな」

ナルト、サクラ、サスケと爺さん（火影）の孫の木の葉丸と男の子と女の子と木の葉じやない忍……額宛からして砂かな？……と言い合ひ？をしていた

どうやら木の葉丸があの男にぶつかつてそれにキレた？男が木の葉丸の腕を掴んだそこにナルトが現れたつて所かな？  
つと……そろそろ介入するかな……

s.i.d.o無し

ナルトが飛び出そととした時……ナルトの横から銀色の線が横切つて相手の前に止まつた

止まつた銀色は素早く相手の男の手首を（木の葉丸を掴んでる方の）

掴んで握った

「痛つ…………！」

痛さに木の葉丸を掴んでいた力が抜けた瞬間重力で落ちる木の葉丸を抱えてナルトの方まできた

……まあ皆さん分かつてると思いますが銀色の奴ってのはアランの事です

「あんまり他国で暴れないでくれない？」

「餓鬼つ…………！」

もう容赦しないじゃん…………！」

「まさか…………カラスを使うのかい！？」

男が後ろに背寄つてるものを下ろした  
後ろ隣にいる女人が吃驚したように男に言つ

（あれは…………落ちた時の音…………人一人分ぐらいの大きさ…………そして  
“カラス”という言葉…………多分…………いや十中八九傀儡人形だね）

アランは冷静に相手を観察して答えを出した  
そして何時ものようにトンファーを出した

因みにナルト、サスケは赤面し木の葉丸の友達の女の子は見ほれて  
いて男の子は憧れ的に見ていた  
サクラは1人何かを考えていた

「へえ

俺とやるつってか…………良いじゃん…………やつてや「止め…………カシク

「コウ…… 我愛羅」

いきなり木の上に居た小さな女の子が相手の男に殺氣をだして睨みつけた

「が…… 我愛羅……」これは俺がわる「止めらつて言つた筈だ」…… 分

かつたじゅん」（ツチ）

そのやうどりを見てアランは何時もとは違つて服の中にトーンファー<sup>カントクロウ</sup>ーを隠した

（（（くえ……あのトーンファーツてあそこに入れてるんだ）））

若干三名が難解を解いたような顔をした

そしてアランは何事も無かつたように散歩に戻る<sup>リ</sup>とすると木の上から降りてきていた女の子（我愛羅）が「ひかりに殺氣を出してきた

「……何だい？」

「お前…… 名前は？」

「人に名前を聞く場合は自分から名のつなよ」

「…… 我愛羅」

「青葉アランだよ

……つで？金髪の君は？」

「つえ……？」

「私……か？」

アランは我愛羅とカンクロウの名前は（二人が言つたため）分かつ  
ていたが金髪の女の子の名前はまだ聞いてなかつたため興味方位で  
聞いた

「つふふ

君以外に誰が居るんだい？」

「「「「／＼／＼」」」

ナルト、サスケ、木の葉丸の友達の女の子、金髪の女の子が顔を真  
っ赤にした

「て……テマリだ」

「そり

アランはそれを聞いて漸く散歩に戻らうとしたが……

「つて……俺の事を忘れてるじゃん！――！」

その言葉に振り返り

「はあ……君は？」

「カンクロウ――！」

次あつた時は倒してやるじゃん！――！」

アランは面倒くさそうに訪ねた……がカンクロウは気づかないのか  
名乗った後満足そうにしていた

「じゃあ  
僕は行くよ」

アランは三度田の正面でサスケとナルトにやつてた後歩き出した

「「あ……うん  
待たねアラン」」

s.i.d.oアラン

漸く散歩に戻れたよ……はあ

「あ……あああアラン君……」

突然後ろからアランの名前を呼ぶ声がして後ろを見ると黒い髪に白い目をした美少女が居た

「ヒナタ?  
どうしたんだい?」

そう

皆さん大好きヒナタさんだ

s.i.d.o無し

またかつて?

しうがないじゃんこれの方が楽なんだから  
さて……話は戻して……ヒナタがアランに声をかけたアラン振り返  
るどひかしたのかを聞くアラン

「いい……いいやね  
た……偶々アラン君の姿が見えて……その……あの……」めんね？め  
迷惑だったよね……」

どんどんとショソフとしだしたヒナタ

「  
」

迷惑じゃないよ」

そんなヒナタを見て笑いをこらえながら語りアラン

「は… はう～～ / / / /

笑ったアランを見て顔を真っ赤にするヒナタ

「うん？」

ヒナタ顔赤いけど……風邪かい？」

もげる……つて思った方は何人いるかな（笑）  
つと……話が脱線しそうになつた……

「子猫」

「え……？」

何か言ったアラン君？」

「ん？」

ああ…何でもないよ」

一瞬噛んだ時のヒナタの頭に耳が見えてお持ち帰りしそうになつたアラン（危ない意味では純粋に猫、犬などの動物が大好きだからです因みに作者は猫派です）

まあアランだから理性が飛んでお持ち帰りをする事はありません撫ではするけど……（特にキバが多いらしく）

「それで

ヒナタは何しに此処まで来たんだい？」

話を進め出すアラン

「えっと……ね

今までキバちゃん達と修行しててね……今帰りなんだ」

ヒナタも落ち着いたのか流暢に話だす  
まあ……若干顔が赤いけど……

「そりだつたんだ……なら家まで送るつか？」

「つえ……？

い…良いよーーー迷惑だしーーーアラン君も用事があつたんでしょう？」

散歩だつたからね別に迷惑じゃないよ

それに丁度ヒナタの家の前通る予定だつたからね  
それとも僕と歩くのは嫌かい？」

「ん？」

「う……／＼／＼

な……ならお願いします／＼／＼

「ふふ

お願ひされました……かな?」

「うしてアランの散歩はヒナタを送つてこくに一時変わった

「あ……あの……」

「なに?」

「こ……任務どうでした?

（ランク任務に行つたって……）

「ああ……うん

まあまあ楽しめたよ?」

「そり……ですか」

「ヒナタはどうなんだい? 任務は上手く行つてゐ?」

「わ……私は……キバちゃんやシノちゃんに迷惑ばっかかけてます……」

…

「ツクク

数分歩いた後急に（沈黙に耐えねば?）任務の話をしだすヒナタ  
アラン（第七班（今は第零班は第七班扱いなのでアランも第七班扱

いです））がCランク任務を受けたのを知つていので大丈夫だつたのかを聞いた

アランは久々の死合で楽しめたらしく楽しめたよつと伝えた後ヒナタにも任務はどうつと聞いた

ヒナタは顔を沈めてあまり上手く行つてないつと言つた……つて多くない？ねえ？地の字多くない？

つちょ……魁斗？この台本の地の字多いよ

つえ……？そんな事は良いからはやく本編に戻れ……？

そんな事では……つえ？地の字読む奴ぐらい代わりは幾らでも居る？

沈んだヒナタを見て急に笑い出したアラン

つえ……？権力に負けたなつて？そうですが何か？

「？」

訳が分からないつという顔をしたヒナタ

「嫌ね

前キバとシノに会つたんだけどね

君の事褒めてたから……大丈夫だよ一人は君が迷惑ばっかしかけてるなんて思つてないよ

それよりも感謝をしてるぐらいだつたよ」

「う……嘘です

「僕は嘘は言わないよ

「な……なら

キバちゃんとシノちゃんは私に気を使って……

「一人はそんなに器用じゃないよ」

「ならなら……」

アランの言葉を否定しようとするがアランは受けつけないで逆に否定する言葉を否定した

「ヒナタ

そんなに自分を過小評価しなくても良いんじゃないかな?  
君は凄いって周りが認めてるんだから……まあ僕も認めてる中の1  
人なんだけどね」

アランはヒナタの頭を撫でながら優しい口調でそう言った

「あ……ありがとう……アラン君」

少し涙目で言うヒナタ

「ふふ

礼なんて入らないよ  
じゃあ行こうか」

「う……うん……」

再び歩き出した2人

また沈黙が続くが今のヒナタには心地よく感じたらしく

s.i.d.oヒナタ

「じゃあね

ヒナタ

「うん

ま…またねアラン君

そう言つた後アラン君は少し笑つた後どこに行つた

「ヒナタ?

今帰つたの?」

家から声がしてそちらを見たら……

「つあ……

ネジ姉さん来てたの?」

ネジ姉さんは私の従姉妹で私なんかよりも才能がある人……ある日から関係が良くなかったけど……少しづつ仲良くなつて今では何でも相談する仲になつた

初めは様づけで呼ばれてたけど頼んで（涙目＆上目線）で呼び捨てに変わつた

「ええ

叔父様に稽古をつけて貰つてたの  
それよりお帰りなさいヒナタ

ネジ姉さんは笑つて私にそう言つた

「ただいま

私は笑顔でそう言いました

数分ネジ姉さんと話をしました

そしてふと思つた事をネジ姉さんに言いました

「あ…あの  
ネジ姉さん……お願いがあるのですが……」

「なに?」

私に出来ることならやるわよ?」

「わ…私に…稽古をつけてください…!!」

私がそつまつとネジ姉さんは吃驚した顔をした後笑つて

「私の稽古は厳しいわよ?」

つと囁いてくれた

「は…はい…!!

お願いします!!…!!」

「でも…稽古の前に服を着替えないとね  
泥だらけだし……」

「は…はい／＼／＼／＼

ネジ姉さんに言われて気づきました

私…キバちゃん達と修行して服が泥だらけだつた事を…そして  
…アラン君に泥だらけの服を着たまま話をしたこと…「う…  
失敗しました

案外ドジなヒナタだつた

s.i.d○アラン

ヒナタと別れた後ぐらいからかな……誰かにつけられてるね……この気配はの人なんだけど……なんであの人が？砂の忍が居た事と何か関係があるのかな？まあ……でもつけられるのはあまり好きくないから……少し遊ぼうかな

誰も好きじゃないよ

つと魁斗なら言うのかな？

っん？メタな話は止めろ？

分かつたよ

さて……と人が居ない所まできたし……そろそろやれりが……

ビュシュン

その場でいきなり消えたアラン

「やあ……キャアアアアー！――！」

s.i.d○無し

そして女の悲鳴？いや喜びも入った声が聞こえた……

女の悲鳴が聞こえた場所にはイルカ先生が居たらしい……このあとイルカ先生は語つた……「Mに……目覚めちゃつた……あ……アラン……せ……責任……とつてね／＼／＼」

はあ……何があつたんだあ～～～～～～～～～～～～～～

因みにアランは幻覚を見せたらしい……どんな幻覚かは各自の想像にお任せしよう

s.i.d.oアラン

あれから散歩が終わり数日した時にナルトとサスケから聞いた話によると中忍試験をやるらしい  
カカシがそれを教えた時に僕は散歩をしていた口だつたらしく家に居なかつたから後から教える事にしたらしいよ  
そして中忍試験開始時は……明日らしい……もつちょっと早く教えようつよ……

木の葉の里に帰ってきた！（後書き）

カンクロウは作者が流石に無理かなあつと言つ事で男のままです  
つまり長女、長男、次女つといふ兄弟です

それにも……カンクロウしゃべり方は難しい……はあ

最後にアンケートです

我愛羅の容赦は

?ゼロ魔のタバサ

?エヴァのレイ

?ニードレスのディスク  
どれが良いですか？

現れた青春のゲジマニアでは無く（前書き）

アンケートはまだまだ続いてます！――――――  
では本編スタート――――――

## 現れた青春のゲジマニアでは無く……

中忍……下忍と違つて部隊の隊長になつて部下のフォローや指示をだすものの事

下忍と違ひ責任重大なため下忍から中忍に成れるものを見極めるために“中忍試験”つと言つものがある  
中忍試験では知、力、技を試される

つと……ちょっと今回出だしなに？今までと違うじゃん……つえ？こんなのも偶には良いんじやないかって？つていうか話を脱線させんな～クビにするんだ？

つとクビもかかってるため話を戻そつか……

今回の中忍試験は砂と新しく出てきた音との交流の為3つの里の下忍、担任上忍が木の葉にやつてきた

つとこれでいいですね？つえ？また話が脱線してる……まあまあ……落ち着いて下さじよ……では本編の始まり始まり～

sid oアラン

ん？

なんだらうね……今凄くグダグダなやりとりがあつた気がするよ……  
つえ？そんな事より今どこにいるかつて？……今は中忍試験のある  
集合場所の301の教室に向かつてる途中だよ

つて……僕は誰に説明してるんだらうね？

「アラン？」

「アラン？」

۷

考へ事してただけだよサスケ」

「どうかしたの？」

「何でもないよ

つと三人（クウロとサクラはサクラが一方的にクウロに話しかけて  
クウロはうざそうにしてる）と話していたら301と書かれた教室  
の前で強姦ではなく喧嘩をしている一子がいた

全く……」これで中忍に成るつもりかい？

サクラが「止めた方が良くない?」って言つてきたよ……自分が行くつて選択は無いのね……はあ

「あんなのはほつといたら良いんだよ

「此處からが口添馬だから、少々知り合いで、少し女の事は、お面倒見切れないよ……まあ行くつてなら止めないけどね」

ג עיון

僕の言葉に何も言えなくなつたのか今まで騒がしかつたのが嘘のよ  
うに黙つた

「へえ……嬢ちゃん達その程度で中忍試験受ける気?

止めときなその程度じゃあ無理だ」「

その声と共に小さな女の子が僕に飛んできた

突然だつたので流石の僕も避けられず受け身で受け止めようとしたが  
予想以上の重さでそのまま僕」と吹き飛ばされた……

なにか一緒にいた女の子が「リー……」って叫んでるね……

「はあ……だから言つただろ?お前程度が中忍に成れる訳ねえんだよ  
中忍つて言つたらな部隊の隊長レベルだぜ?  
任務失敗も部下の死亡もも……全てが隊長の責任になる……  
それが“中忍”つと言つもんなんだよ……」

s.i.d.o無し

「それが“中忍”つと言つもんなんだよ……」

その言葉と同時にサスケが動いた

一瞬のうちに相手に近づいて蹴りにかかる(アランが吹っ飛ばさ  
れたのにキレ)が相手も気づいてサスケに殴りかかる  
だが……その間に先ほどの女の子が入つて……サスケの蹴りを左手  
の手首で相手の手を手のひらで受け止めた

「「……」

「ふう……」

「ねえ

リー約束が違うわよ?

目立つて警戒されたく無いって言つたのはあなたよ?」

ん?あれは……

「ネジ?」

「え？」

アラン??

「うえ……！」

ネジの知り合い！？

「え？」

うん

西のとは思つてたけど……まさか此處で出合つとはね

「はあ……まあにも言ったんだけど……名前を聞く前は自分からだよ?」

「わ…わわ私はロック・リーって言います！…！」

「僕は青葉アランだよ」

「アーヴン……アーヴンアーヴンアーヴンアーヴン……はい……覚えました！」

三

一  
心

面白い子だね

「ちょっと…… 2人共私の事忘れてないわよね?」

リーとネジの間からお団子頭の女の子が現れた……

「君は……」

「私の名前はテンテンよ  
よろしくねアラン君」

「……」

「じゃあ僕達は先に行くよ  
またね? ネジ、リー、テンテン」

アラン三人に別れを言つてから先ほどどの男の横を通り過ぎた時……

「サスケが先に攻撃して無かつたら僕がするとこりだつたよ……  
命拾いしたね…… 名も知らない中忍さん」

「……」

s.i.d.oの名も知らない中忍(いやマジで知らない)

な……なんて殺氣だ……あれが四代目以上の天才忍者青葉アラン……  
今回の中忍試験……あいつはあがつてくるな……いや下忍なんかに  
やり合える奴なんかいないだろ……  
全く恐ろしい餓鬼を産んだな……あの2人は……

s.i.d.oリー

青葉アラン……彼が下忍にして中忍以上以上の実力者……天才忍者

Sidi o ハンテン

Sido ネジ

「また2人……敵が増えたわね……ツク……こうなるのが予想出来たから教えなかつたのに……でも私の方がアランの事知つてゐるから有利かな？」

Siddoアラン

なんだい？

同盟して……あれ? また何を言つてゐんだ?」

「待て！！！」

「ん……？」

後ろから突然声が聞こえそつちを見てみると……赤髪黒眼のイケメン君がいた……気配からして転生者ではないね（イケメンだから疑

つた)……

「お前が青葉アランだな！――！」

「誰だい君？」

「俺は……黒垣サカヤだ――！」

黒垣サカヤ……全く知らないね……

「つで……僕に何の用だい？」

まさか呼び止めただけ……って訳では無いよね？」

「お前に……決闘を申し込む――！」

s.i.d.o無し

まさかの此処で俺の仕事つすか！――はあ……

黒垣はアランに指を指してそう宣言した

「悪いけど……僕が受ける理由が無いよ

「お前に無くても俺にはあるんだよ！――俺は去年お前と一緒にルーキーだった（テンテンが言つてた奴）……そしてモテモテだった（もげる……）俺は好きな女の子と付き合つた（リア純が……）でも彼女は男に絡まれた時にお前に助けられてお前に惚れたからつて理由で俺は振られたんだあ！――（ザマア（笑））  
その恨み……今晴らさせてもらひつう――！」

凄いスピードでアランに近づいた黒垣

……だが相手はアランだ

相手はアランだ

大事な事だから二度言つたぞ

分かるよな? どんなに天才でも所詮チートには勝てない……そして  
アランはチートの中のチート……つまり

「五月蠅いよ」

「ガハツ！――バタツ」

（（（（分かつてた））））

殴り一発で終わりだつて事だ

哀れなり……天才黒垣（笑）

まあ4人は分かつてたらしいけど……

現れた青春のゲジマニアでは無く……（後書き）

今回は前回のアンケートに加えて新たなアンケート……つてか募集です

リーの服装を考えてくれる方を募集したいと思します……！  
因みにリーの容姿は5つのナツミです  
ではお待ちしてます！！！！！

**特別編 親（前書き）**

連続投稿！！！！

だけど特別編だけどね！！！！

それに凄くグダグダだけどね！！！！

初めまして青葉アランの父親の青葉ライトと言います  
今回は僕と僕の妻青葉エミの話と火影様の話です

~~~~~

サイドライト

3ヶ月前に僕の……いや僕達の息子青葉アランが産まれた  
産まれた時は嬉しかったな〜

アナタ

行くよ

僕は妻のエミの声のした方

リビング

に向かつた

「今日はパンと目玉焼きだね

「フフツ ありがと」

「あれ？ アランは？」

「眠そうだったから先に食べさせて今は眠ってるわよ」

「へえ」

そんな話をしていた時玄関を叩く音が聞こえた

ドンドンドンドン――――

「はあ――」

あら？ ルイ君じやないどうしたの？」

「はあはあ

きゅ……九尾……はあはあ狐が……はあはあ……里を……」この里を襲つて  
るんです「

ガタツ

それを聞いた僕は勢いよく立ち上がり

「クシナとミナトは？！」

クシナのお腹に九尾が居ることを知っている僕はルイに大丈夫なの  
かを聞いた

「四代……はあはあ田火影様は今……はあはあとここに居るかはわか  
りません――――

三代目……はあはあ火影様はあなた達に里の皆を避難させてくれつ  
て――――」

「……そつか

分かつた僕は里の皆を避難させる

だけどエミはアランと一緒に避な「馬鹿言わないの」 ハハ――――

「私も行くわよ」

「だ……だけど……アランは……！」

「大丈夫よ……私達は必ずアランのもとに帰つてくるわよ……ね？」

「……ああ

「じゃあルイ君  
アランをお願い」

「……分かりました」

その後エミと一緒にアランを抱きしめた  
抱きしめた時に僕達の大切な息子に愛してると言つた  
これは誓い……愛してるアランのもとに帰つてくると言つ誓いだ  
だから……だから待つてくれアラン

「あなた

「こつちは全員避難出来たわよ……！」

「やうか……

「こつちも避難でき……危ない……！」

避難できたよって言おうとした僕の目にある男が目に入った

その男はエミに近づいてクナイを刺そうとした

僕はエミに駆け寄り後ろにいた男を蹴り飛ばす

「君は誰だい？」

「俺かい？俺は君達の……死神だ……！」

彼は「ど」から出したのか分からないが鎌を持って僕に攻めてきた

「土遁・土龍壁【どとん・どつゆつけ】」

僕は高速で印を結び前に土の壁を作る  
相手の鎌が土の壁に当たったと同時に印を結び……

「土遁・土石流【どとん・どせきじゅう】……」

土の壁が崩れ相手に崩れた土の塊が落ちていき相手が見えなく成った

「ふう

僕の勝ちだ

「流石木の葉の鉄壁だな  
だけどまだ終わらない」

相手は鎌で石を碎いて出していく

「H///-----」

僕は素早くH///で盾をかける

「分かってるわ!!」

「土遁・土龍上-----」

「水道・水流膜!!!」

「「合体忍術!!!」

「災遁・土水衝！！！」僕の術で地面にあつた岩が空に浮かんでエミの術で空に水が浮かぶ

次にエミと全く同時に印を結び全く同時に印を完成させたすると空に浮かんでいた水が岩を包むように水の中に入れた

「これが……木の葉の青葉一族の究極忍術……合体忍術か！……」

エミが出した水が回転して僕の岩を鋭くしたあと相手に向かっていく

「だが

俺はそれを超える！！！

風遁・風斬り！！装着忍術！！対象は……鎌だ！！！」

相手は風遁・風斬りをだしてそれを自分が持っている鎌に纏う

因みに風遁・風斬りは鎌鼬の鼬が居ないバージョンだと考えてください

「」「つな…………！」

そ……装着忍術……だつて……？

そんな術聞いたことが無い……

「うおりやあ…………」

ドカンッ…………

「ツク…………」

鎌と水で覆った岩がぶつかつた

「はあはあはあ……流石木の葉の切り札……つて事か……まさか俺の鎌が……」

ボロボロ

「壊れちまうとはな……」

「はあはあはあ……良く言つよ……僕達の術を破つてそのまま僕達を鎌で斬つた癖に」

「そうよ……まさか術を破られてそのまま攻撃するなんて思わなかつたわ」

「馬鹿やろうが

それを言つながら相打ち覚悟で両方からクナイで攻撃するお前等の方もだろ」

お互い傷だらけのまま喋る

「まあ……最後に言つとくが……俺の後ろに立つてゐる仮面野郎には氣をつけな……一緒にいた俺が言つんだ……」

「なぜ……僕達にそんな事を……」

「ククツ……なあに

死人の氣まぐれさ……」

バタツ

相手が倒れたあと数秒してエミと僕も倒れた

「はは……お互に手酷くやられたね……」

「ふふ……そうね」

「速く帰つてアリソンに会つたいたいなあ

「あら

まずは「飯をあげないと困らせんね」

「」「飯をあげたあとは遊ぼうか……」

「駄目よ

赤ちゃんは「飯の後は眠るのが仕事なんだから

「なら

大きくなつたら……遊んであげようつか……

「…………あなた…………もう分かつてるでしょ？」

「…………」

H/Iの聞いかけに僕は沈黙した

「私達の命は……」

「分かつてるよ……

ああ……忍に成つてからは死ぬのを覚悟してたのに……なんで……  
なんでこんなに涙がでるのかな？」

「私も……覚悟してた筈なのに……」

「H//---アライ---!---!---!」

三代目……猿飛先生の声がした

「大丈夫か！――！」

何時もの穏やかな感じではなく慌てている

「先生……お願いがあるんです」

「喋るでない！――！」

今医療忍者をよんでも「先生……私達の命はもう持ちません……だから私達の……願いを聞いて下さい」……分かつた……話してみなさい……」

「僕達には……アランつと彌ひ子供がいます」

「でも私達には親戚といつものほは存在しません」

「だからアランには寂しい思いをさせてしまつ……」

「だから……」

「アランを……育てて下さー……」

最後まで言つた後猿飛先生は無言でいたが数秒して口を開いた

「分かつた……」

「ワシが責任を持つて育てる」

「「おつがど」ハ「ヤマ」もす

猿飛先生……僕達（私達）の可愛い息子……アランの事をお願いします」

Sido猿飛

H///とライトはそう笑いながら言ってあの世にいった

ミナトとしょお主達としょ…… 教え子が先に行くなんて…… 黒鹿生徒じゃ……

これにて九尾事件が終わつた  
大量的犠牲を出して……

（現在（Cランク任務に行つた後））

クシナ、ミナ、ア、ライテ……見てあるか？

「…………ありがとうございます…………猿飛先生」

卷之三

ふう ワシも年かのう 懐かしい幻聴が聞こえたわい

三代目は笑いながら椅子に座った

特別編 親（後書き）

リーの服装＆我愛等の容姿のアンケートはまだ募集中です  
どんどん送つて下さい！！！！  
ではまた次回お会いしましょう！－－－－！

一次試験……の前に……（前書き）

アンケートの中間発表！――！

?ゼロ魔のタバサ

?票

?ヒューマのレイ

?票

?一ノードレスのティスク

無票

次にリーの服装の募集はぱんちさんの案でセキレイの結の衣装にしました！――！  
ではまたあとがきてお会いしましょ――！――！

## 一次試験……の前に……

前回のあらすじ……

中忍試験の集合場所のアカトリー301の教室に向かってる途中にか騒ぎをたてる集団と出くわしたアラン達

初めは無視しようとしたがなんやかんやで巻き込まれなんやかんやで天才（笑）と戦いなんやかんやで今に至る

つえ……？ 最後らへん適当？ しかもなにド ポンール風にしてるんだ？ つて？？

……なんやかんやで「いつなつたんだよツツコムなよ……ではなんやかんやで本編スタート……！」

s.i.d.oアラン

前回に引き続き今回もグダグダだね……

つと……また僕は誰に言つてるんだろう？

まあ……良いや

今は黒垣だつたけ？ 彼を倒して301に向かおうと進みだそうとしてる途中だよ

「ちよつと待つて下れこ……！」

……またかい？

僕達はなにか嫌われる事をしたのかな？

そう思いながら後ろを振り向いたら白い着物みたいな服に赤いスカートを履いた元気の良さそうな……つて……

「リー……また君かい？」

s.i.d.o無し

まさかの此処での出番だぜ…………  
さて……と

ため息が出そうになるアラン

「い……いいえ……！」

今回はアランに用事があつたわけではなく……わ……サスケさん……  
！…あなたに勝負を申し込みます！……！」

「つえ……？」

私？」

アランに慌てて弁解？をした後サスケに指を指して勝負を申し込んだ  
当の本人……つまりサスケはまさか自分に振られるとは思つてなか  
つたようで吃驚していた

「な……なんで私に……」

「あなたの噂は知っています

うちは一族の生き残りで天才くノ一……でも私はあなたより強い  
だから今はつきりさせます……努力で天才に勝てるって事を……」

ピクッ

(努力で天才を……)

昔の僕も……いや今でも僕は天才を超えるとしているね……つふ  
ふロック・リー……なかなか面白い子だね)

(天才……確かにサスケは天才だつてばね……今の私では勝てない

……でもそれでも何時かは……）

アランは昔に思い出しナルトは胸の中に火を灯した

「……良いよ  
受けてあげる」

「つちよ…………！」

サスケ速くいかな「直ぐに終わらせるから大丈夫」…………つ

サクラが速く行こうと言おうとしたが言葉を挟んで速く終わらせる  
と言ったサスケ

そんなサスケを見て何も言えなくなつたサクラ

「……では……！  
行きます！……！」

サスケが準備出来たのと同時にそう言って動いた  
“下忍”にしては速い動きで近づいてきた

「木の葉……旋風！……！」

いつの間にかサスケに周り蹴りを決めていたリー（サスケ、ナルト、  
サクラ、クウロにはそう見えた）

（な……なに……いまの……！  
幻覚……それとも何かの忍術?  
ならまだ未完成だけ……“あれ”……やってみようかな?...）

サスケが立ち上がりて目を瞑つた……

数秒してから目を開いたと同時に口を動かし……

「[弓]輪眼……！」

そう言つた

目は赤くなり中心に黒い勾玉が二つ浮かんでいる

（――――！

……此奴も[弓]輪眼を開眼してたのかつ……！――！）

（あれつてば……あの時の……）

（嘘――――！

カカシ先生と一緒に……しかも両目……！――！）

（[弓]輪眼……へえサスケいつの間に開眼したんだろ？）

クウロが悔しそうにしナルトは波の国の人を思い出しふくはただ  
感心？してアランは何時開眼したのかを疑問に思つてた  
(相手の……リーの術が何かを見極める氣だね……でも……あまり  
意味は成さないね)

アランは疑問を捨てて直ぐに分析してそう解釈？した

「それが……ひつは一族に伝わる[弓]輪眼ですか……でも無駄ですよ」

再び動き出したリー

（忍術……？違つ……幻術でもない……なら……め……まさか……！――！

（――――！

「私が使つてるのは忍術も幻術でも無い……ただの体術です」

「う……嘘

あれが……ただの体術？」

絶句しているサスケにそう言つリー

そしてリーの言葉に吃驚したサクラ、ナルト、クウロ  
そしてアランは……

(体術……確かに忍術や幻術に比べれば地味だし実践に使えるまで  
に時間がかかる……でも体術を極めた奴には……例え忍術、幻術が  
使えても負ける場合がある  
特に忍者には体術が必要だよ……ただの体術……されど体術……つ  
て誰かも言つてたしね)

つとこんな事を考えていた

それから……言つたの誰だよ……つと言わせて貰おつか

「サスケさん……！」

「写輪眼を見せて貰つたお礼に私の本気を見せてあげます……！」

今までのスピードよりも更に速く移動してサスケの懷に入つてサス  
ケを上に蹴り上げる

(あれは……

影舞葉……それに……体にある“リミッター”をはずしてゐる……禁  
術八門遁甲……流石にやばいね……一門だけとはいへ今のサスケじ  
やあかわせない……)

s.i.d。サスケ

っく……！……！

全く見えなかつた！……！

「今から見せるのは私の必殺技です  
これで……私は天才を超える！……！」

「つ……！」

私の体にいつの間にかリーの手にあつた包帯が巻かれていく

s.i.d。無し

サスケを包帯で巻いた後両手に力を入れようとした時……どこからともなく風車みたいなクナイ（あれってなんて言うんだろうね？B.Y.作者）がリーの服に刺さりそのまま壁にぶつかつた  
リーが離れた事により包帯が緩みサスケは無事に着地した

「！」のクナイ……もしかして……

ボンッ……！

いきなり煙が上がりそちらを冷や汗だしながら見るリー……そして次回どうなる……！……煙の中には一体誰がいる！？  
それでは……作者の都合上ここまで……！……！

## 一次試験……の前に……（後書き）

更なるアンケート……

それはガイを女性にするかしないかだ（女性にする場合出来ればモ  
デルになるキャラも書いて下さるとありがたい）（期間は次の投稿  
まで……）

皆さんはどうが良い？

つとマーを巨乳（結）にするか貧乳ナシルにするか……

なんなら顔は結だけど胸は……残念に……でも良いですよ（笑）  
では我愛羅も引き続きアンケート中ですのでよろしくお願いします  
アンケート……長い  
あと最後にまだでないキャラでTSしたらってキャラ（出来れ  
ばモテルつきで……）とのキャラはTSしないでってキャラも書  
いて下さるとありがたい

## 青春先生が来たっ！！！！（前書き）

我愛羅の容姿はゼロ魔のタバサに決まりました！！！！  
それからガイはＴＳにしました！！！理由はまあ……男が女をなぐ  
れませんからね…………  
では本編スタートです！！！！

## 青春先生が来たっ……！

最近仕事が増えたナレーショーン…………略してナレーさんだ……つえ？  
銀のネタだろつて？

それは分かつても言わない約束だぞ？

さて……作者が最近イナマイレンツを再びやり出してる……が  
小説の投稿を思い出し無い頭で……無い文才で書き込む物語を楽し  
んできてくれ

……つえ？

てめえクビにするぞ？

……ではでは人気作家の大先生の作品を楽しんできて下さい……！

いや……そこまで凄くないよ……bｙ作者

s.id○無し

さあナレーさんだよ！！

さつき会つたばつかだがそこにも触れないのが約束だぞ？

さてさてアラン達は301に行こうすると必ず乱入者が来るとい  
う……

アラン達一向はいつい前に進めずつてか！……！

はい……すいません……調子に乗つて寒いギャグを言つてすいません

……

さてアラン達を止めたリー……リーはサスケに喧嘩をうつた……！  
リーはサスケに打ち勝つたリー……だが新たに現れた敵……リーは  
うち勝つ事が出来るのか……！

「私……ワクワクしてきました……！」

さあーーー！

地球の命運をかけた戦いが今はじ「つて作品変わつてゐるじゃねえか  
！！！」か…魁斗さん……な…なぜ此処に！…「いいから話を進める脱線せずに！…！」

は…はい！！！

で…では[冗談は此処までにして……前回（本当の）リーに勝負をしかけられたサスケ応答し勝負をしだす

その途中でサスケが未完成の[写輪眼を見せる……がリーの体術に負けてしまう

最後のトドメをさそりとしたリーを一本のクナイが止める

そして煙が現れた……さてさて今回の始まりは其処から始まる

ボフン！…！

「「「「な…なに（なんだ）（つてばね）（こ）？」」「」「」

煙が上がり全員其方を見るリーは冷や汗を出して……

「ま…まさか…ガイ先生！？」

つと叫んでいた

そして煙が晴れてその中から現れたのは……木の葉の額宛をした大きな亀だつた……

「つえ？先生？つえ？え？」

「あり得ないわ……嘘よ……ど」から見ても龜よ……そうだわ……  
あの子が言つた言葉は幻聴だつたんだわ……そりよ……間違いない  
わ……」

「 「 「 「 「 「

ナルトは何が何だか訳が分からずサクラは一所懸命に理解しようと  
してサスケとクウロは無言……ではなく何も言えなく成っていた  
そして我らが主人公……アランはと言つと

（あれは……口寄せ動物……ならリーが言つてた先生はこの龜を口  
寄せした人物かな？）

冷静に龜を観察して答えをだしていた  
そしてリーは凄いスピードで龜に近づいていった

「す……すすすすいませんでした……！」

「リーよ……あの技は禁じられていいだじやねつ？」

龜は土下座勢いで謝るリーに口を開いた

「は……は……」

小さく返事をするリー  
そしてナルト達といえば……

「や……やつぱり……あの龜が先生だつてばね……」

「聞こえてない聞こえてない……あわが先生な筈は無いわ……」

「もひへ……何でも良こや……」

「…………」

ナルトは亀が先生だと思こサクラは何が何でも認めたく無いよひで現実逃避してサスケはもう何でも良こやつて感じに成っていた  
クウロねやはぱり無言だった

「はあ……後はガイに任せるとこよひ……」

「あ……あの……やはぱりガイ先生こ……？」

「当たり前じやれこ……」

「うへ……うへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ................................................................

呆れたよひにけひ亀

リーは呻き声?を出した  
そうしこれど

ボフンシ

亀の横から煙がまたでた……

煙が晴れて現れたのはつり田で長い黒髪を持った女性が現れた

「フー~~~~~」

「が……がガガイ先生~~~~~」

「…………」

リーがピクッと体を震わしてガイを見る  
一方ナルト達は亀が先生じゃなかつたのか……つと言つた感じの顔  
をしていたとかしてなかつたとか……  
そんな中ガイはリーに近づき……

「馬鹿者……！」

「うう……！」

殴つた

リーきれいに吹つ飛ばされた

（（（え…ええええ～～～～！…！…！）））

（……ただ者じやないね……体術だけならカカシより上……少なくとも並みの鍛え方じやないね）

（…………）

ナルト、サスケ、サクラはいきなり殴つた事に驚いて  
クウロは相変わらず無言……ではなく唖然としていた  
そしてアランはガイの実力を冷静に見ていた

吹つ飛ばされたリーはすぐさまガイのもとに戻り土下座をして……

「「J……「J「J「J「Jめんなさい……ガイ先生……！」

「リーよ……！」

あの技を使う」とは禁じた筈だ……」

「で……でも……」

「言い訳は聞かん！！  
罰としてグラウンド100周して来い…………」

「は……はい…………」

リーは物凄いスピードでグラウンドに向かつた  
するとガイがアラン達の方に振り返った

「君達は速く行きなれ…………ん？君達もしかしてカカシの…………」

「……つえ？」

カカシ先生をしつてるんですか（てばね）？」

ガイがアラン達に速く教室？に向かう事を説いたが途中で何かを思  
い出したように言葉を言い出した  
ナルト、サスケ、サクラはカカシの名前が出たことに吃驚して聞き  
返した  
するとガイは笑い出した

「フツフツフ…………知ってるかって…………？私達を知ってる奴は私達の  
事をこう呼ぶ…………」

シュンツ

一瞬で移動してアラン達の後ろに立つた

「永遠の宿敵と…………」  
「ライバル

青春先生が来たっ……！（後書き）

中途半端で終わってしまった……

白の姿はまたまたアンケートしたいと思います  
今は我愛羅の時人気だったレイかぬらりひょんのつらり、ぬ～べ～  
の雪女を考えていますが……

後前回T Sキャラ（モデルも考えて下さるとありがたいです）とT  
Sしてほしくないキャラを書いて下さるありがとうございます！……！

漸く第一次試験！――！（前書き）

漸く……漸く第一次試験が始まります――――――  
では本編どうぞ――――！

## 漸く第一次試験！――

やあみんな

最近出番が増えて披露が増えたナレーさんだよ  
つえ？ そんな事は良いから速く話を始める？

……はあ これだから最近の若者は…… 分かりましたよ始めれば良い  
んでしょう始めれば……

s.i.d.o無し（ナレーさん）

「永遠の宿敵ライバルと」

ガイはそのままつて凄いスピード（アラン以外が見えない速度）で動きでアラン達の後ろに立つた

（は……速い……速さだけならカカシよりも……！――）

（つえ……？  
な……なに？）

（あのカカシとライバルつてのも頷けるわね……）

（み……見えなかつたつてばね……）

『（部後をとらわれるとは……情けないのうナルト）』

（「……うぬやこつてばね――――――）

(へえ……なかなか速いね……多分人間の域なら最速に入る……まあ人間の“域”ならね……)

それぞれガイのスピードに思つてた時に……アランが動いた

「ほら速く行こうよ

これ以上時間食つたら……遅刻で不合格になるよ?」

「「「つえ……？」

あ……うん……」「

「……ああ

アランに続いて4人も続いた時……

アランの口を開いた

「確かに力カシとあんたは速いよ……

でも……」

ビシュン――――

「僕はもつと速い」

新たな異常  
サンライドスピード  
太陽速度

地球から太陽に1秒で行くぐらのスピードを出せる

「――――」

「まあ……君の事も認めてあげるよ

また会おうね……ガイ

ビショーン！――！

「……はあ」

（カカシの奴が言つてたアラン（化け物）…………想像以上だな……）  
ガイはアランが去つた方向をボーつ真剣に見ていた……が急に顔を赤くした

（それに想像以上に格好良かつたわ……  
まさかリーと同じ男を好きになるとは……でも仕方ないわよね……  
あんな笑顔を見たら……）

アランの毒牙にかかつたガイがいた

s.i.d.oアラン

漸く……漸く301まで来れたよ……はあ騒がしい一同&乱入者×  
2 痘病神でも憑いてるのかな……？

真剣マジでそう思えてきたアランだった

ん……？

あの扉の前に居るのは……カカシ？

「やあ

遅かつたわね」

カカシは笑いながらアラン達に近づいてきた

「まあね……」

色々あつたんだよ……うん色々ね……」

「「「うんうん」」（口クコク

「……確かにな」

アランがカカシの疑問に答えたのを聞いて頷く女子3人と腕を組みながら納得するクウロ

そんな5人を見て何が何だか分からぬカカシがいた

「まあ……なんだ

何があつたかはしらないけど……とりあえず一つだけ命令をだしとくわ……」

カカシが真剣な顔をしたのをみてアラン達も真剣に聞く体制に入った  
カカシそんな5人を確認して口を開く

「死ぬな

それが命令よ

守れる奴から……奥に行きなさい」

カカシがそう言つたあと数秒間が空き……誰からか……笑みを出した  
そして……

「「「「そんなの……当たり前だ（よ）（です）（つばね）」」  
「」」

5人一緒に扉を開き中に入つていく

そんな様子を……カカシは微笑みながら眺めていた

(本当に……成長したわね……頑張ってきなさい……)

そしてカカシはどこかに行つた

中に入った途端中にいた忍から田線が来た……

少し殺氣もあるけど……特にあの青髪の……つて我愛羅ちゃんか……  
はあ……戦闘狂も良いけど……少し抑えなよ……

「アラン~~~~~」

そんな時金髪の髪を持つた女性……いのがアランに飛びついた

「うと……このこきなり飛びついたら危ないよ?」

アランはいのを受け止めた後いの方に顔を向けて注意した

「へへへつ……ごめんね?久しぶりにアランにあつたからつい……」

いのは少し笑いながらアランに謝つていた……そんな中ナルトとサスケから殺氣が現れた

「(この……何時までアランに抱きついてるつもり?)」

「(やうだつてばね!……  
いのばつかり羨まし……じゃなくて……アランが困つてるつてばね  
!……)」

「（良いじゃない

あなた達と違つて久しぶりに会つたんだから…………これ位

「（ちえ……仕方ないわね）」

心中（アラン大好きな女子は何故か出来る）で話していた  
話が終わつているのは渋々アランから離れた

「あ…あああなたなにしてるのよ….-.-.」

「…………今度私にも

「あ…アラン君

ひ  
久し  
ぶり  
だね」

「羨ましい……僕も」

「先に越されたわね……でも私にはまだ無理ね／＼／＼」

続々とアランの仲間（大好き軍団）が集まってきた  
因みに上からキバ、ヒナタ、シノ、チョウジ、シカマルです

「久しぶりだね

元気にしてたかい？」

**暴露タイム（本当は）**

アランに会えなくて任務に実が入らなかつた

「……寂しかつたけどアランにあつて元氣に成つた」

**暴露タイム（本当は）**

嘘ついてません

言つたとおりアランに会わなくて元氣（友達で無ければ分からぬいぐら）の反応）が無かつた

「ううん……私は大丈夫だつたよ……アラン君にも会えたしね（ボソッ）」

**暴露タイム（本当は）**

本当は寂しかつたけど昨日偶々アランに会つたため寂しさは薄れている

「僕も……アランに会えなくて寂しかつたかな」

**暴露タイム（本当は）**

これも本当です

つてかこの暴露タイムやる意味ある？？と思ひだした作者

「少し……寂しかつた……かな？／＼／＼／＼」

**暴露タイム（本当は）**

凄く寂しかつたです本当は……

「私も寂しかつた！……」

でもアランに会つて寂しさも吹っ飛んじゃつた！――――

暴露タイム（本当は）

これも本当です

まあ……ぶっちゃけ時稼ぎだなつと思つた読者諸君……正解だそつだ  
因みに上からさつきの順番で最後はいのです  
分かつたかな？

因みにこれらを聞いたアランは……

（やつぱり……

“友達”に会えないのは寂しいんだね……）

つと思つていた

まあ……主人公の重要スキル【鈍感】が発動しただけですね……

何故だらうね……

いま無性にナレーさんにムカついたよ……  
つて……ナレーさんって誰なんだろうね？

「…………あ……アラン（…………アラン（前のあ……が無い））（君）  
は……どうだつた？」「」「」「」

六人がアランに聞いた

「うん？

勿論寂しかつたよ？」

アランは何を当たり前なつて顔で言つた  
六人は一斉に顔を赤くした

因みにアランは“友達”に会えなくてって意味で言つてゐる  
すると……いきなり（と言つても数秒だけ）殺氣が飛んできた後に  
白髪の眼鏡をした女性が近づいてきた

「君達？」

少し静かにした方がいいわよ？」

女性は「コツ」と笑って注意する

「…………君…………誰だい？」

「私は薬師かブト よろしくね？」

「僕は『青葉アラン』だよね」

「な…なんで」

彼女……カブトが名乗つてアランも名乗るつとした時……カブトが先にアランの名前を当てた

変わりにサスケがカブトに聞いた  
カブトはニヤツと笑つて……

「アラン君だけじゃなくて君達の事も知ってるよ

うちはサスケ君、うずまきナルト君、春野サクラ君、秋道チヨウジ  
君、奈良シカマル君、山中の君、油女シノ君、犬塚キバ君、日向  
ヒナタ君……そして……うちはクウロ君

アラン以外が吃驚した表情でカブトを見た  
アランはいつの間にか顔が元に戻つており口を開いた

「なぜ……僕達の事を知ってるんだい？」

「まあ僕は……情報には自信があつてね」

「へえ……すごいね

中忍や上忍ならまだしも下忍に成り立ての僕達の事も知ってるなん  
て

「当たり前だよ

名家だらけだし……それにアラン君は有名だからね……下忍にして  
上忍以上の実力って……」

「ふうん……なら聞くけど……」この中で僕以外に強いのは誰だい？」

「……皆強いよ

でも君以外なら……あの砂の少女かな？」

カブトは我愛羅を見ながら言つた

(だらうね……我愛羅は下忍の中じゃ……いや中忍でも我愛羅に勝  
つのは難しいだらうね)

「後は……うちはの生き残りの一人や日向ヒナタ、日向ネジ……体  
術ならリーチて子が強いわね……」

「へえ……自分の名前は出さないんだね

「まあ……ね……

私は弱いからね」

アランはカブトの“弱いからね”を聞いて意味深い笑みを見せた  
カブトも同様に笑みを見せた  
だけど一瞬にして元の顔に戻り再び口を開いた

「なら……僕を入れたら……どうなるんだい？」

「間違いないく……君がダントツに強いだらうね」

カブトは迷わずそう言った

その言葉にナルト達は「当たり前」って顔してサクラは黙っていた  
クウロは「ふん」つと言つていたが文句は言わなかつた  
そんな中話が聞こえてた（我愛羅、テマリ、カンクロウ、リー（いつの間にか来てた）、テンテン、ネジ以外）の忍が殺氣を出していた  
そんな中……

ドカーン――――

音の忍がアランを殴つた

「……これが最強？　

ありえないね」

何かゴツい大砲みたいなのをつけた男がそう言つた  
まあ……その時何人かの女性から殺氣が飛んできただ  
そして男が元の場所に戻ろうとした時……いつの間にか横に何事も  
無かつたかのようにアランが立つていた

「良かつたね……今の僕は機嫌がいいんだ……今回だけは見逃してあげる……」

アランは少し殺氣をだしながら言った  
音の男は冷や汗を出しながらもつ一度殴りかかるとするが……

ボフンッ

教室の前……黒板の前に煙が現れ……そこから黒い布を纏った男性と何人かの男性が現れた

「静かにしやがれ！――！」

失格にするぞ――――――クソ野郎ども――――――！」

そう言つた瞬間殴りかかっていた手を戻して

「…………」

黙つたまま……しかしアランに対する恐怖を持つたまま元の場所に戻つた

アランもみんなの元に戻つて黒板の方に目線を向けた

「待たせたな中忍選抜第一の試験  
試験管の森乃イビキだ」

こうして第一次試験が始まった

おまけ

「…………」

「どうしたんだ? ドス? ?」

「…………あいつは…………危険だ…………警戒しといて損はない…………」

「ハハツ

安心しろよ俺達は“あの人”に選ばれた人間なんだぜ! ! ! !

「…………はあ

案外苦労人なドスだった

おまけ2

「先生終わりました! ! ! !

「…………」

(ああ…………もう一度アランと会いたいわね…………まさかこれでも力カシとライバルになるとはね…………)

「先生…………?」

リーはガイの顔を見て何かをキャッチしたリー

「ガイ先生! ! ! !

「つ…………

な……なに? リー」

「私…………負けませんから！――！」

「つえ  
?

お...おい...リー?

「じゃあ

私行きますね！！！」

「あ…ああ

案外鋭いリーだつた

おまけ3

(いの……抜け駆け無しからな?)

(何言つてゐるのよシカマル……！)「言つるのは早い者勝ちよ？」

（アハだよ？

チヨウジヤド……)

(あつ……アラン！！！)

(つえ?)

つて速つ！・！・！・！

何時もよつ速く移動してアランに抱きつぶこの

( つぐ ..... - ! - ! )

負けた ..... - ! - ! - ! )

( 何時もより速いって ..... どうなつてんだいのの体 ..... でも羨ましいなあ / / / / )

アランの事に成ると凄いいのだった

おまけ4

( わ ..... 私も何時かアランに ..... )

『 ( その時はワシにも変わつてくれるよなあ ? ) 』

( 分かつてゐつてばね ..... はあ九尾までもアランに ..... でも九尾とは同盟くんだから ..... まだ余裕 ? )

『 ( まあ ..... ワシとお主は一心同体じゃかりのう ..... ) 』

( じやあ ..... 先ずは作戦會議からだつてばね ..... )

作戦名は ..... 【アラン落とし】( 恋愛的意味で ) 【だつてばね ..... ! ）

『 ( さうだのう ..... なうじつしてみれば ..... ) 』

( リハの方が ..... )

『（ツム……ならこいつじゃ！…！…）』

案外仲が良くなっている2人だった

## 漸く第一次試験！――（後書き）

眠い……はあ

TSしたいキャラ（モデルをつけてくれれば嬉しいです）を募集です  
後人気投票中なので其方も宜しくお願ひします

ではもう眠いので寝ます

また次回お会いしましょ……グウ＼＼＼＼＼

第一次試験……内容は……テストー? (前書き)

最近テイルズオブザワールドレーティアントマイソロジー2をもう一度初めからやり始めた作者です  
キャラクターの名前は勿論……アラン……  
どうでもいい?……そうですね……

## 第一次試験……内容は……テスト！？

前回

漸く一次試験まで書けた所で終わった……  
やあみんな毎度毎度現れるように……ってかバラエティーで言う所  
のレギュラーになりかけのナレーサんだよ……  
始めても言つたけど……漸く一次試験に来れたよ……  
作者の魁斗もまさか此処まで長くなるとは思わなかつたらし……  
まあ裏の話は此処までにして……  
本編の始まり始まり！！！！

s.i.d.o無し（ナレーさん）

「俺は一次試験の試験管森乃イビキだ！！！」

先ずは前にある箱からくじを引き引いた数字の場所に座れ……

試験管……イビキがそう言つとみんな立ち上がり前にある箱からくじを引き引いた数字の場所にどんどん座つていく

（……31番ね）

因みに言つとくが数字は適当なじ

（……へえ……まさかの我愛羅の隣ね……）

アランが席に向かつとそこには青髪の少女……我愛羅が居た  
アランは一度我愛羅をみた後自分の席……我愛羅の隣に座つた

（ふふ……我愛羅が殺氣を出しているから（アランに対しても）僕

の右隣の子が震えるよ…… つえ？ 僕…… ？

平気だよ…… たしかに桃地より殺氣は強いけど…… あの蛇（変態）  
よりは弱いからね……）

アランは昔闘つた（殺し合つた）相手の事を思い出していた  
因みに数人の女性が舌打ちしたらしい

さてそんな事もありながら全員が席に着き他の中忍達が確認をして  
イビキの方を見て頷く  
するとイビキも頷いた

そしてイビキが受験者？の方を見て口を開いた

「それでは一次試験の内容を説明する…… 一次試験は…… テストだ  
！……！」

（ト…ててて…… テスト（だつてばね）～～～～！……）

勉強が苦手な奴らが心のなかで叫んだ  
まあイビキ達には聞こえてないから試験は続く  
他の忍達がテストを配つていてるときイビキが口を開いた

「まだ表にするなよ……！」  
では今から重大な事を説明する……  
一度しか説明しねえから良く聞けよ……」

イビキがそう言つた瞬間みんなが真剣な目になり聞く体制に成つた

「第一のルールだ

まずお前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられてる  
筆記試験問題は全部で10問

格1点そして……」の試験は『減点式』となつてゐる

つまり10門中8門正解した場合10点から1点を引く  
つまりどれだけ得点を稼ぐかでは無くどれだけ得点を守れるかに成  
るわけだ

「つまり……！」

問題を10問正解すれば持ち点は10点  
そのままだ

しかし……問題で3問間違えれば持ち点の10点から……3点  
が引かれ7点という持ち点になるわけだ

なので10門間違えると……0なわけだ

「第2のルール……この筆記試験はチーム戦  
つまりは受験申し込みを受け付けた三人一組の（アランとサスケは  
今回第七班ではなく第零班で来てるため5人一組ではなく2人一組  
で計算される）合計点数で合否を判断する  
つまり合計持ち点30点（20点）をどれだけ減らさずに試験を終  
われるかをチーム単位で競つてもらひ

チーム戦と言つた瞬間サクラが机に頭をぶつけた  
そのまま行きよし良く顔を上げて……

「ちよ……ちよっと待つてよ……持ち点減点方式の意味っての  
も分かんないけど……チームの合計点つてどーいう事お……  
！……」

文句を言った

それに対しても伊比キは少しイラツとした顔で……

「うるせえ…………お前らに質問する権利はないんだよ…………これはちやんとした理由がある…………黙つて聞いてろ……」

つと怒鳴った

サクラも納得はしないようだがこれ以上聞いても怒りを買つだけだからか席に弱々しく座つた

「分かつたら肝心の次のルールだ

第3に、試験途中で妙な行為…………つまり

『カணニング及び、それに順ずる行為を行つた』と此処いる監視員たちに見なされた者は…………

その行為『1回につき、持ち点から2点ある減点をさせてもらひ…………

……

「…………」

それを聞いたサクラは何かを思いついた顔をしたそれをみたイビキはニヤリと笑つて…………

「そりだ!!!!!!!!!!つまつこの試験中に持ち点をすつかり吐き出しつて退場してもらつ者も出るだろつ

つまりテストが終わる前に失格者が出すよつこにするためにこいつ言つ仕組みにした訳だ

「無様にカணニングなど行つた者は自滅して行くと心得てもらおつ仮にも中忍を田指す者忍なら…………立派な忍らしくする事だ」

(無様な……ねえ

それに立派な忍らしく……)

アランは何かを考えるよつた顔をした

「そして最後のルール……

この試験終了時までに持ち点を全て失つた者……  
及び、正解数〇だつた者の所属する班は……」

イギキは会場を見渡して……そしてニヤリと笑つて……

「3名全て道連れ不合格とする――――――

ええ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

!――――――――――――――――――――――――

会場全体に悲鳴？みたいな声が響いた……

そんな中……頭の悪い……まあナルトみたいな奴らが……身震いし  
たらしい

「試験時間は一時間――――――――――――――

では……始め――――――

こつじて一次試験が行われた

因みにまだ続くよ?

s.i.d.oアラン

……やつぱり

アランはテストの用紙を開けた瞬間ニヤリと笑った

これは“カンニング”をさせるためのテスト……どれだけ上手く……気づかれずにカンニングするかを……さつきの無様なつて言葉……無様じやないつまりバレないカンニングをするように……立派な忍……つまり忍は“隠れて”こそ忍……そして何よりこの問題……こんな難しい問題……解ける奴は少ないだろうねつまりここで解けない奴は自動的に誰にもバレないカンニングをするわけだね……

アランがこの試験の内容を理解しているなか……イビキは静かに笑っているアランを見ていた

(あの餓鬼……気づいたようだな……)の試験の本当の内容を……ククツ今までも速く気づいた奴は居たが……開始早々気づいた奴はこいつが初めてだな……しかも徐々に分かり始めてる奴も居やがる……今年の下忍は中々優秀のようだな……)

まあ……僕は自力で解くほうも……カンニングする方もどちらもしないよ……つえ?ならどうするつて?

簡単だよ自力で……尚カンニングするんだよ

「……ふう」

答えを得るもの（アンサー－ト－カー）発動

アランが答えを得るもの（アンサー－ト－カー）を発動した場合輪廻眼みたいに成らず青い目が薄くなるだけ

ふう……久しぶりに使ったね……さて……と  
問題を解こうか……

アランはどんどんと問題を解いて行つた

s.i.d.oサスケ

そつ言う事ね……

このテストの本当の狙いは……バレずにカンニングをする事……なら……[写輪眼で相手の動きを真似れば良い]……この中に問題の答を知つてゐる奴が紛れてるかも知れないけど……そいつを探すより……アランの動きを真似た方が速い!!!!!!

[写輪眼!!!!!!]

アラン……凄い……次々と解していく……ってか手が速すぎない?  
もう問8まできてるし……

s.i.d.oサクラ

うう……クウロ君は兎も角ナルトは……  
つく……今はテストに集中しないと……それにしても……このテス  
ト中々難しいわね……はあやつぱりナルトじやあ……

s.i.d.oクウ（サスケと似てるため無し）

s.i.d.oナルト

わ……訳分からぬといつてばね……ど……どいりしよお~~~~~！――

おまけ（没ネタ）

「容姿を〇の〇井にしてくれ…………」

まさかの現実世界のアイドルに……！……！……！  
さすがに続ける気がしないため没

## おまけ（もしもシリーズ）

「行く世界をWORKINGに！-！」

「今日から『ワグナリア』で働く事に成った青葉アランだ……皆仲良くしろよ~~

つあ  
……八千代パフェ」

「はい杏子さん！――！」

あつ……私の名前は轟八千代……よろしくねアラン君」

「八千代まだか〜〜?」

「あ……はこ今行きます……」

「……刀……」

アランがハ千代と名乗る女の……腰に着けてる刀を見ると……

「私は名前種島ポプカラ……！」  
よろしくね！――！」

いきなり声がした

当たりをぐるつと見たが誰も居ないため首を傾げるアラン

「下だよ……下だよ……」

つと瓶の瓶と共に下を見たら小さな女の子がいた

長くなるためとばしまーす

「山田……山田」

「……」

「家出少女……」（ボソッ

「山田は家出少女ではあります……」

またまた長くなるためとばしまーす

「君達……騒がしいよ？」

店内で暴れるなんて……僕にかみ殺されたいの？」

山田をナンパしていた男達に殺氣を出しながらトンファーを向けた  
すると.....

「スリーブ！」

男達は慌てて逃げていった

アランは何を無かごたぬに帰ルハビするか

「あ…あの…！」

山田の声で止まり山田の方に顔を向いた

「なに?」

「た…助けてくれて…あ…ありがとうございます！」

「……どういたしまして」

アランは少し笑つてから仕事戻つた

速い心臓音をさせて……

「あ……アラン君……」

その……身長小さな子は……わ……嫌い？／＼＼＼＼＼

一  
?

なんだい？ いきなり

「い…良いから答えて…!!」

「？」

別に気にしないよ?」

「そ……そつなんだ……」

「じゃあ僕は行くね?」

「う……うん

また……明日」

「じゃあね」

アランはそう言ってお店から出た……アランがいなく成った場所にはホツとしているポプラが居たとか……

……なんだこれ?

書いた後にそう思った作者だった……

## 第一次試験……内容は……テスト！？（後書き）

さて……最近感想が無くて悲しい作者です

今回はおまけでWORKING！！を書いてみました……

だけどアニメを一回（一話から最終回までリアルタイムで）見ただけでは……無理だ……

あと最後に感想下さい！！！それが作者の力になるから――――――！

一次試験終了！――（前書き）

フニョ様

ヤンデレって何かいいよね！様  
感想を下さつてありがとうございます！――  
では本編の始まり！！――

一次試験終了……

あらすじ……

中忍試験一次試験の内容は……まさかのテスト!!!!!!  
様々なルールがあり（分からない方は前回の話を又はNARUTOの漫画、アニメを見るか検索してくれ）ながらも一次試験が開始したアランはいち早く試験の“内容”を理解したがカンニングをしないでかつ真面目に解くわけではなく答えを得るもの（アンサートークー）で問題を解いていきサスケは写輪眼でアランの動きを真似クウォロは受験者に混じってる試験管を見つけてサスケと同じように写輪眼で動きを真似た

サクラは試験の内容を理解しないで地道に自分で解いていつてナルトは……まあなんだ……そんな感じで進んでいったさて今回そんな所から始まるぜ!!!!

s.i.d.oアラン

サスケも気づいたようだね……あと……我愛羅も……砂の田で見てるよつだし……ん?……10門田は試験終了後に出す?……へえ……まだ何があるんだ……ふふ中々面白いね……

s.i.d.oナルト

わ……分からないつてばね～～～!!!!!!  
こ……こ……こうなつたら分かる所から解くしか……

一問目……

一問目……

問目

四問

五問目

六問目

七問用

八問

大問目

卷之三

俺なんかでてはね!!!!この難しい問題は!!!!

「うなーたら、カンパニーハシロハ――  
なんだつてばね――

いきなりクナイが飛んできて後ろの壁に刺さった

裾事刺さつていた

56番、45番、68番五回カシーニングをしたため失格！！！！

!

クナイを投げた1人の試験管がそう言った

ダラダラ、

や… やつぱりカンニンングは駄目だつてばね…

…試験の“内容”を知らず知らずのうちにしようとしたがカンニンングがバレて失格した奴を見て止めたナルトだった

「…」うなつたら… まだ明らかに成つてない十問目に賭けるしか無いつてばね… ！…！

『（大丈夫かのう……）』

まだ分からぬ十問目に賭けたナルトを見て呆れ目でナルトを見ていたナルト  
そして九尾の事を完全に忘れていたナルトだった…

s.i.d.oサスケ

もつ… 終わつた…

は…速すぎだよ… アラン… はあ… 速すぎで手が痛いよ…

手首を動かしながらため息を吐くサスケ

それにしても…

瞑つていた目を開いてテストを覗んだ（写輪眼は解いています）

十問目は終わつた後… また… 何かあるね… 必ず… はあ

アランと同じでまた何があると睨んだサスケ  
しかしあランと違つてめんぐくさそうだが……

Sido サクラ

ふう……漸く終わつた（アランが終わつた約25分後）

# はあ.....最悪.....

それにしても……この十問目……また何かあるのかしら？……はあ……何かナルト解けなくて十問目に賭けてる気がするわね……

案外勘が鋭かつたサクラだつた

.....

無し（ナレさん）

なんやかんやありながら……一時間後……

時間切れだ！！！

餓鬼共鉛筆を机に置け!!!!!!

イビキの声が響いたと同時に全員（受験者）は鉛筆を机に置いた

イビキが十問目を出す前に確認を取るつて言つた事に対して全員（受験者）達は頭に？マークを浮かべた

「十問目を受けて答えられなかつたら……中忍試験失格だ！！！！！  
そして……！一度と中忍試験を受けられない！！！！！」

Γ Γ Γ Γ Γ Γ .....

イビキの言葉に全員絶句した顔を浮かべた

—イヤな奴は今すぐ棄権しろ！！！！

但し棄権した奴の所屬の班も失格にする!!!!!!

.....

イビキが言い終わつた後、続々棄権していく。

（なる程ね……）  
そう来たわけ  
でも

バンツ！！！

いきなりそんな音がして全員そちらを見るとナルトが机に手を当てていた

「そんなの……受けるに決まってるばね……」

( ううにナルトが居なければ……もつと上手くにつたかもね…… )

アランがナルトを見ながら一ヤリと笑つた

「……良いのか？」

此処で失格に成つたら一生中忍には成れな「それなら……それまでだよ」……つ……！」

「あ……アラン」

アランはイビキの言葉を最後まで言わさずに不適な笑みと共にそう言った

「それに……此処まで来て逃げる気なんて無いよ  
それに……中忍試験に受けられな」ように成つたら火影でも他の忍  
でも倒して認めさせれば良いんだよ」

アランがそう言つた瞬間他の忍達も決意した顔をした

「本当に……良いのか？」

「真っ直ぐ自分の言葉を曲げない……それが僕（私）のルール（忍道）だよ（だつてばね）……！」

s.i.d.oサスケ

つふふ……

アランとナルトの言葉によつて諦めてたみんなが……受ける覚悟を  
した  
あの2人……特にアランは人を惹きつける力がある……だからみんな  
アランを頼つて惚れる……  
そして私も……

s.i.d.o無し（ナレーさん）

「……………くククつ

良いだろ？…………第十問田を出す…………良いな？」

全員頷いた

「じゃあ…………言ひついで…………△格だ」

…………

「……………つえ？」「……………」

「だから…………一次試験合格だ」

「……………えつ…………ええ……………………！」

「…………」

「えつと…………ビヒ言ひついでですか？」

皆の意見をテマリが聞く

「忍とは大事な2択を迫られる時が来る…………その時選択をして進め  
るか…………それが十問目だ  
お前等は覚悟を持つて“進む”と言ひ選択をした…………だから…………△  
格だ！――！」

バリイン――――

その時窓ガラスが割れて1人の女性が入ってきた

「一次試験合格おめでとう――――私が一次試験の試験管…………みた

ମୁଦ୍ରାକାରୀ

シーン

二次試験の試験管の登場にシーンとする受験生たち  
そんなの関係なし」と言つた感じで残つた人数を数えるアンコ

「わよつトイビキ……」

「今日は優秀な奴が多くてな……」

「おもてなし」

貴様ら私に着いて来い！！！」

受験生たちはみんなアンロの言葉に従つて教室から出て行った

Sidoibishi

皆が去了った教室にイビキがテストを回収していた

ルール…………そして忍道か…………ククツ…………今年は面白い奴が入つてき

うずまきナルト…………そして青葉アラン…………つふ…………あいつ等ならも  
しかしたら…………

一次試験終了……（後書き）

はあ……なんかグダグダだなあ……はあ

これからもどんどん感想を下さい……お願いします……！

あと今回はおまけはありませんでしたがまた次回おまけを書くと思  
います……ではまた次回お会いしましょう……！

一次試験は……（前書き）

ヤンデレって何かいいよね！様

西木さんの大貝様

CVK様

感想ありがとうございます！！！！！

## 一次試験は……

前回のあらすじ

なんやかんやありながらも中忍試験一次試験を突破したアラン達  
その場に突如現れた女性……みたらしアンコー……！  
彼女は一次試験の試験管だつた……！！

彼女の言葉に従つてついていく受験生たち……わざわざいぶつななるこ  
とやら……つえ？なんやかんやつて何だつて？  
なんやかんやは……なんやかんやだ……！……！

s.i.d.eアラン

試験管の……アンコ？だつけ？……について歩く  
すると何時も封鎖されてる森の前で止まつた

……「」の森の名前つて何だつたけ？

「此処が第一の試験会場であり……中には猛毒を持った生き物がい  
る……だから封鎖されてる……それがこの森……死の森よ……！」

この言葉に数人が怯えだしているなか……

ああ……そうだつたそつだつた……そんな名前だつたね……懐かし  
いなあ……昔良くてたよ（修行で）

1人だけ違つ事を考えていた……勿論アランな訳ですが……

そんな中怯えてるみんなみて楽しそうにするアンコ

S……だね

アンコを見てそう思つたアランだつた……因みに作者はMかSかと聞かれたらSらしい  
叩かれる等の趣味はないつと言つていた  
アランも……Sだらとも言つていたぞ

それより……何だらうね……懐かしい臭いと氣配がするよ……これは  
はん……？

あいつ……サスケとクウロ見てる?  
…………しかもあの氣配……まさか……ね

「ふふ……

君は怯えないのね……中には沢山の猛毒を持つてゐる生き物が居るのに……」

「別に……『それぐらいい』で怖がる必要は僕には無いだけだよ」

アランはアンコに話しながらも一応先ほどの男の氣配を警戒していた

「へえ……ちよつと君に興味を持ったわ」

その瞬間アンコがアラン田掛けてクナイを投げた

チャンス……だね

ビューン……!

いきなり吹いた風よりクナイはアランではなく違う男に向かつた……

パシツ

男は来たクナイを掴んだ

アランは注意深く男に意識を持つて行っていた

次の瞬間男がアンコに近づき何故か舌で巻いてクナイを返した

アンコは男に微笑み（殺氣付き）クナイを受け取った

男はそのまま元の場所に戻った

……やつぱり……

君だったんだね……“蛇”君

s i d e 無し（ナレーさん）

アランが男の正体？に気づいたあと視線をアンコに戻した  
アンコもクナイを直して説明の続きをした

「第一の試験は……巻物合戦よーーー！」

受験生（我愛等以外）の皆は巻物合戦？とこいつ顔をした

「ルールは簡単よ

これから天の書又は地の書どちらかを一つ一班に渡すわ  
それを2つ持つて塔に持つてくること

期間は……5日間よーーー！」

女性の何人かが5日間森の中に居るのに風呂が……などと喚いていた

「それじゃあ……第一試験開始！……の前に」

ド「ンッ……！

息巻いていた所でそんな事を言つたアンコに咄（我愛等、アラン、シノ以外）はずつこけた

（（（（（なんで開始つて言つたんだ（つてばね）（のよ）（よ）  
）））））

アランと我愛等以外の全員の心があつた瞬間だつた……  
まあアンコはそんな事関係ないみたいな顔で話を進める

「IJの紙に各自名前を書いて貰つわ……！」

皆が皆（我愛等、アラン、シノ以外）なんで普通の紙に名前を？みたいな顔をした

アンコは不適にニヤリと笑い説明をした

「この紙はただの紙じゃないわよ

これは同意書……つまり死にかけても私達は助けないし死んでもそれは死んだ奴が悪い……って成るわけ……まあ私達も一々死人が出て責任追いたくないわけ……だから受けたい者は同意書に名前を書いて頂戴……！」

みんなはアンコの言葉に従つて名前を書きそれぞれ巻物を貰つていった

「あつ……アラン……！  
どつちの巻物貰つたの？」

サスケがアランにそう聞くとアランは顔を近づけて耳元で……

「天の書だ……」

つと言つた

サスケはその行動に顔を赤くしていた

「あ……アラン……ち……近いよ……」／＼／＼

「じめんね

でもさすがにこんな多くの敵が居る前じゃあ言えないと

アランの言葉に確かにittと思つたサスケ

因みにアランとサスケのやり取りを見て何名かの女性が殺氣を出していたとかいなかつたとか……

「さて……

受験生のみんなに試験管としての命令を叫うわ

アンコロはやうにみんなの顔を見ていま……見終わつた瞬間口を開いた……

「死ぬな……！

以上だ……！」

「当たり前だよ（おひつ）（ああ）（了解）（分かりました）……」

あつちこいつから様々な声が響いた

そしてそれぞの班が用意された扉の前に立つた

そして……

「これより第一試験を開始する……。  
それでは……始め……！」

中忍試験第一試験が開始した

おまけ（ボッネタ＆18禁）

「ねえ試験管」

「なに？」

アランがアンコの田の前まできてアンコを呼ぶ  
アンコは首を傾げながら何かよつかを聞いた  
アランはアンコをジッと見つめて……

「僕と結婚しない？」

「……っえ……」

そう言つた瞬間みんなが固まる  
そして肝心のアンコは……

「え……あ……ひ……うん……え?  
な……なに」

パニックに成っていた

そしてアランはアンコが「うん」と言つたのを聞いた途端アンコ  
の腰に手を回して

チユツ

「んつ……」

唇を奪つた

唇を離してそのまま女の大事な場所に手をおへり

クチュクチュ

「んつ……うんつ」

「キスだけでもうグチョグチョだね……

」「いやあ恥ずかしそうだから森でやれりうが?」

「…………／＼／＼」（口くつ

「」アランはアン口を美味しく頂いて幸せに暮らしたとわ

何名かの女性（ナルト達ね）から苦情が来たためボツに……  
作者も書いてから後悔したらしい……

おまけ（ボツネタ＆18禁）

第一試験開始後……

「サスケ……」

「なに?」

「あら……つ……」

チユツ

「んつ……ブハツ

あ……アラン……なに?突然……」

「僕は悪くないよ

可愛いサスケが悪いんだよ……」

「か……可愛い……／＼／＼／＼／＼」

「そんなサスケと2人つきりなんて……耐えられないよ……  
だから速いけど……今からやらない?それとも僕じや嫌かな?」

「…………／＼／＼／＼／＼」(フルフル)

サスケは首を横に振った

アランは少し微笑み女の大事な場所に手を入れた

グチョグチョグチョグチョグチョグチョ

「あつ……うんつ……あんつ……は……激しい……よお……  
!!

あ……アランつ……も……もつちゅつと……ゆ……ゆつ……ああんつ……!!

アランは激しく動かしていた手を止めてあそこから手を出して手に付いてるものを見めた

「いつたね……

じゃあ続き……しようか……」

アランはゆっくりサスケから衣装を脱がしていく

「は…恥ずかしいよお…」

「可愛いよ

גַּעֲמָנִים

「もうグチョグチョだから入れても良いよね？」

ううん、アテンの好き」として

ゲチュ……ズンツ！！

卷之四

入れた瞬間目を瞑るサスケ

「大丈夫かい？」

תְּהִלָּה

「じゃあ……動くよ?」

卷之二

「...」

僕…………もいきそつ…………」

「じ...じやあ

一  
緒  
：二

「ウニカ...」

לען ען ען – – – !

「…………っはあ

サスケは裸のまま地面に寝た

「じやあ

「かみひや」回一

「つえ?

「あ……やつたばっかし……つて……あ……アハハ……そりやせね……お  
尻だよ……！……つえ？ サスケはお尻も可愛い？……わ……分かつたよ……お  
尻でも……いいよ？／＼／＼／＼」

だから！！！！

何故一いつなる！！！！

末期なのかな? つと考へた作者だつた……

因みにおまけは本編には影響ありません

## 一次試験は……（後書き）

今回の反省

あとがきで血迷つた事

以上！――――！

では次回もお楽しみに

バイバイ！――――！

P.S、感想まつてまーす！――――（できるだけ優しいの……）

誤字があつたため修正しました

死の森（前書き）

CVK様

ヤンデレって何かいいよね！様  
リョウ・マーズ様

感想ありがとうございます！！！！！

## 死の森

前回のあらすじ

おまけで作者が血迷つた……以上――――――

sideアラン

れで…と

とりあえず近くに“蛇”はいないね……

「ねえ

サスケ」

「ん……?

なにアラン?」

アランが後ろに付いてきているサスケの方を振り向いて話し出した  
サスケは小首を傾げた

「近くに敵が居るから倒してくるよ……敵かも知れないからね  
だから念のために天の書持つててよ」

「え…?

あ……うん分かった」

アランはサスケに天の書を渡して瞬進の術を使ってどこかにいった

「はあ……

いきなり離れ離れかあ……でもこれから5日間アランっとボンツー／＼／＼

サスケはこれから約5日間を想像（と言ひぬの妄想）をして顔を赤らめていた

「……見つけた」

アランの前方に受験生（と言ひぬのモブ）がいた  
アランはスタッフと木の上から降りてモブにゆっくり近づく

「な……なんだ！？  
お前！－！－！－！」

勿論ゆっくり近づいたためモブ達はアランに気づく

「ねえ

君達……巻物をくれない？

くれたら特別にかみ殺さないであげる」

「ふ……ふざけるなつ－－  
誰が渡すか！－－！」

モブの1人がアランにそう言った

残りの2人も「そうだ！－－そうだ！－－！」とモブに賛成していた

「うう……

なら力づくで貢うよ－－－－－

瞬進の術……ではなく体術の一つ。縮地を使って相手に近づいた

「は……速い……つ……！」

「速い……？」

まだ縮地まで三歩前だよ？……まあ別に興味ないけど……ね

獅子皇……」

トップスピードのまま勢いよく右足で相手を蹴った

相手はそのまま空中に浮かび飛ばされる

そしてアランが再び縮地を使い蹴り飛ばした相手に追いつき（まだ跳ばされ中）そして追い抜いた瞬間後ろに思いつき蹴りをいた

「連脚！……！」

相手はそのまま大きな木にぶつかり何本かの木を倒して漸く止まった

「次は……君達だね」

「ま……まつてく「遅いよつ……獅子王……拳連……！」

縮地で残りの2人の間に立ち一人を殴りそのまま右足を軸にして回りながら裏拳を決めた

「さて……と

じゃあ巻物は貰うよ……」

相手から巻物を奪つて見るアラン

巻物に書いてあつた文字は……地の書だった

「ふう……

案外簡単に終われたね……後はゆっくり塔を田舎そつか……」

アランがそう言つとその場から消えた……

その頃ナルト達は蛇野郎と戦っていた

side無し（ナレーさん（ナルト達））

「何してゐつてばね！？」

クウロ！……！」

ナルトがクウロに対して怒鳴つていた

「それはこっちの台詞だ馬鹿ナルト！……！  
俺達じやあ彼奴には叶わないんだよ！……！  
だったら大人しく巻物渡すしかねえだろうが！……！」

「馬鹿はお前だつてばね！……！

こいつに巻物を渡して助かるなんて保証……どこにあるつてばね！……！」

「つ……！」

ナルトの言葉に何かに気づいたクウロ

「フフフ……

ナルト君の言うとつりよ……クウロ君……例え巻物を貰つたとして  
も……君達は殺すわ」「

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

クウロが悔しそうに地面を殴った

アランなり

-  
?

恐怖で可笑しくなつたの？」

いきなり笑い出したナルトを不振に思つた蛇野郎  
ナルトは蛇野郎をジツと見つめ……

「お前なんて私一人で充分だつてばね！……！」

「え」

詰つわね……なら……あなたから殺してあげる……」「

(九尾)

行くつてばね！（）

『うむ！！

行け！！ナルト！！！！』

ナルトの目が赤くなつたと同時に蛇野郎とぶつかつた

Sideアラン

ん……？

ナルトのチャクラが……落ち着いてきた……？  
それにクウロのチャ克拉が可笑しい……

その頃アランはサスケと合流して気長に塔を目指していた

それに……」のチャクラ……

「サスケ……

僕が合図だしたら君は全力で塔を目指して  
塔についたら待つて……僕も直ぐに行くから

「つえ……？」

「どうい、『良いね？』『う、うん……』

サスケが意味分からないうつて顔をするがアランの迫力に負けて頷いた

「……今……！」

アランが合図したと同時にサスケは動いた

それと同時にサスケに向かつた人影が出てきた

アランはそいつに周り蹴りを食らわした

人影はそのままぶつ飛ばされ人影が飛ばされた場所に穴ができるて砂  
がたつた

アランは木の上に立つてその様子をみていた

「あ……あら「サスケ！！僕は良いから速く行く……！」……「うん

アラン……『氣をつけてね』

サスケがそう言つてから塔に向かつて全速力で走つていった

アランはそれを笑顔をで見送つた後殺氣をだしながら煙の方を振り向いた

「出できたらどうだい？」

“大蛇丸”

強い風がふき……現れたのは……先程までナルト達と戦つていたが

蛇野郎……

木の葉の伝説の三人の一人……大蛇丸が現れた

「フフフ……

久しぶりの再開だと言うのに……その殺氣は無いんじやない？  
アラン……いいえ……白い死神……つと呼んだ方が良いかしら？」

「久しぶり……ねえ

残念ながら僕は君には会いたく無かつたよ……実践修行を初めて最初の相手（影分身の一人）が君だつてだけでトラウマものだよ……それから……ここでその二つを言わないでくれる」

最後の部分で更に殺氣を強くするアラン

「……これは……やばいわね

あの時より……強く成つてるわね」

「当たり前だよ……

あの時から約9年たつてるしね……  
僕はあの時みたいに逃げはしないよ？  
今回は君が逃げる番だ」

「フフフ……

「私も逃げ出した……それでも凄いのよ？」

大蛇丸も殺意を出しながらアランを睨む  
大蛇丸は口から一本の刀を取り出した

- フフフ -

これは草薙の劍……生半可な武器では防げないわよ？」

挑発しながら草薙の剣を構えた

いた  
そして素早く印を結び……

「口寄せ……“天叢雲剣”」

一本の細い片手剣を取り出した

「へえ……なかなか良い剣を持つてるわね……」

「御託はいいよ……こないなら……僕から行くよ！――！」

縮地を発動して大蛇丸に接近して……

「虎牙破斬！！！」

切り上げ、切り下ろしの一<sup>二</sup>段攻撃をしかけた（詳しくはテイルズで天叢雲剣もテイルズオブザワールドレディアントマイソロジー2の

武器です)

「つく……！……！」

やるわね……」

大蛇丸も負けずに切りかかるが縮地を使い避けられた  
少し間が開いた瞬間アランは天叢雲剣を天高く持ち上げ……振り抜  
いた

「魔神剣！！！！！」

「つく……！……！」

天叢雲剣で発生した衝撃波で大蛇丸を攻撃した

「確かに……今のは危なかつたわ  
でも……まだま……つ！！！！！」

「今のは囮……

本命はこっちだよ！……！」

アランの両手に風が集まり（半径30m）  
雷が発生する

「風遁・風雷切り！……！」

バチチチチチチつ！……！」

そんな音と共にアランはそれを大蛇丸目掛けて投げた

大蛇丸は音は聞こえるが何があるのか分からぬのか……直で受けた  
そして風遁・風雷切りで煙がたつた

数分すると煙が晴れ現れたのは……直径約30mの大きさのでつか

い穴が削られていた

アランその穴をジッと見つめて……ため息を吐いた

「はあ……逃がしたか……

仕方ないね……サスケを追うとしようか……」

アランは塔に向かつて走り出でた……とあると

「キャアアア……！」

つと囁う女の声が聞こえたため其方に向かつた

s i d e ? ? ?

私の名前は香燐

草隠れの忍

今は中忍試験で木の葉にやつてきた

一次試験はテスト……内容は誰にもバレずにカணニングをする事  
最後の十問目は受けるか受けないかの2択問題だった……正直私も  
手をあげかけた時……金髪の少女が先にあげかけ……そのまま机を  
叩いた

その後は銀髪の男（なかなか良い男だった／＼／＼）と金髪の少女  
の言葉で私の……ううん

みんなの気持ちが決まりそれで合格

そして第二次試験……巻物合戦の途中で大きな熊に教われた  
みんな（チームメイト）と逃げようとした時……足を怪我してしま  
い転げてしまった

みんな（チームメイト）に助けを求めた（悲鳴ね）けど……みんなは私をほって逃げた……

ああ……私……死ぬんだ……

覚悟を決めて私は目をつぶつた……その瞬間

「獅子王連脚！！！！！」

ドゴンッ

その声と共に大きな音がした

私は勇気を出して目を開けると……今まで近くにいた大きな熊が遠くの木に倒れていて……変わりに私の前に銀髪の王子様がいた

s.i.d eアラン

悲鳴がした所に来ると足を怪我した少女と熊がいた  
僕は熊に近づき（縮地で）獅子王連脚を食らわした  
倒れた事を確認してから僕は振り向いた

「大丈夫かい？」

僕がそう訪ねると……

「…………」

何も喋らずにじーっと僕を見ている

「ん……？」

僕の顔に何かついてるかい?「

「……うえ?

あ……いえ……何も付いてません!――――――――――

顔を赤らめて大声でそう言つてきた彼女に吃驚した後……

「アハハハ」

笑つた

ああ……面白いね彼女

s i d e 香燐

私は助けてくれた彼に釘付けに成つていた  
だから彼の声も聞こえなかつた

「……うえ?

あ……いえ……何も付いてません!――――――――――

な……何してるの私!!!!

うう……絶対変な子だと思われた……

「アハハハ」

すると彼は突然笑い出した

ああ

やつぱり変な子だと思われた……でも……笑つてゐる姿も格好いい……

――――――

「僕の名前は青葉アラン……君は？」

「つ、え……？」

あ……わ……私の名前は香燐です  
かおりのかにとなりつてかいて香燐からんです」

彼……青葉アランと自己紹介をした後先程とは違つて落ち着いた感じで笑つて……

「名前“も”可愛いね  
気に入つたよ  
僕の友達に成らない？」

そう言つた

私はその言葉を聞いて顔を今まで一番赤らめた／＼／＼  
するいよね／＼／＼  
あんな格好いい笑顔であんな事……／＼／＼  
「ううん／＼／＼  
私で良かつたら……／＼／＼

「フフフ

じゃあよろしくね香燐」

……でもアラン……

私“友達”だけで終わる氣は無いからね……

おまけ（ボツネタ）

「久しづ「万華鏡写輪眼！……月読！……つえ？……うわ

ああ……「

……まあ流石にね

ギャグ小説じゃいしね……

つてのが作者のコメント

おまけ（もしも「うきよたの世界」に転生したら）

「NARUTOのせか「残念だが行く世界は決まってるんだ」なんだって……」

「君かい？」

泉こなたつてのは

「？」

「うだけど……君だれ？」

「このなぢやさんの知り合いじゃないの？」

「つちよ……！……

2人供知らないの……！……

テストは勉強しなくても100点

運動はプロ以上

何をやらしても完璧な風紀委員長兼生徒会長の青葉アラン……つて有名じやない！……」

「へえ……

そんな有名人が私に何のよう?

ああ！！！分かった！！！！

告白しに来たんでしょう！！！！

私いつの間にフラ「悪いけど違うよ」ちえ……なら何?

「先生が君のグータラさと成績について相談されてね  
暫く僕が君を監視する事になつたんだよ」

「なつ…………！」

「なんで私だけ…………！」

それならうつかさ「安心しなよ…………終つかさも一緒に監視する事に成  
つたからね」

「そ……そなんあ…………」

……案外続けられそうな気がする  
まあ気だけだが……by 作者

## 死の森（後書き）

今回は18禁はなし！！！

期待してたのに……？

知らん！！！！

そんな毎回毎回18禁話を考えられるわけないだろー！！！！

それでは感想を待つてます

次回もみないとかみ殺すよ？（久しぶりに言つて（書いて）みた）

第三回 忘記試験……の予選――――（前書き）

リコウ・マーズ様

CVK様

ヤンデレって何かいいよね！様

感想ありがとうございます！！！！

## 第三回 忍試験……の予選――――

前回のあらすじ

蛇野郎とアランが戦つた――――

作者がおまけでネタに走つた――――

side無し（ナレーさん）

色々な事がありながらも塔についたアランは早速サスケを探した

「アラン―――！」

サスケを探していると突然後ろから声がしたのでアランは顔だけを後ろに向けた

「ん？」

「サスケ……悪いね待たせて」

振り向いて探していたサスケだったと分かつたので待たせた事を謝ったアラン

「べ……別に構わないよ……ってそういうじゃなくて――――」

大丈夫だったの？

「うん

僕は平氣だったよ

サスケはアランの答えを聞いてホッとした顔をした

「じゃあ  
行こうか?」

「うん!――!――!

アランとサスケは塔の扉を開いた……  
塔の中は何もなくあるのはどこかに続く扉と文字が欠けてる掛け軸  
だけだった

「あ……あれ?  
何も……ない?」

「……ふう……

そつ言う事ね……」

アランは呆れる様にため息を吐く

「サスケ

天と地の書を開けて

「で……でも

開けたら駄目だつて……」

「はあ……良いかい

あの掛け軸に書いてる

『天』無くば智を識り機に備え  
『地』無くば野を駆け利を求める

天地双書を開かば危道は正道に帰す　これ即ち『』の極意……

…導く者なり

三代目火影

つて書かれてるね」

「う…うん……」

アランの質問に頷くサスケ

そんなサスケを見て説明を続けるアラン

「まずは最初の

『天』無くば智を識り機に備え  
『地』無くば野を駆け利を求める

は天と地の書のこと

そして次の

天地双書を開かば危道は正道に帰す　これ即ち『』の極意……  
…導く者なり

は天と地の書を開けつて事を言つてる」

「…あつ…！」

本当だ！…アランつてば凄い…凄いよ…

「…」

サスケは興奮したようにアランに言つ  
アランも笑いながらサスケの頭を撫でて

「ありがとうサスケ

でも今は先に天と地の書を開けようね？」

「うーうん……／＼／＼／＼

そう言った

アランの言葉にサスケは騒いだ恥ずかしさと撫でだれた嬉しさ&恥ずかしさで顔を真っ赤にする

（はあ……

それにしても……「りすぎじやない……？  
まあこれぐらいやらなきや駄目なんだろうけど……  
やつぱり中忍試験も面白いね……」）

アランがそんな事考えていた中  
天と地の書をサスケが開いた  
開いた瞬間煙がたつて……1人の人影が現れた  
人影の体格はサスケより少し小さい  
どんどん煙が晴れてきて白い髪に少し水色が入った長髪をしている  
女性が現れた

「つえ……？」

サスケはその女性を見て吃驚している

「み…ミズキ先生ー？」

サスケが叫んだのと同時に煙が完全に晴れていた

「久しぶりだね

ミズキ」

「そ……そうですね／＼／＼

あ……あのアラン君は……その……元気でしたか？／＼／＼

ミズキはアランにそう訪ねる……顔を真っ赤にさせて

「僕は元気だつたよ

ミズキはどうなんだい？」

「アラン君に会えなくて寂しかったです……／＼／＼

少し俯き小声でそう言つたミズキ

「？」

何て言つたんだい？」

アランは聞こえなかつたのかそうミズキに訪ねた

「つえ……？／＼／＼／

あ……あの……／＼／＼／

げ……元気だったと……言つたのです……／＼／＼／

ミズキは慌ててそう言つた

……どうやらあの台詞は恥ずかしかつたらしい

「それで……君が僕達2人の監視……だつたんだね……」

「――――――

……やつぱり……氣づいていたんですね……」

吃驚した顔をした後納得したような顔をしたミズキ

「つえ……？

どうこいつ事……？」

吃驚した顔から元に戻ったサスケはアランが言つた事について聞いた  
「私はあなた達が不正をしないためにあなた達を監視してたんですよ」

「つまり……ね

僕達がもし途中で巻物を開けてたらミズキ先生が現れて氣絶させる  
……と言つ事だよ」

ミズキが説明したがまだ頭の上にマークを浮かべたサスケにアランが分かりやすく説明した  
そこで漸く納得したサスケ

「じゃあ

僕達は合格で……良いんだよね？」

「ええ

第零班……第一次試験合格です――――――

これを聞いたサスケが緊張が解けたのか息を吐きながら壁に背を任せて休憩する

其処で何かを思い出したサスケが口を開く

「あの  
ミズキ先生」

「？」

なんですか？」

サスケは壁にかけてる掛け軸を指をさす

「あれって……

どう言う意味なんですか？」

文字が欠けてるし……」

「ああ

あれですね……あれは火影様が記した中忍の心得です」

「心得……」

サスケは意味が分からなって言つ顔をする

ミズキはそんなサスケを見て笑みを見せながら説明を続ける

「この掛け軸に書かれてる“天”と“地”……  
これは人の体を指してます」

「体？」

「そうです

天とは人間の知を……

地とは人間の体を指してます」

ミズキの言葉に真剣に聞くアランとサスケ  
ミズキは間を少し開けて……言葉を繋ぐ

「『天無くば智を識り機に備え』あれはですね  
簡単に言えば自分の弱点が頭脳にあるなら……『様々な理を学び、  
任務に備えなさい』って事を言つてるんです  
そして『地無くば野を駆け利を求める』自分の弱点が体力にあるの  
なら……『日々鍛錬を怠らないようにしなければなりませんよ』  
と言つ意味なんです」

「 「 …… 」

（ふふ……爺さんも……なかなか良いことを言つね……）

（へえ……火影様本当に凄い方なんだ……）

アランは改めて火影の凄さをサスケは火影の凄さをみた

「そして「天と地を両方兼ね備えれば……どんな困難な任務でも……  
安全に任務をこなせる……だね？」……相変わらず凄い推理力で  
すね……そうです  
そして……それが中忍だと言つ事です」

中忍に成る覚悟を……中忍の凄さを……改めて分かり覚悟を燃やした

僕達は行くよ……その中忍に成るために……ね

「じゃあ

アランがそう言つて奥に行つた  
サスケもそれについて行つた

残ったミズキはアランの後ろを姿を見つめて……

「あなたなら……その誰もが頼る背中を持つてるあなたなら……火影にも成れます……」

私もあなたに救われたのですから……」

そう呟いて消えた……

ただ消える時少し頬が赤かつたらしい……

おまけ（前回の続きを）

「行くわよつかさ」

「あ……待つてお姉ちゃん……！」

ツインテールの少女と短い（肩にかかるぐらい）の少女が玄関から靴を履き出したら……綺麗な銀髪に海みたいに青い目整った顔をした青年……アランがいた

「な……なんで生徒会長が居るのよ……！」

「別に君には関係無いよ」

アランはツインテールの少女……かがみにそつ言つてもう一人の少女……つかさの方をみた

「今日は君がちゃんと登校するのを見るために来たんだよ終つかさ分かったなら速く行くよ」

ג'ז'ז?

「さういふ」

つかさは分けが分からぬながらもアランの言葉に従つて歩き出した  
残つたかがみは……

「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」

つと叫んでいたらしい

ପ୍ରକାଶକ

つかせぢやん格好いい男の子ね……おれかつかせぢやんの彼氏かし

卷之三

あつちゃんは私の監視役ですよ／＼＼＼＼＼

先程から近所からからかわれるつかさ

まあ……アランの容姿だから歩いてる方は皆アランを見るわけで……若い女性はつかさに嫉妬をし近所の……つかさを知ってるおばち

やんなどはつかさをからかつていた

「あら

「ううん、おばちゃんのところにいるのが、うれしいから。」

「だ、駄目だよ！！

「ははは

分かつてるわよ

つかせちゃんの彼氏を奪うなんて野暮な事はしないわよ」「

「だから」

違うつて

それに私が彼女なんてアラン君に迷惑だよう

「あら、分からぬいわよ？」

ねえあなたどう思ひへ

おばちゃんは黙っていたアランにそう聞いた

「別に……迷惑じゃないよ

柊一かさは密姿は良いし性格に問題があるわけでもないしね。……

「あら」

二  
三  
四  
五

アランの言葉に顔を赤くするつかさ

「  
で  
も

まだ会つて間もないからね……付き合ひのはまだ無理だよ」

「確かにねえ……

「アーリー...アーリー~~~~~」

「  
せり

終つかさ行くよ

いつかの恋？が始まる！――――――のか？

第三回 忘却の予選――（後書き）

また生きただなつて？

……ネタが思いつかないんですよ……

では感想を待つてあります――――――

つえ？ 図々しい？ マジですか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7488v/>

NARUTO～転生と始まりと終焉～

2011年11月27日21時46分発行